

平成 24 年度

大阪市内埋蔵文化財包蔵地
発掘調査報告書

2014.3

大阪市教育委員会
(公財)大阪市博物館協会大阪文化財研究所

例 言

1. 本報告書は平成 24 年度の国庫補助事業による大阪市内埋蔵文化財発掘調査の概要を集めたもので、平成 25 年度事業により作成した。
2. これらの調査は大阪市教育委員会が（公財）大阪市博物館協会大阪文化財研究所に委託して実施したものである。
3. 本報告書の執筆は（公財）大阪市博物館協会大阪文化財研究所 南秀雄の指揮のもとに各々の発掘担当者が担当した。その氏名は各報告書に記してある。
4. 本報告書の編集は大阪市教育委員会文化財保護担当において行った。

目 次

北 区

曾根崎遺跡B地点発掘調査 (AZ12-2) 報告書	1
---------------------------	---

福 島 区

野田城跡伝承地発掘調査 (N012-2) 報告書	7
--------------------------	---

中 央 区

大坂城下町跡発掘調査 (0J12-5) 報告書	15
-------------------------	----

大坂城跡発掘調査 (OS12-2) 報告書	25
-----------------------	----

大坂城跡発掘調査 (OS12-37) 報告書	33
------------------------	----

上本町遺跡発掘調査 (UH12-7) 報告書	43
------------------------	----

西心齋橋1丁目所在遺跡発掘調査 (WS12-2) 報告書	55
------------------------------	----

天王寺区

上本町遺跡発掘調査 (UH12-9) 報告書	65
------------------------	----

上本町遺跡発掘調査 (UH12-18) 報告書	71
-------------------------	----

阿倍野区

阿倍寺跡発掘調査 (AB12-4) 報告書	79
-----------------------	----

阿倍野筋南遺跡発掘調査 (AS12-2) 報告書	89
--------------------------	----

東住吉区

桑津遺跡発掘調査 (KW12-2) 報告書	95
-----------------------	----

平 野 区

亀井北遺跡発掘調査 (KK12-2) 報告書	103
------------------------	-----

曾根崎遺跡B地点発掘調査(AZ12-2)報告書

調査個所 大阪市北区曾根崎2丁目57-1ほか6筆
調査面積 約45㎡
調査期間 平成25年2月25日～2月28日
調査主体 公益財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所
調査担当者 次長 南 秀雄

1) 調査に至る経緯と経過

調査地周辺は淀川のデルタ地帯である(図1)。近年の発掘調査によれば、三角州の発達に従って汀線が西漸し、陸地として安定していったようすが窺える。調査地から北600mのCH08-1次調査によれば、紀元前後頃は干潟前縁の潮下帯にあたり、その後陸化し、古墳時代や中世に近辺での居住が推測される[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2010]。東150mの旧曾根崎小学校庭の調査(AZ10-1次)では遅くとも中世後期には陸化し、耕作地として利用されていた[大阪文化財研究所2012]。

調査地周辺の地層データによれば、河川堆積による水成層上面の標高がTP0m以上で、かつAZ10-1次調査地点より東方は、平安時代以降に開発が行われ、徳川期に至るまで生活域ないし墓域として利用されていた。一方、水成層上面の標高がTP0m以下のCH08-1・AZ10-1次調査地等は、中世に開発されるが、基本的に耕作地として利用されていたらしい[大阪文化財研究所2012]。

AZ10-1次調査地東の太融寺一帯には、僧旻が建立した安曇寺があったという説がある[藤沢一夫・梶山彦太郎1988]。中世には太融寺を中心とする集落があり、境内の調査(AZ05-1次)で13世紀を主とする遺構・遺物が出土している[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2006]。また、江戸時代の中国街道はこの集落の中を通過していた。

大阪市教育委員会の試掘結果では、二つのビルに挟まれた幅約3.5mの東西に細長い部分で地層が良好に残っていた(図2)。今次の発掘では、この部分を長さ15mの間掘り下げ、第3層以下は南北に土層観察用の幅を残し、調査した。基準点はMagellan社製ProMark3により測位し、本報告で用いた方位は世界測地系に基づく座標北を基準とした。標高はT.P.値(東京湾平均海面値)でTP±〇mと記した。



図1 調査地位置図



図2 調査区位置図

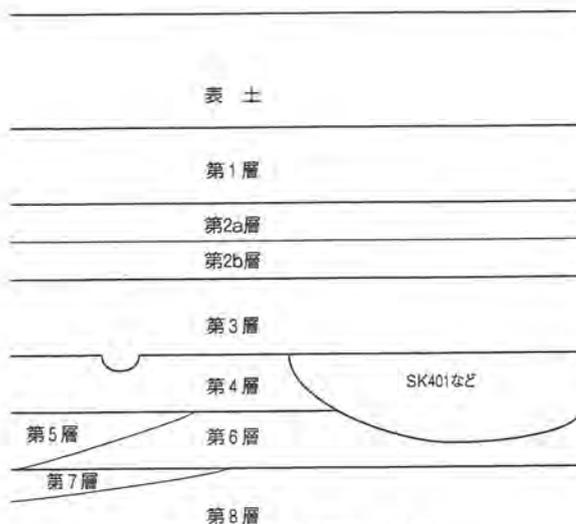


図3 地層と遺構の関係図

2) 調査の結果

i) 層序(図3・4)

現地表の標高はTP+0.3~0.4mである。表土より下を第1層とした。

第1層：オリーブ褐色(2.5Y4/4)中粒砂層で、最大層厚45cmである。近代の盛土である。

第2層：黒褐色(2.5Y3/2)粗粒砂層の第2a層と、暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質粗粒砂層の第2b層からなる。第2a層は層厚20cm、第2b層は15cmである。近世末から近代の畠の作土である。

第3層：暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト質粗粒砂層

で、層厚25~30cmである。畠の作土で、下面に耕作痕がある。最新で18世紀後半~末の陶磁器を包含する。口縁部外面に雷文のある中国産青磁碗なども出土した。

第4層：オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト層で、層厚10~15cmである。近世の陶磁器は出土せず、瓦器などがあり、中世後半の地層と推測される。SK401を境に西は水成層そのまま、東は耕作された可能性もある。

第5層：黒褐色(10YR3/2)粘土層で、最大層厚20cmである。東端のみにある湿地性の堆積層である。遺物は出土していない。

第6層：褐灰色(10YR4/1)シルト~極細粒砂層で、層厚10~30cmである。水成層でラミナが残る。カキメを施す須恵器片が出土した。

第7層：褐灰色(10YR4/1)シルト質細粒砂層で、最大層厚15cmである。東端のみにある水成層で、擾乱されている。遺物は出土していない。

第8層：灰黄色(2.5Y6/2)細粒~中粒砂層で、黒褐色(2.5Y3/1)シルト~細粒砂の薄層を挟む。層厚は80cm以上である。第8~6層は河川の堆積層である。第8層の中・下部は基本的に北から南への流向で、上部は北西から南東へ低くなる堆積が見られる。古代以前の須恵器・土師器の小片が出土した。

南壁断面の下端より60~70cm下に濃い灰色の砂層が見え、貝が出土した。

ii) 遺構と遺物

出土遺物は少量で、図化できない小片である。

第5層上面では、東端に小規模な凹みがあったのみである。深さは0.1m以下である。

第4層上面には、東側に幅3.3mで凹むSK401、東西方向のSD402・403、SK405などがあった(図4)。SK401は西側の幅1.50mの部分が深くなり、深さ0.25mある。埋土は第3層と似て、シルトの偽礫を含む。出土陶磁器は17世紀後半以降のものである。SD402は長さ2.8m以上、幅0.4~0.5m、深さ0.15mである。埋土はSK401と類似する。SK401・SD402の性格はよくわからないが、耕作に関する遺構と推測する。

SD403は鋤溝であろう。SK404は不整形の浅い凹みで、SK405は直に落ち、深さ0.5m以上ある。

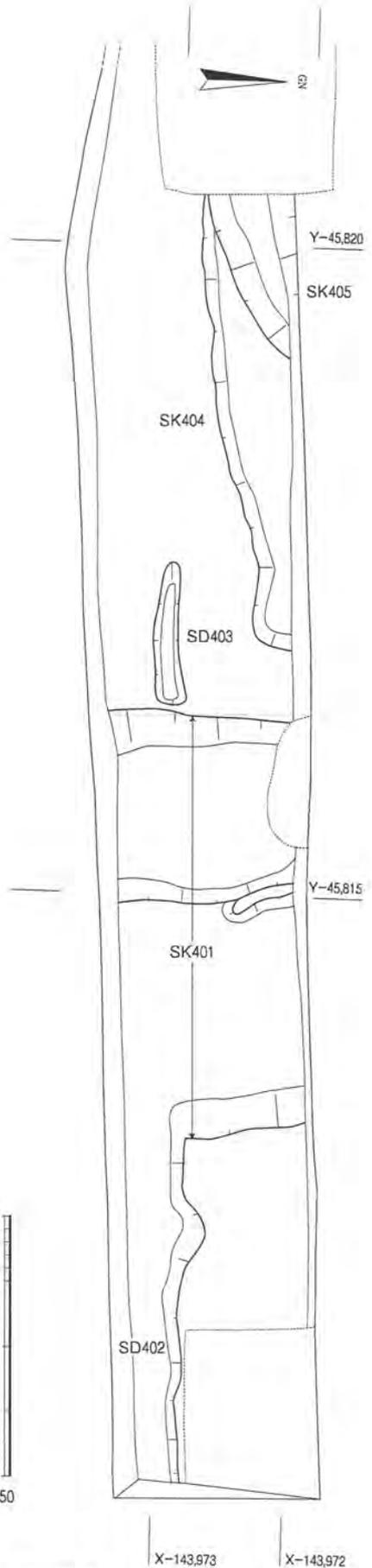
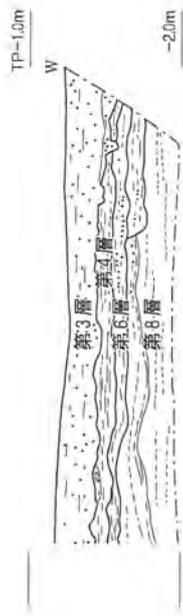


图4 南壁断面图と第4層上面平面図

3)まとめ

調査地点は、河川によって運ばれた第8～6層の堆積により陸化した。第4層である中世後半には安定し、近世以降は耕作地として利用された。これは東のAZ10-1次調査の知見や推定と合っている。西(海)側になる当地の地層は、総体的にAZ10-1次調査のそれより0.5～1m低い。

参考文献

- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2006、「安曇寺跡推定地発掘調査(AZ05-1)報告書」：『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2005)』、pp.3-22
- 2010、「北区茶屋町における建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査(CH08-1)報告書」：『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2008)』、pp.3-10
- 大阪文化財研究所2012、『曾根崎遺跡発掘調査報告』
- 藤沢一夫・梶山彦太郎1988、「安曇寺跡と渡辺別所」：大阪市教育委員会文化振興課編『大阪市文化財年報』昭和61年、pp.22-29

調査区を北東から望む



第4層上面
(東から)



南壁地層断面



野田城跡伝承地発掘調査(NO12-2)報告書

調査個所 大阪市福島区玉川4丁目91-3
調査面積 25㎡
調査期間 平成24年4月25日～4月28日
調査主体 公益財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所
調査担当者 次長 南 秀雄、岡村勝行

1) 調査に至る経緯と経過

調査地は周知の埋蔵文化財包蔵地である野田城跡伝承地の中央やや南西寄りに位置する。野田城は淀川デルタの中州を利用した砦で、『信長公記』などによれば、1570(元龜元)年に三好三人衆によって築かれたとされる。また、織田信長の本願寺攻めの際には、信長方の武将荒木村重がこの砦を利用し、さらに大坂ノ陣では、大坂方の大野治胤がこの地を守ったと伝わる[井上正雄1992]。

野田城跡伝承地内で初の本格調査であるNO07-1次調査では、中世末～近世初頭と見られる堀状遺構が検出され、文献史料・伝承から推定されていた中世末の野田城が初めてその一端を現した[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2008]。堀状遺構を覆う17世紀初頭の整地層からは、食料として採集されたヤマトシジミ、ハマグリ等の殻が出土した。こうした貝殻はこの整地層上面に広がる18～19世紀代の生活面においても出土しており、近世野田集落と漁労との結びつきを示唆している。その後、伝承地内の南寄り、今回の調査地から90m南で行われたNO11-1次調査では、15世紀代の耕作地、貝塚が発見され、野田城以前の集落の存在が初めて明らかになった。一方、中世末～近世初頭の遺構・遺物はまったく見られず、伝承地内でも地域により、内容が異なる状況が窺える[大阪文化財研究所2012]。

大阪市教育委員会が平成24年4月10日に行った試掘調査の結果、現地表下約0.6m以下の深さで室町～江戸時代の遺物包含層および遺構面が検出され、本調査を実施することになった。4月25日、調査区を旧建物による破壊が少ない敷地北東寄りに幅4m、長さ5mで設定した。重機で近現代盛土層の掘削を開始したが、試掘結果で確認した地層が同じ深さで見当たらなかった。地層観察・対比の結果、調査区全体が堀状遺構内におさまっていることが判明したため、調査区南側の一部を試掘地の西

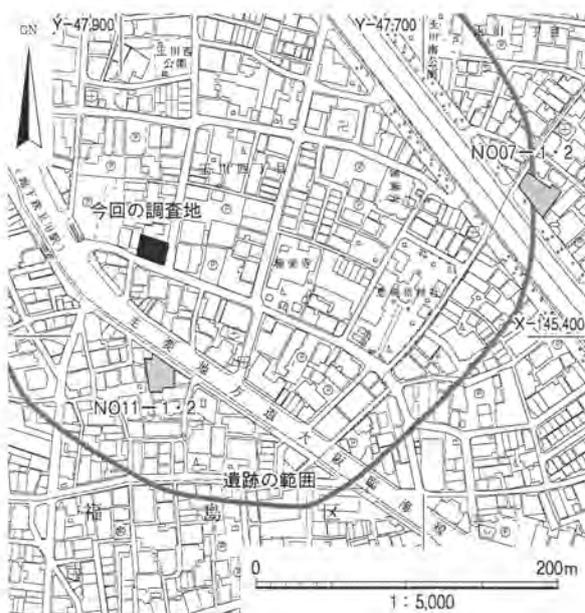


図1 調査地の位置

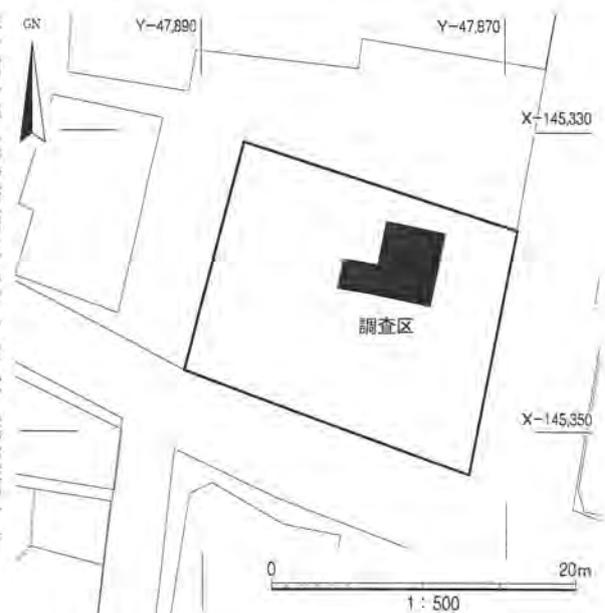


図2 調査区の位置

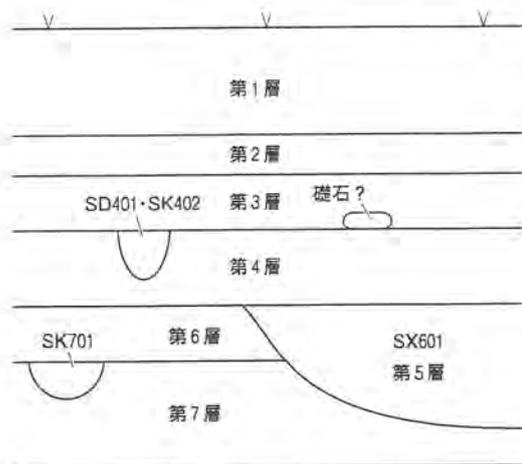


図3 地層と遺構の関係図

方に向けて拡張した。その後、慎重に人力によって掘り下げながら、遺構・遺物の検出に努め、随時、写真・図面で遺構・地層の記録を行った。機材の撤収などの作業を含め、28日に現地におけるすべての作業を終え、発掘調査を完了した。

また、本報告書で用いた方位は、現場で記録した街区図を1/2500大阪市デジタル地図に合成することにより得た世界測地系座標に基づき、座標北を基準にした。標高はT.P.値(東京湾平均海面値)でTP±〇mと記した。

2) 調査の結果

i) 層序(図3・4)

敷地の現地表面の標高はTP-0.6m前後とほぼ平坦である。調査は全体的には現地表下1.4m (TP-2.0m)まで、南壁沿いでは2.7m (TP-3.3m)まで深掘し、地層を観察した。地層は大きく7層に分けられ、各層の特徴は次のとおりである。

第1層：近現代の盛土ならびに攪乱層で、層厚は40～130cmである。

第2層：オリーブ黄色(5Y6/3)粗粒砂からなる盛土層で、層厚は5～15cmである。拡張区でのみ確認し、遺物は出土しなかった。

第3層：炭、焼土、偽礫が混じる暗褐色(10YR3/3)細粒砂質シルトからなる盛土層で、層厚は約40cmである。拡張区でのみ確認し、遺物は出土しなかった。

第4層：シルト偽礫を多く含む暗褐色(10YR3/3)細粒砂質シルトからなる盛土層で、層厚は55～80cmである。17世紀初頭から後半の陶磁器を含む。上面で18世紀後半の遺物を含むSD401・SK402を検出した。

第5層：ヤマトシジミ、ハマグリを含むオリーブ黒色(5Y3/2)細粒砂質シルトからなるSX601の埋土で、層厚100cm以上である。水分を多く含み、しまりが悪い。15世紀代と考えられる瓦質土器羽釜、中国産青磁蓮弁文碗1が出土したが、下位の第6・7層が16世紀代の遺物を含むことから、それ以降の堆積と考えられる。

第6層：暗オリーブ褐色(5Y4/2)細粒砂質シルトからなる暗色帯で、層厚は約20cmである。土師器皿、瓦質土器羽釜のほか、16世紀代の土師器羽釜の小片が出土した。上面でSX601を検出した。

第7層：暗オリーブ色(5Y4/3)細粒砂質シルトからなる盛土層で、層厚は20cm以上である。しまりが悪く、下位に水漬き層の存在が想定される。16世紀代に位置づけられる土師器鍋、15世紀代の瓦質土器羽釜2が出土した。上面でSK701を検出した。

ii) 遺構と遺物(図4・5)

a. 中世末の遺構と遺物

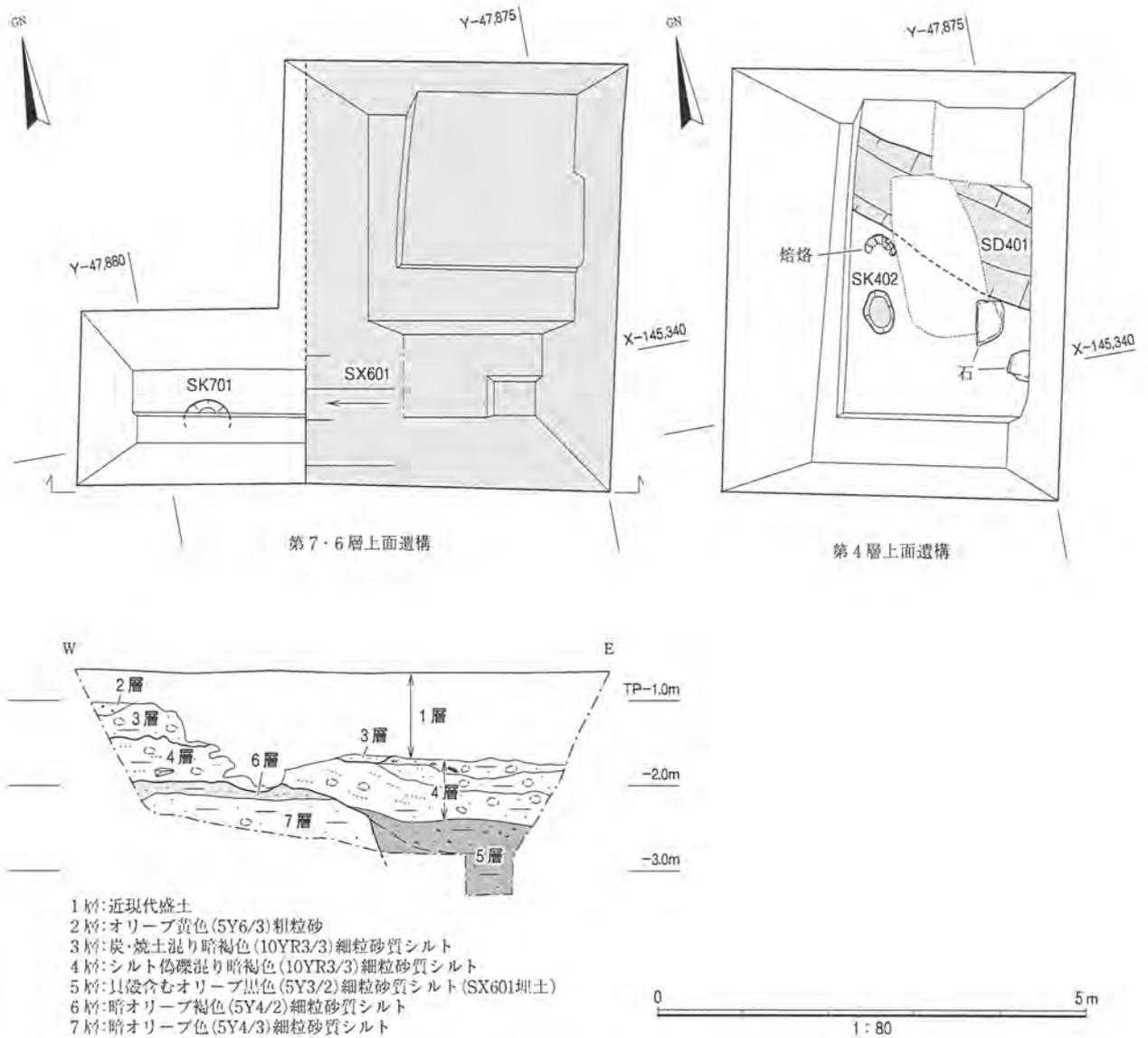


図4 調査区平面・南壁地層断面図

SK701 拡張区の第7層上面で検出された土壌で、長さ0.5m、幅0.4m、深さ0.2mである。埋土は暗オリーブ褐色(5Y4/2)細粒砂質シルトである。遺物は確認できなかった。

SX601 第6層上面で検出された堀状遺構で、南北長5m以上、東西幅4.4m以上、深さは1.3m以上である。埋土である第5層の全体から、ヤマトシジミ、ハマグリが出土した。瓦質土器羽釜の小片、中国産青磁蓮弁文碗1がある。ともに15世紀代に位置づけられるが、第6層が16世紀代の遺物を含むため、遺構の埋没時期はそれ以降と考えられる。

b. 近世の遺構と遺物

第4層上面で土壌、溝、礎石の可能性ある石などを検出した。

SD401 調査区北部を北西-南東方向に走る溝で、幅1.0~1.2m、深さ0.2mである。肥前磁器、丸瓦など18世紀後半の遺物が出土した。

SK402 長さ0.5m、幅0.4m、深さ0.1mの楕円形の土壌である。中には、瀬戸美濃焼陶器盤、丹波

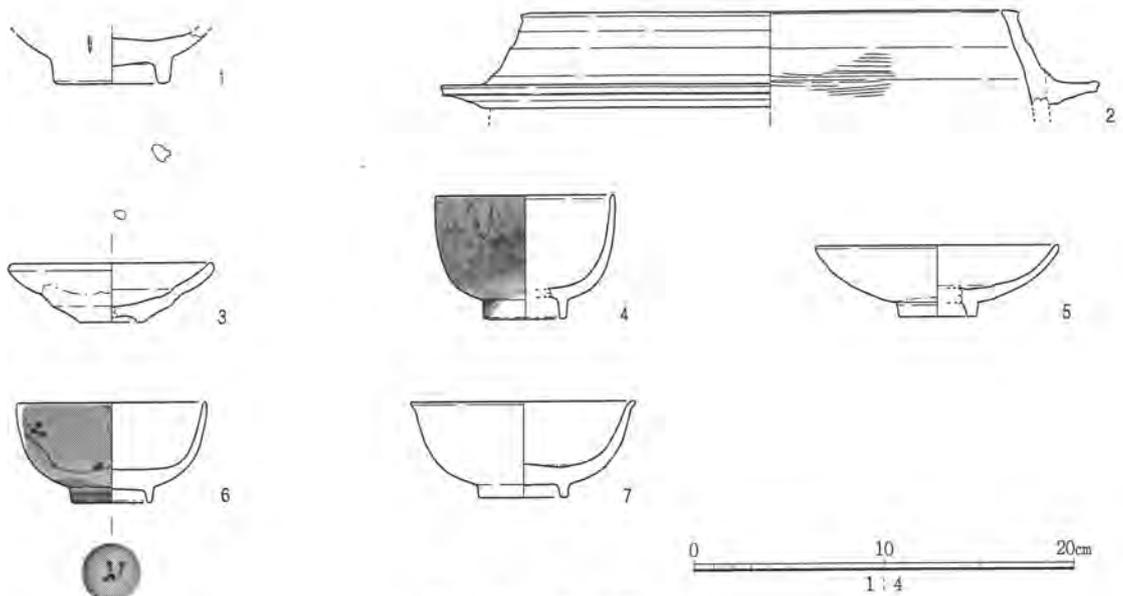


図5 出土遺物実測図

SX601(1)、第7層(2)、第4層(3～5)、SK402(6・7)

焼德利、備前焼鉢、肥前磁器染付碗・肥前白磁端反碗7などが投棄されていた。6は外面に雪輪梅枝文、高台内には「大明年製」銘の崩れたものが描かれ、18世紀前半に位置づけられる。7は18世紀前半から中頃のもので、底部内面は蛇ノ目釉剥ぎされる。

その他の遺構 調査区南東部で、礎石の可能性のある上面が平坦な石を2個検出した。前者は長さ50cm、幅30cmである。また、SK402の北側で、土師器焙烙を検出した。難波分類のD類に当たる[難波洋三1992]。約半個体で、投棄された可能性が高い。

第4層出土遺物 肥前陶器灰釉皿3、肥前磁器染付碗4・青磁皿5などがある。3は内面底部に胎土目痕が残り、17世紀初頭に位置づけられる。4は外面に一重網目文に魚を描く。5は高台が無釉で、底部内面は蛇ノ目釉剥ぎされる。前者は17世紀中頃、後者は17世紀後半に位置づけられる。

3)まとめ

今回の調査では、16世紀代に埋没した可能性が高い堀状遺構の一端を検出した。全体の規模は明らかではないが、ベースとなった第6層以下もさらに大きな堀状遺構の埋土である可能性がある。SX601埋土には15世紀に遡る遺物も少なくなく、掘削時期を反映しているのかも知れない。NO11-1次調査の成果と合わせると、15世紀がこの地における人間活動の画期となっているようである。

SX601全体を覆う盛土(第4層)は、17世紀後半以降の可能性が高く、その上面には18世紀以降の近世集落が広く展開している状況が窺える。

今回の調査は小規模ながら、野田城の前史、近世野田集落の実像に近づく成果が得られた。

引用・参考文献

井上正雄1992、『大阪府全誌』卷之二 清文堂出版、pp.1198-1199

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2008、「野田城跡伝承地発掘調査(NO07-2)報告書」：『平成19年度 大阪市
内埋蔵文化財包蔵地調査報告書』、pp.15-23

大阪文化財研究所2012、「株式会社プレサンスコーポレーションによる福島区野田三丁目における建設工事に伴う野
田城跡伝承地発掘調査(NO11-1)報告書」

奥野高弘・岩沢愿彦校注1969、『信長公記』、角川書店

櫻井久之2008、「福島区野田城伝承地 初の本格調査」：大阪市文化財協会編『葦火』135号、pp.4-5

難波洋三1992、「徳川氏大坂城期の炮烙」：大阪市文化財協会編『難波宮址の研究 第九』、pp.373-400

SX601断面(北から)



第7層上面SK701
検出状況(南東から)



第4層上面遺構検出
状況(北から)



大坂城下町跡発掘調査(OJ12-5)報告書

調査個所 大阪市中央区北久宝寺町2丁目38-2・38-13の各一部
調査面積 21㎡
調査期間 平成24年6月4日～6月6日
調査主体 公益財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所
調査担当者 次長 南秀雄、田中清美

1) 調査に至る経緯と経過

調査地は豊臣期大坂城下町(船場)の西南端近くに位置し、北久宝寺通に北面している(図1)。調査地近隣でこれまでに実施されたおもな調査では、西側にあるOJ07-8次調査地で豊臣~徳川期の土壙群や遺物が検出されたほか[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2009]、OJ09-1次調査地でも庄内~布留式期の古式土師器や管状の土錘を伴う大小の土壙が検出され、当地域に弥生時代終末~古墳時代前期初頭の集落が存在することが判明している[大阪市文化財協会2009]。また、調査地の東側に位置するOJ08-5次調査地では豊臣期の排水溝や土壙、徳川期の土壙など、城下町跡関連の遺構・遺物が検出されている[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2010]。本調査に先駆けて大阪市教育委員会が実施した試掘調査でも、豊臣~徳川期の遺物や遺構の一部が確認されたため、今回の調査を実施することになった。

調査は、平成24年6月4日に敷地南部に調査区(東西7.0m、南北3.0m)を設定することから着手した(図2)。大阪市教育委員会と原因者間で行われた協議に基づき、現地表面下1.8m前後の調査面まで予め重機による掘削が完了していたので、人力による掘削は第1層から着手した。6月5日に第2層上面の遺構の調査を終えたあと、引き続き第3層上面の遺構の調査を実施し、6月6日には調査区の東壁沿いにトレンチを入れて第3層以下の地層の堆積状態の観察と記録を行い、すべての調査を完了した。

本報告で用いた方位は、現地で記録した調査地周辺の街区図を1/2500大阪市デジタル地図に合成することにより得た世界測地系座標に基づく座標北を基準とした。標高はT.P.値(東京湾平均海面値)で、本文・図中ではTP+〇mとした。



図1 今回の調査地



図2 調査区の配置図

2) 調査の結果

i) 層序

現地表面の標高はTP+4 m前後で、ほぼ平坦である。本調査では先述したように予め重機で掘削されていた地層以下で第1～4層の各層を確認した(図3・4)。

第1層：黒褐色(2.5Y3/2)シルト質細粒砂で、層厚は5～10cmある。徳川期の陶磁器・瓦のほか、近代のレンガ片を含む。機械掘削時の攪乱層である。

第2層：オリーブ褐色(2.5Y4/4)シルト質細粒砂・黒褐色(10YR3/2)シルト質細粒砂で、層厚は5～10cmある。本層は炭片および焼土を含み、豊臣期の陶磁器の細片が出土した。大坂冬ノ陣被災時の地層の可能性が高い。徳川期の土壘・井戸・礎石などの遺構はすべて本層の上面で検出した(図3・4・6)。

第3層：本層は炭化物を多く含む灰黄褐色(10YR4/2)シルト質細粒砂・黒褐色(10YR3/2)シルト質細粒砂・にぶい黄褐色(10YR5/4)細粒～中粒砂・にぶい黄褐色(10YR5/4)中礫質粗粒砂層からなる整地層で、層厚は90cm前後ある。本層の上部は酸化鉄が顕著で、硬くしまっており、判読不明の銅銭や古墳時代後期の土師器・須恵器、豊臣期の土師器および瓦の細片を含むことから、豊臣期の整地層と考える。本層上面の標高はTP+2 m前後あり、ほぼ平坦な面をなす。上面で柱穴・土壘・溝・石敷などの遺構を検出した(図3～5)。

第4層：にぶい黄褐色(10YR5/4)中礫質細粒砂・褐色(10YR4/6)中粒砂・にぶい黄褐色(10YR5/4)中礫質細礫層からなる河成層である。本層の層厚は50cm以上ある。北から南に傾斜した砂粒のラミナが観察された。

ii) 遺構と遺物

本調査では上述したように第2層上面で徳川期・第3層上面で豊臣期の遺構を検出したが、豊臣期の遺構は、上層の徳川期の井戸や土壘の掘込みで破壊されて残りは悪い。以下に第2・3層上面のおもな遺構について順を追って述べる。

a) 豊臣期の遺構と遺物

SP301・302・305・308・309・311～315 柱穴の可能性のあるもので、直径0.1～0.2m前後のSP301・314、直径0.3m以上のSP302・305・312～313のほか、楕円形あるいは不整形なSP308・309・311などがある(図5)。おもな埋土は、褐色(10YR4/4)シルト質細粒砂で、いずれも柱は抜き取られており、遺物が出土したのも少ない。

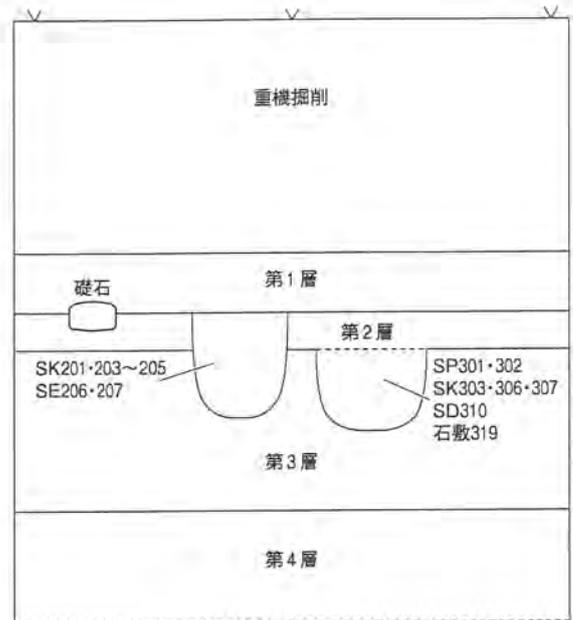
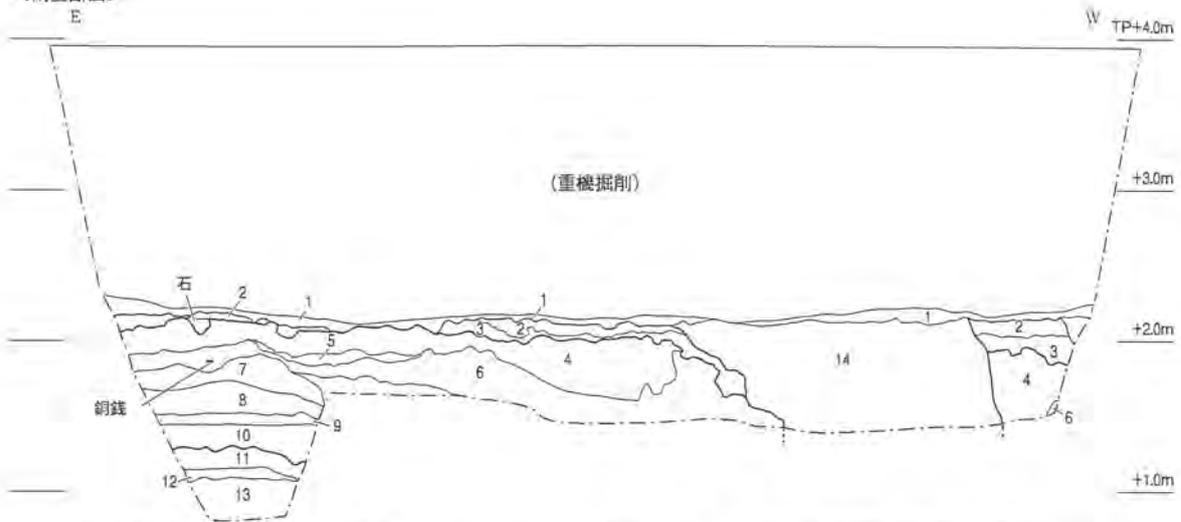


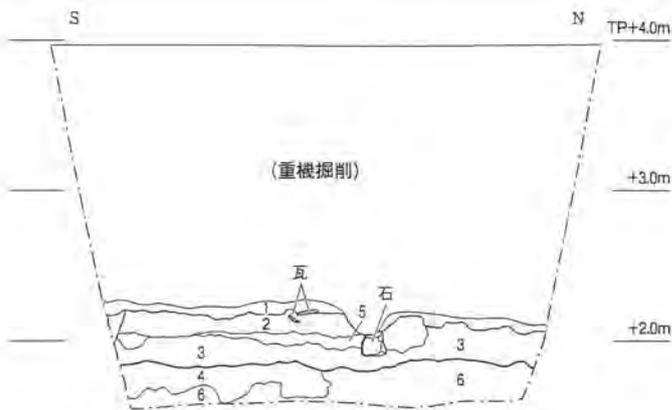
図3 地層と遺構の関係図

<南壁断面>
E



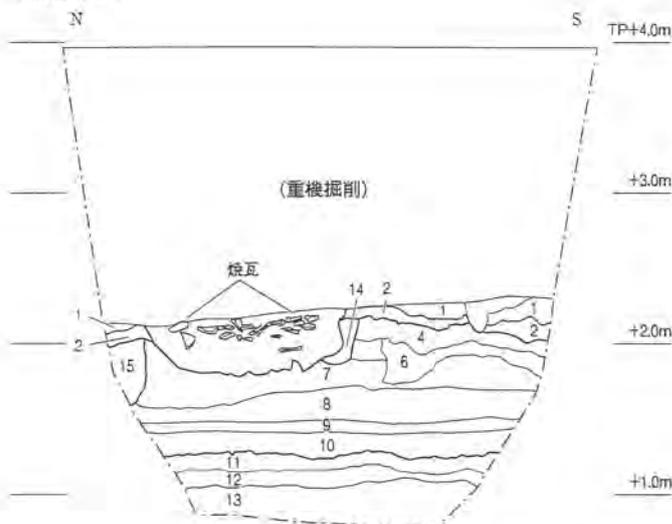
- | | |
|---------------------------------------|-----------------------------------|
| 1: 黒褐色(2.5Y3/2)シルト質細粒砂(第1層) | 8: にぶい黄褐色(10YR5/4)中礫質粗粒砂(第3層) |
| 2: オリーブ褐色(2.5Y4/4)シルト質細粒砂(第2層) | 9: にぶい黄褐色(10YR5/4)中礫質細粒砂~細粒砂(第3層) |
| 3: 黒褐色(10YR3/2)シルト質細粒砂(焼土・炭化物を含む:第2層) | 10: にぶい黄褐色(10YR5/4)中礫質細粒砂(第3層) |
| 4: 灰黄褐色(10YR4/2)シルト質細粒砂(第3層) | 11: にぶい黄褐色(10YR5/4)中礫質細粒砂(第4層) |
| 5: 黒褐色(10YR3/2)シルト質細粒砂(第3層) | 12: 褐色(10YR4/6)中粒砂(第4層) |
| 6: にぶい黄褐色(10YR5/4)細粒~中粒砂(第3層) | 13: にぶい黄褐色(10YR5/4)中礫質細礫(第4層) |
| 7: 黄褐色(10YR5/6)中粒~細粒砂(第3層) | 14: 黒褐色(10YR3/1)シルト質細粒砂(井戸の埋土) |

<西壁断面>
S



- | |
|---------------------------------------|
| 1: 黒褐色(2.5Y3/2)シルト質細粒砂(第1層) |
| 2: オリーブ褐色(2.5Y4/4)シルト質細粒砂(第2層) |
| 3: 黒褐色(10YR3/2)シルト質細粒砂(焼土・炭化物を含む:第2層) |
| 4: 灰黄褐色(10YR4/2)シルト質細粒砂(第3層) |
| 5: 黒褐色(10YR3/2)シルト質細粒砂(第2層) |
| 6: にぶい黄褐色(10YR5/4)細粒~中粒砂(第3層) |

<東壁断面>
N



- | |
|-----------------------------------|
| 1: 黒褐色(2.5Y3/2)シルト質細粒砂(第1層) |
| 2: オリーブ褐色(2.5Y4/4)シルト質細粒砂(第2層) |
| 4: 灰黄褐色(10YR4/2)シルト質細粒砂(第3層) |
| 6: にぶい黄褐色(10YR5/4)細粒~中粒砂(第3層) |
| 7: 黄褐色(10YR5/6)中粒~細粒砂(第3層) |
| 8: にぶい黄褐色(10YR5/4)中礫質粗粒砂(第3層) |
| 9: にぶい黄褐色(10YR5/4)中礫質細粒砂~細粒砂(第3層) |
| 10: にぶい黄褐色(10YR5/4)中礫質細粒砂(第3層) |
| 11: にぶい黄褐色(10YR5/4)中礫質細粒砂(第4層) |
| 12: 褐色(10YR4/6)中粒砂(第4層) |
| 13: にぶい黄褐色(10YR5/4)中礫質細礫(第4層) |
| 14: 褐色(10YR4/4)シルト質細粒砂(溝の埋土) |
| 15: 褐色(10YR4/4)シルト質細粒砂(土壌の埋土) |

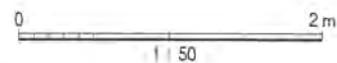


図4 地層断面図

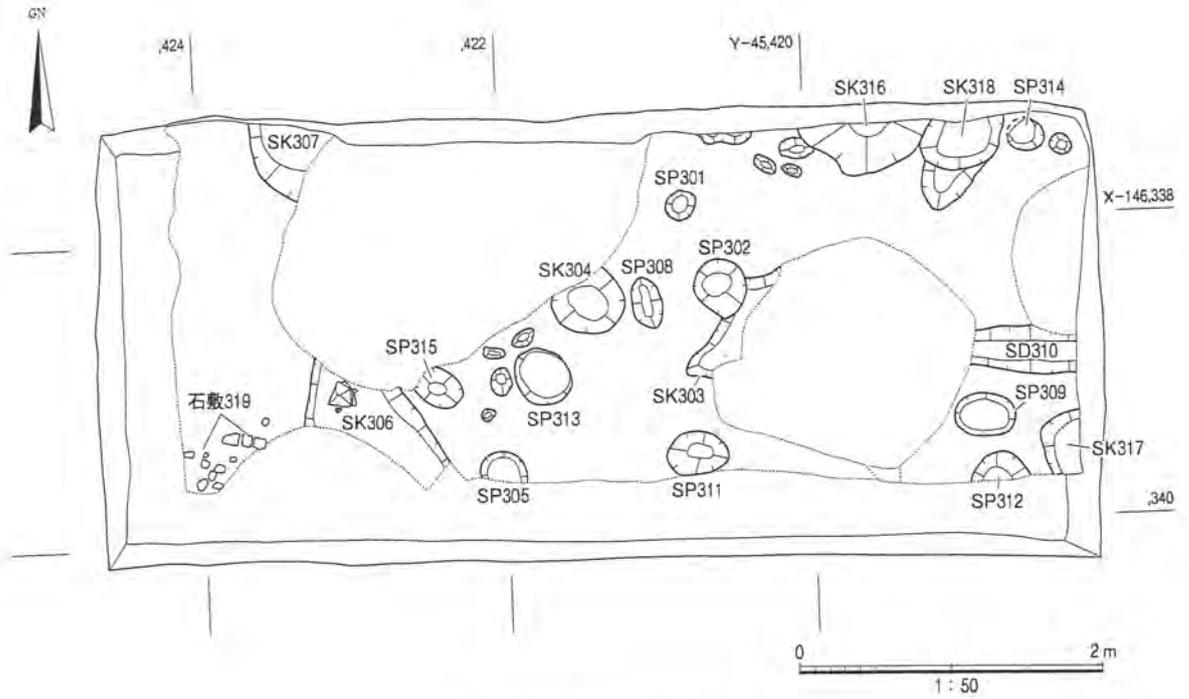


図5 第3層上面遺構配置図

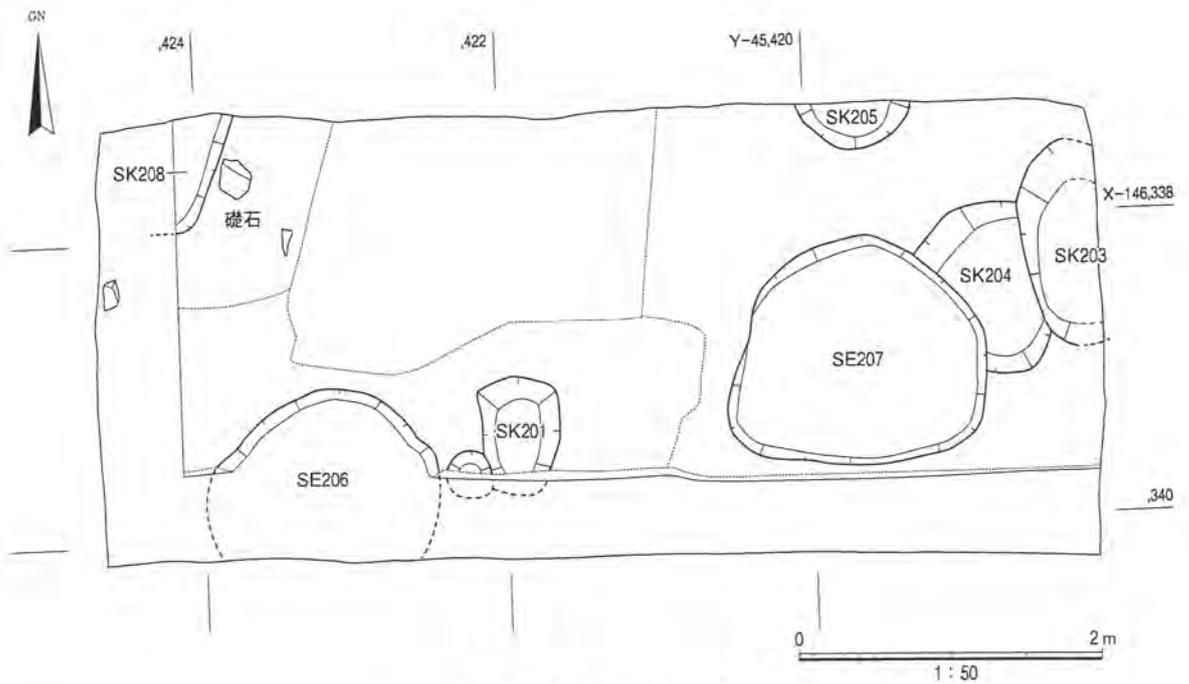


図6 第2層上面遺構配置図

SK303 調査区の東部に位置する浅い土壌で、徳川期の遺構に壊されており、形状は明らかでない。埋土は暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)シルト質細粒砂で、人頭大の石や庄内式期の土器片が出土した(図7)。

1は甕の底部片で、外面を細筋の平行タタキで整形している。庄内2～4期に属するもので混入品である。

SK304 調査区の中央部に位置する径約0.5m、深さ約0.3mの土壌である(図5)。埋土は褐色

(10YR4/4)細粒砂質シルトで、土師器が出土した。

2は底径20.6cmの土師器甕で、器体の外面を左上がりの平行タタキで整形しており、内面は横方向のハケで調整している(図7)。器体の内外面に煤が付着しており、竈の部材に転用された可能性がある。

SD310 調査区の東部に位置する幅0.2~0.3m、深さ0.3mの東西方向の溝である。溝内の埋土は褐色(10YR4/4)シルト質細粒砂であるが、水が流れた形跡はなく、遺物も見られなかった。

石敷319 調査区の西部で検出した平瓦片が混在する石敷である(図5)。石敷の大半が調査範囲外のため、その性格については明らかでない。

b)徳川期の遺構と遺物

第2層の上面ではSK201・203~205・208、礎石、SE206・207などを検出した(図6)。以下、遺物が出土した遺構について記述する。

SK203 調査区の東端に位置する東西0.5m以上、南北1.4m、深さ0.4mの土壌で、遺構の大半は調査範囲外である。埋土は赤褐色(5YR4/6)シルト質細粒砂で、焼土・炭片を多量に含む下層と焼瓦を多量に含む上層に二分される。

3は肥前陶器呉器手碗で、釉薬は黄褐色に発色する。4は備前焼壺で、外面は被熱のためか、胎土中の礫がはぜている。5は瓦当径15cmの巴文軒丸瓦である。瓦当面には離れ砂が残る。これらの遺物は17世紀後半に属するものと考えられる。

SK204 調査区の東部に位置する土壌で、掘形の東側をSK203に、同西側をSE207に掘り込まれている(図6)。埋土は黒褐色(2.5Y3/1)シルト質細粒砂で、肥前陶器・肥前磁器・肥前陶胎染付・備前焼などが出土した(図7)。

6・11・12・14は肥前磁器染付碗である。11・14はコンニャク印判、6・12は手描きによる文様を施す。高台径が小さく、高台内に圏線と銘が見られるなど、18世紀初頭の様相を示す。7~9・13・15・16は肥前陶器で、7・13・15・16は刷毛目文碗、8・9は陶胎染付碗である。刷毛目文碗7・15・16は内外面とも打ち刷毛により文様を施すが、7の口縁部外面には薄い鉄化粧をしている。いずれも器壁が薄く、ていねいな作りであり、図化した以外にも複数個体出土している。13は腰の張った筒形の碗で、外面は横方向の刷毛目文、内面には打ち刷毛目による文様がある。陶胎染付碗8・9は、刷毛目文碗13と同形態である。体部には唐草文が描かれている。10は口径10.8cmの土師器灯明皿で、口縁部には灯芯の痕跡が複数ある。17は土師器播鉢で、底部内面は剥離が著しい。播目は櫛搔きによっており、櫛目は12本単位である。

以上の出土遺物を概観すると、SK203の遺物は18世紀前葉に廃棄されたものと考えられる。

SK208 調査区の西北端に位置する浅い土壌で、遺構の大半は調査範囲外である(図6)。埋土は黒褐色(10YR3/2)シルト質細粒砂で、土師器や煙管が出土した(図7)。

22・23は手づくね成形の土師器灯明皿で、口径は前者が10cm、後者は9.8cmある。ともに底部の内面に強いヨコナデを加えており、圏線が巡る。24は金属製煙管の雁首部である。火皿部には煙草が残っている。

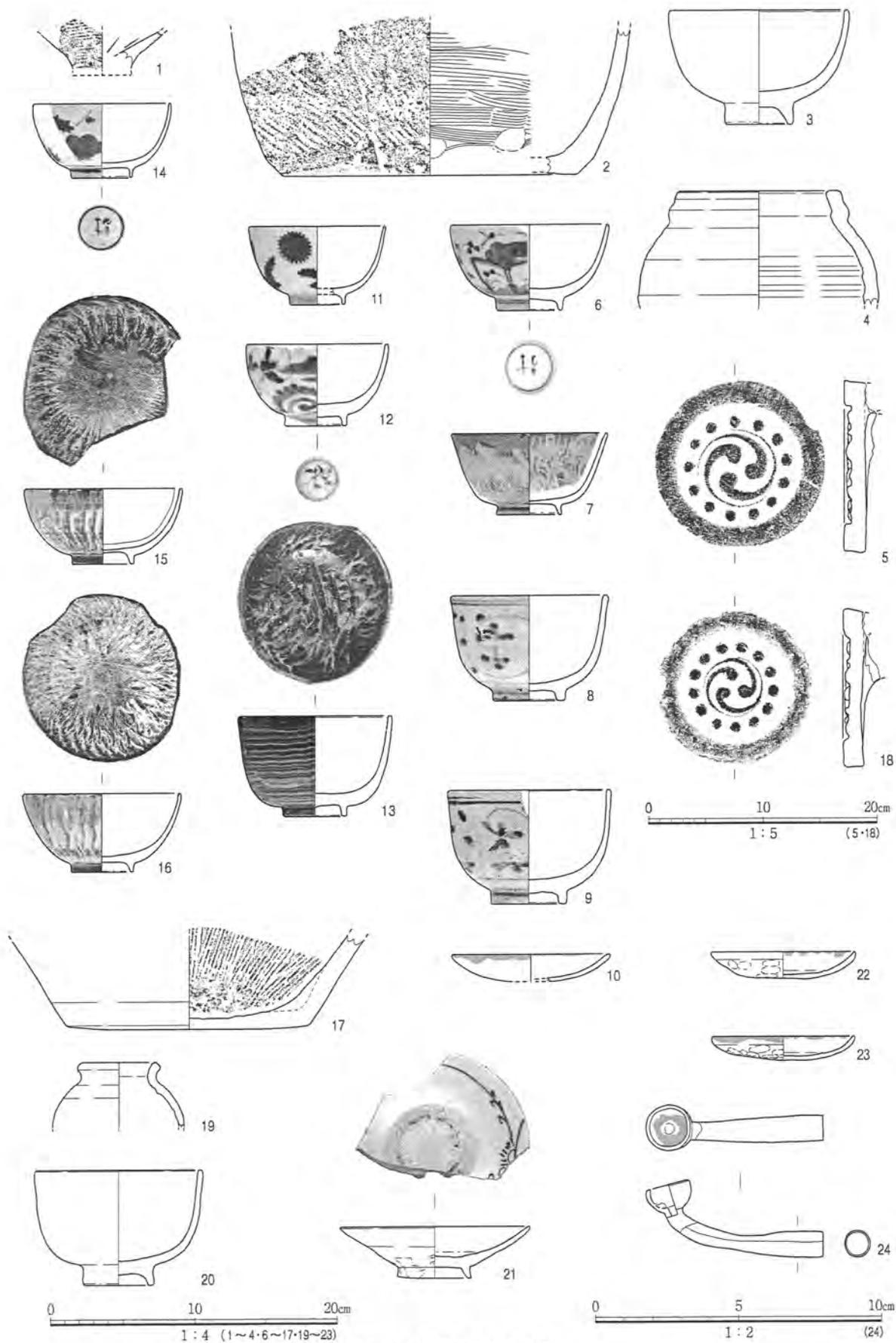


图7 遺構出土遺物実測図

1: SK303、2: SK304、3~5: SK203、6~17: SK204、18~21: SE206、22~24: SK208

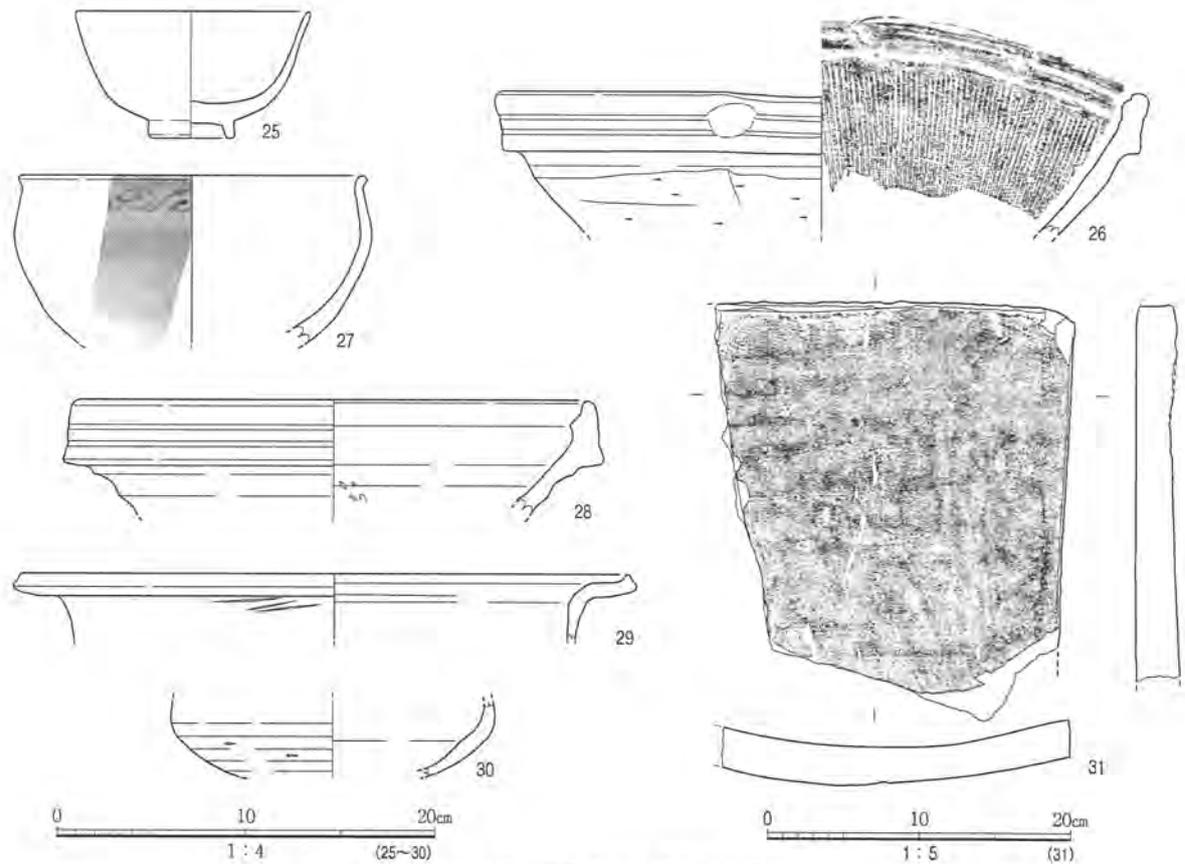


図8 第1～3層出土遺物実測図

25・26：第1層、27～29：第2層、30・31：第3層

SE206 調査区の西南部に位置する井戸で、掘形は直径1.5m前後あり、井戸側の上部は後世に破壊されていた。

21は肥前磁器染付皿である。高台は無釉で、底部内面は蛇の目釉剥ぎを施す。体部内面には菊花文を描く。19・20は肥前陶器である。19は灰釉壺である。外面には褐色に発色する灰釉を掛けるが、ほとんど剥離している。生産地については決めてはないが、轆轤の回転が左回転であるため肥前陶器とした。内面には鉄分が付着しており、お歯黒壺として使っている。20は呉器手碗で、高台の端部以外に灰釉を掛ける。18は瓦当径14cmの巴文軒丸瓦で、瓦当面に雲母が付くなど、他の遺物より新しい様相を示す。

以上のようにSE206の出土遺物は、17世紀後半に属するものが主体を占めるが、井戸側内の埋土上層から軒丸瓦18や18世紀後半の青磁染付碗が出土していることから、井戸の埋没年代は18世紀後半頃と考えられる。

iii) 各層出土の遺物

次に各層から出土した遺物について第1層から順を追って記述する(図8)。

25・26は第1層から出土したものである。25は肥前陶器灰釉碗で、口縁部は緩やかに開く。高台内は無釉である。26は口径34.9cmの堺焼系播鉢で、口縁部には片口がある。これらは17世紀末～18世紀前葉に属するものである。27～29は第2層から出土したものである。27は肥前磁器染付鉢である。口縁部外面に唐草文を描く。28は備前焼播鉢である。口縁部の形態は断面三角形を呈しており、17世紀

前葉の様相を示す。29は口径33.0cmの大和産の土師器鍋もしくは釜である。体部の調整は外面がヘラケズリ、内面はヨコナデである。これらは17世紀前～中葉に属するものである。30・31は第3層から出土しており、30は須恵器壺あるいは瓶の底部であろう。31は平瓦の断片で、凹面をナデ整えている。以上のほかにも図化しなかったが第3層の上部から17世紀前葉に属する土師器片が出土している。

3)まとめ

今回の調査は狭小な範囲ではあったが、豊臣期の整地層をはじめ、遺構・遺物を検出した。豊臣期の遺構や遺物はさほど確認されなかったが、中橋筋の東に位置するOJ08-5次調査地の豊臣期の遺構の分布状況を考慮すれば、少なくとも調査地が豊臣期城下町跡の南端近くに位置することが解る。さらに本調査で出土した庄内式期の土器片は、調査地周辺でこれまでに確認されている弥生時代終末から古墳時代前期初頭の集落が調査地あたりまで拡がることを示唆している。

一方、徳川期のSK204・208およびSE206から出土した肥前陶器・肥前磁器・肥前陶胎染付などは、17世紀末～18世紀初頭の船場地域の陶磁器研究の基礎的な資料となろう。今後、調査地の周辺部における発掘調査が進展すれば豊臣期城下町跡の南限について、また、それ以前の遺跡の実態についても明らかになるものと思われる。

参考文献

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2009、「大阪城下町跡発掘調査(OJ07-8)報告書」：『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2007)』

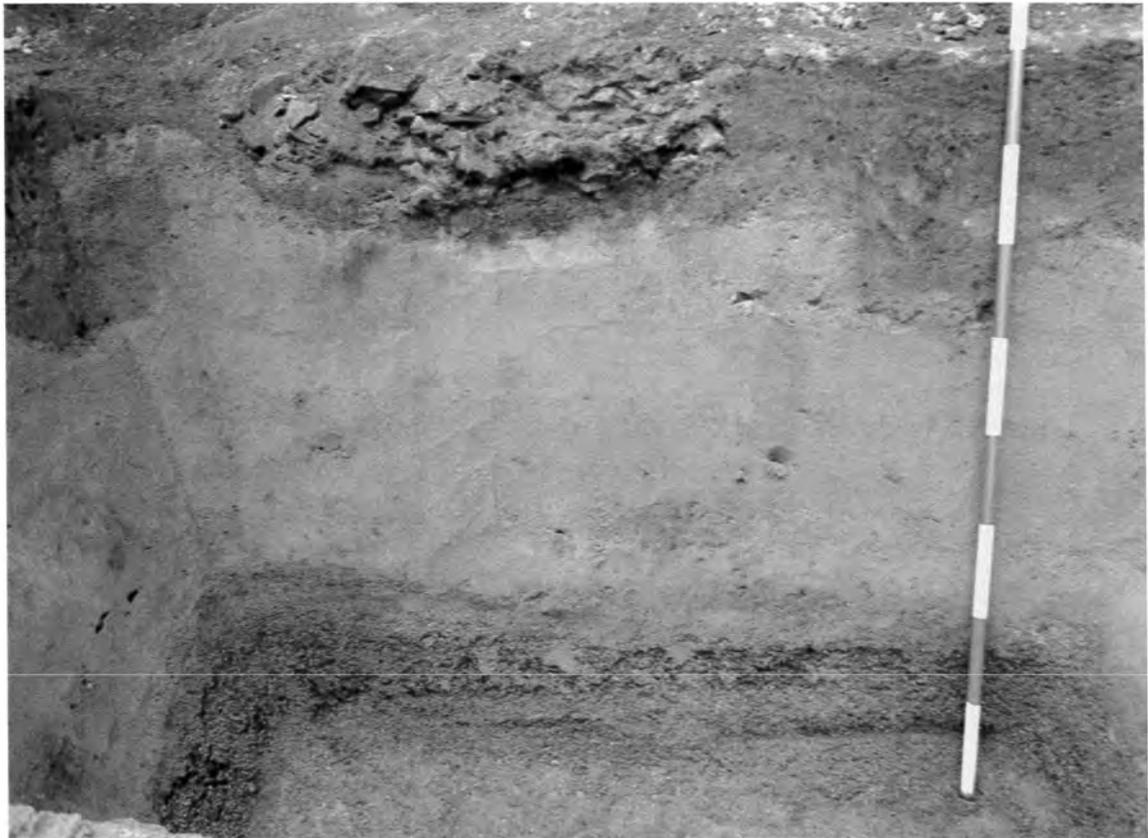
2010、「大阪城下町跡発掘調査(OJ08-5)報告書」：『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2008)』

大阪市文化財協会2009、「辰野株式会社による建設工事に伴う大坂城下町跡発掘調査(OJ09-1)報告書」

大阪文化財研究所2012、「中央区久宝寺一丁目における建設工事に伴う大坂城下町跡発掘調査(OJ11-4)報告書」



南壁地層断面(北から)



東壁地層断面(西から)



第3層上面遺構全景(西南から)



第2層上面遺構全景(西南から)

大坂城跡発掘調査(OS12-2)報告書

調査個所 大阪市中央区内平野町1丁目17
調査面積 約16㎡
調査期間 平成24年4月17日～4月18日
調査主体 公益財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所
調査担当者 次長 南 秀雄、谷崎仁美

1) 調査に至る経緯と経過

調査地は特別史跡大坂城跡の西500mに位置する(図1)。上町台地の西側斜面に当るが、付近はやや広い平坦面をつくっている。ただし、旧地形では東西両側にいくつもの開析谷があり、調査地南約40mのOS96-52次調査では、谷の東側の落ち際を確認している。さらに、調査地北隣のOS90-51次調査では、地表下約4m掘り下げても地山層に到達せず、南から北へ高くなる地形が確認されたため、調査地は開析谷の最深部に位置することが予想された[大阪市文化財協会2003]。

歴史的にみると、周辺では飛鳥～平安時代の遺構・遺物が多く検出されるとともに、豊臣期大坂城の惣構内に位置する。古代では、調査地の北約150mのOS87-29次調査で、奈良時代の井戸から奈良三彩や「攝」「厨」と書かれた墨書土器が出土し、また、中央高校敷地(OS90-50次調査)で、奈良時代後半～平安時代初めの7棟の正方位の掘立柱建物、そのすぐ南(OS11-4次調査)で、7世紀前半以降の正方位の掘立柱建物が見つかっており、付近に「摂津職」との関連が想定される古代の重要施設があったことを示している[大阪市文化財協会2003、大阪文化財研究所2012]。調査地の北隣のOS90-51次調査でも8世紀中頃の掘立柱建物群が見つまっている。豊臣期大坂城期では、調査地北隣のOS90-51次調査を始め、周辺で豊臣後期の排水溝や建物を確認している。徳川期では、OS11-4次調査で18世紀初め頃の土壌から「子籠鮭」と書かれた木簡が出土し、当時の食文化の広がりに係る資料を得た。

発掘調査は、建築工事用の土留の設置後、大阪市教育委員会の試掘結果に基づいた指導により、重機で現地表面から約2.4m掘削し、以下を人力による掘り下げで調査を進めた。ただし、工事現場の安全上、16㎡の調査面積を確保することが難しくなったため、遺構の検出状況によって適宜拡張することにし、



図1 調査地位置図

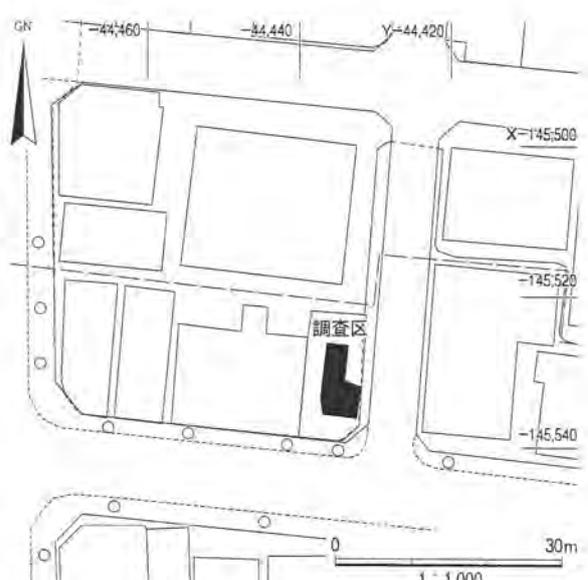


図2 調査区位置図

9 mに縮小することになった。現場では層序ごとに遺構検出・掘下げ・記録などの作業を適宜行った。しかし、湧水が激しく、地山層には到達せずに調査を完了した。

本報告で用いた方位は、現場で記録した街区図を1/2500大阪市デジタル地図に合成することで得た世界測地系座標に基づき、座標北を基準とした。標高はT.P.値(東京湾平均海面値)でTP+〇mとした。

2)調査の結果

i)層序(図3・4)

調査地は台地西斜面に当たるものの、現況で東西の高低差はほぼなく、平坦面に位置している。周辺の開折谷の名残は、北約30mで南に傾斜している所で見られる。調査は、後述の第0層と第1層の上部は重機掘削し、第2層の上面に第1層が一部残った状態から人力掘削を開始した。また、後述の第3層は調査地の谷を埋める地層で、埋めている方向が観察できた。

第0層：現代の盛土である。重機掘削して調査対象から外した。層厚は220cmである。

第1層：近～現代の遺構SX001の埋土である。層厚は50～100cmである。黒褐色(7.5YR3/2)～灰黄褐色(10YR4/2)の中粒～細粒砂層で、明黄褐色(2.5Y6/6)の極細粒～細粒砂層がブロック状に入る。焼土・壁土・瓦など二次的に被熱したものが多く含まれ、コンクリート片、タイル片が出土することから第2次世界大戦後の片付けと考えられるが、出土した遺物は18世紀後半～19世紀代の陶磁器類が主体である。また、享保9(1724)年の大火(妙知焼け)で焼けたと考えられる軒平瓦(図8-7)や豊臣後期の李朝陶磁(図8-1)が出土した。

第2層：近世の盛土である。層厚は20～35cmである。にぶい黄褐色(10YR5/4)の炭化物を含む極細粒～中粒砂層で、やや固くしまった整地層である。上面で、溝SD201・202や性格不明の落込みSX103を検出した。出土遺物はなかった。層序から、18世紀～19世紀代と考えられる。

第3層：近世の盛土である。土質の違いから、a・bの2層に細分する。

第3a層は、下層の第3b層を掘り込んで上部を固くしまった土で覆った整地層である。層厚は10～35cm、黄褐色(2.5Y5/4)のシルト質細粒砂偽礫を含む中粒～細粒砂層で、黄褐色(2.5Y5/3)～暗灰黄色(2.5Y5/2)の焼土・炭化物を含む中粒～極細粒砂層が挟在する。北西方向に傾斜して堆積しており、南東方向から埋められたことが分かった。上部の固くしまった土はにぶい黄褐色(10YR5/4)～黄褐色

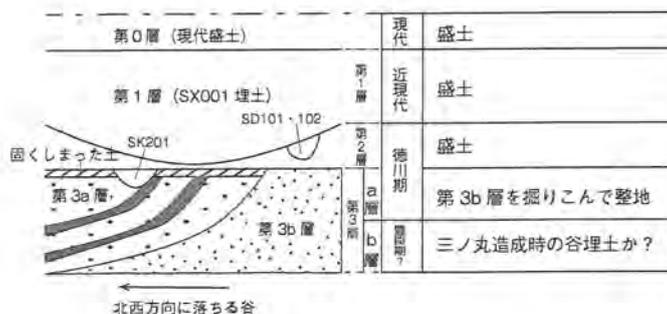


図3 地層と遺構の関係図

(2.5Y5/3)の焼土・炭化物・中礫～極粗粒砂を含む中粒～細粒砂層である。第3a層上面で、円形の土坑SK201を検出した。層内からは、土師器・肥前陶器・備前焼が出土した。出土遺物から17世紀代と考えられる。

第3b層は、にぶい黄褐色(10YR6/4)の極粗粒砂混りの中粒～細粒砂層で、第

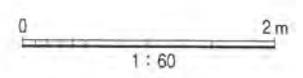
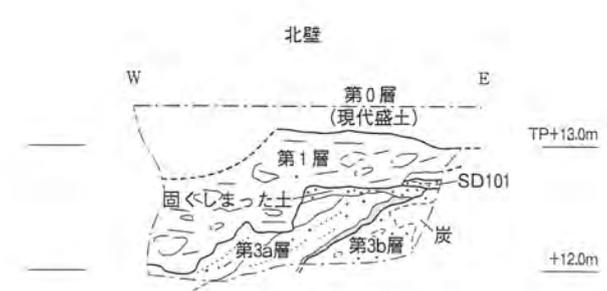
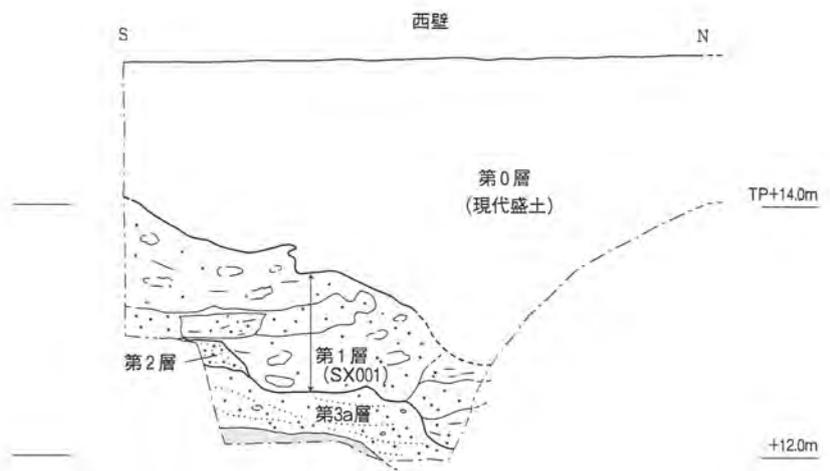
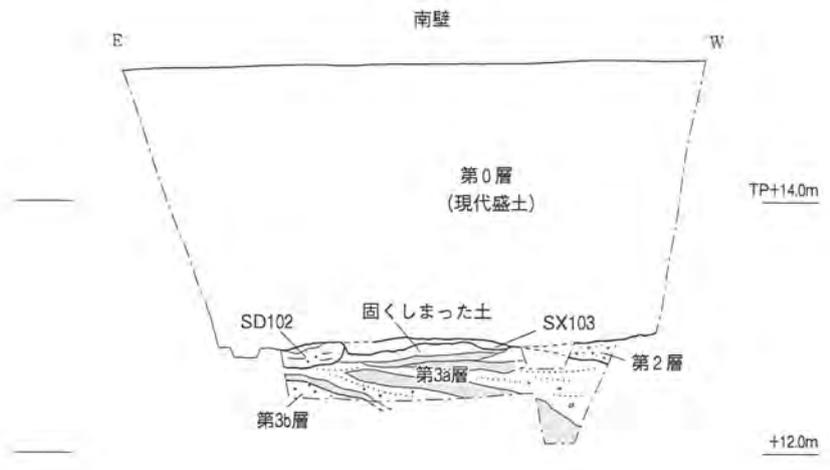


图4 地層断面図

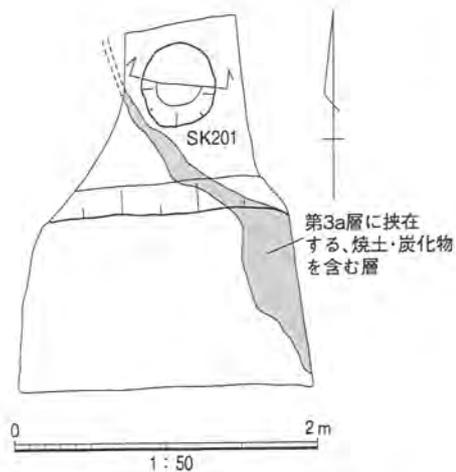


図5 第3a層上面遺構平面図

3a層の下に堆積する谷の埋土である。北壁で炭化物が集中する部分があった。周辺の調査で確認している地層と層位や岩相を比較したところ、本層は三ノ丸造成時の盛土に当たる可能性がある。しかし、周辺の調査で確認されている大坂夏ノ陣の焼土層が上層で確認できなかったことや、本層を完掘せずに調査を終えたこと、出土遺物がなかったことから詳細は不明である。ただし、第3a層に挟在する層に焼土や炭化物が含まれるため、整地する時に夏ノ陣の焼土層を攪拌して客土した可能性が考えられる。

ii) 遺構と遺物

a. 第3a層上面の遺構(図5・7)

SK201は、正円に近い形状で直径0.46m、深さ0.22mの土坑である。上部に薄くは黄褐色(10YR4/3)の粗粒砂混りの極細粒～細粒砂層(図7-1)が堆積し、下部には黄褐色(10YR5/4)の極細粒～細粒砂偽礫を含む粗粒～中粒砂層(図7-2)で一気

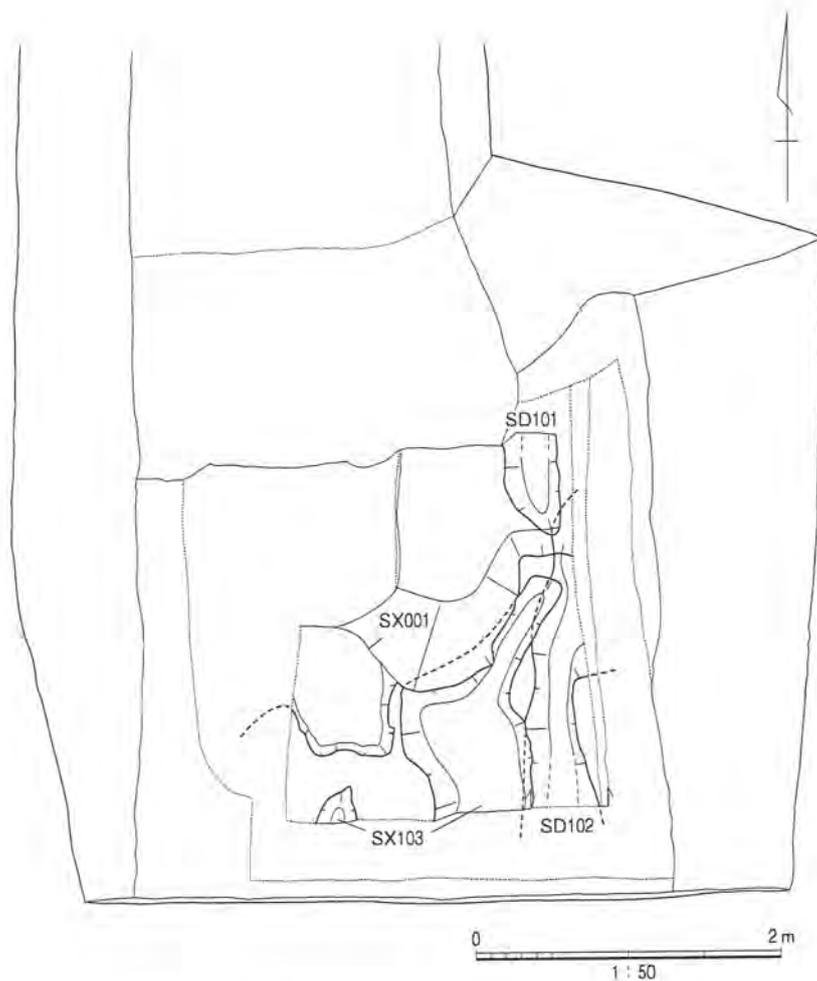


図6 第2層上面平面図(SX001のみ上層の遺構)

に埋められていた。出土遺物はなかった。

b. 第2層上面の遺構(図6・7)

SD102は、南北に延びる溝で幅0.35m、検出長2.00m、深さ0.12mである。北で東へ曲がっている。にぶい黄褐色(10YR4/3)の中粒～細粒砂層(図7-1)で埋没しており、滞水の痕跡は見られない。SD101は、幅0.36m、検出長0.70m、深さ0.16mで、にぶい黄褐色(10YR5/4)の極細粒～中粒砂層で埋没している。SD101はSD102を切っ

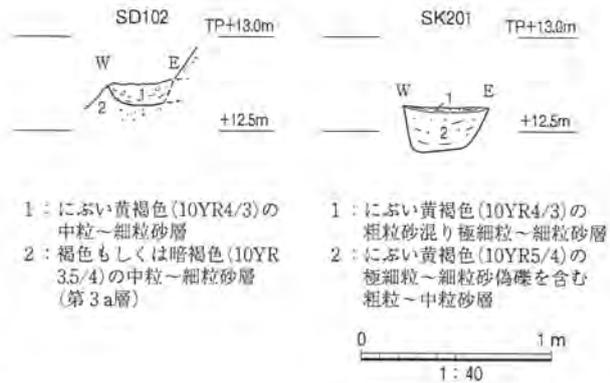


図7 遺構断面図

ているが、両者の規模や埋土、一括で埋められている状況の類似から、さほど時期差はないと思われる。いずれも出土遺物はなかった。北隣のOS90-51次調査では、豊臣前期の遺構面では南流する溝を検出しているが、徳川期では溝を検出していない。SD101・102は層序から徳川期のものと考えられるので、既知の遺構と関連付けることはできない。よって性格は不明である。SX103は、SD102を切り、SX001に切られているため、第2層上面で最も新しい遺構である。検出面で東西長1.45m、南北長1.55mの不整形な落込みである。暗オリーブ褐色(2.5Y3/2)の炭化物を含む極細粒～中粒砂層で埋没している。出土遺物はなかった。

c. SX001(図6)

SX001は深さ1.00m以上ある大きな落込みである。第2次大戦後の片付けで埋められており、単なるゴミ穴である可能性があるが、上部は現代(第0層)に削平されており、全体が調査区外に及ぶため性格は不明である。

d. 各層の出土遺物(図8)

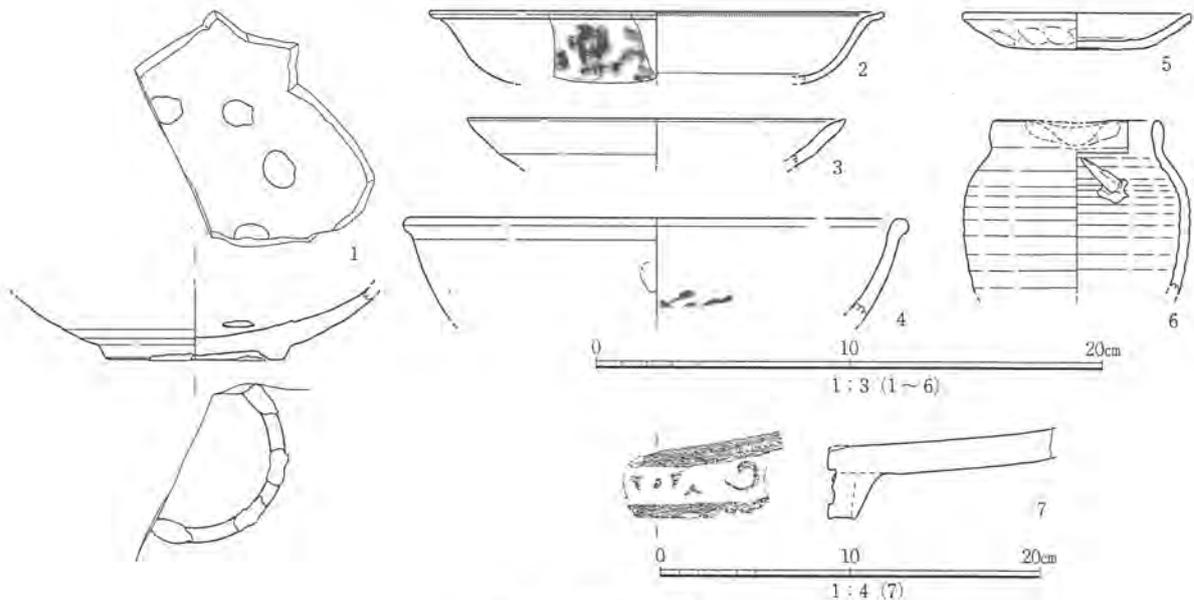


図8 遺物実測図

SX001(1・2・7)、第3a層(3~6)

1・2・7は、SX001から出土した。1は李朝白磁の碗で、全面に釉が施されており、7～8ヶ所の砂目、径が大きく低い高台を有している。豊臣後期のものである[森村健一1985]。2は中国産青花皿で、19世紀代まで降るものである。7は、小型の軒平瓦で、二次的に被熱している。先述したように、1724年の妙知焼けで焼けたものと考えられる。

3～6は、第3a層から出土した。3・5は土師器皿である。前者は、口縁部径14.8cmを測り、浅黄橙色を呈し、肥厚した口縁端部にやや内傾する面を持つ。豊臣前期までさかのぼるものである[佐藤隆2008]。後者は、口縁部径8.8cmを測り、灰白色を呈し、やや薄手である。底部は平らで底部内面に段を持ち、底部から口縁部にかけてまっすぐに立ち上がる。口縁端部は丸くおさめる。4は肥前陶器の鉢で、二次的に被熱しており、表面の釉が灰色を呈している。内面には文様の痕跡が薄く残る。底部の凹みは片口の痕跡かもしれないが、被熱によるものの可能性もある[家田淳一2000]。6は、備前焼の小壺である。内面に鉄釘が付着しており、鉄漿水の痕跡も見られるため、お歯黒壺である。3以外はおおむね17世紀におさまるものと考えられる。

3)まとめ

今回の調査は、調査面積が狭かったため、遺構の性格について不明な点が多いが、調査地が南東方向から埋められた谷の中に当ることが分かった。この谷は、OS96-52次調査やOS90-51次調査で検出された谷と一連のものと思われる。また、第3b層とした谷の埋土が三ノ丸の造成土かどうかは明らかにできなかったが、第3a層の出土遺物から、少なくとも17世紀には谷が埋め立てられて整地され、生活が営まれていたようである。

引用・参考文献

大阪市文化財協会2003、「OS90-50次およびその周辺の調査」：『大坂城跡Ⅶ』、pp.105-128

同、「OS90-51次およびその周辺の調査」：『大坂城跡Ⅶ』、pp.133-142

大阪文化財研究所2012、『中央区釣鐘町における建設工事に伴う大坂城跡発掘調査(OS11-4)報告書』

家田淳一2000、「陶器の編年 2. 播鉢・鉢・片口・水指・茶入・土瓶・水注・灯火具」：『九州陶磁の編年』、九州近世陶磁学会、pp.44-49

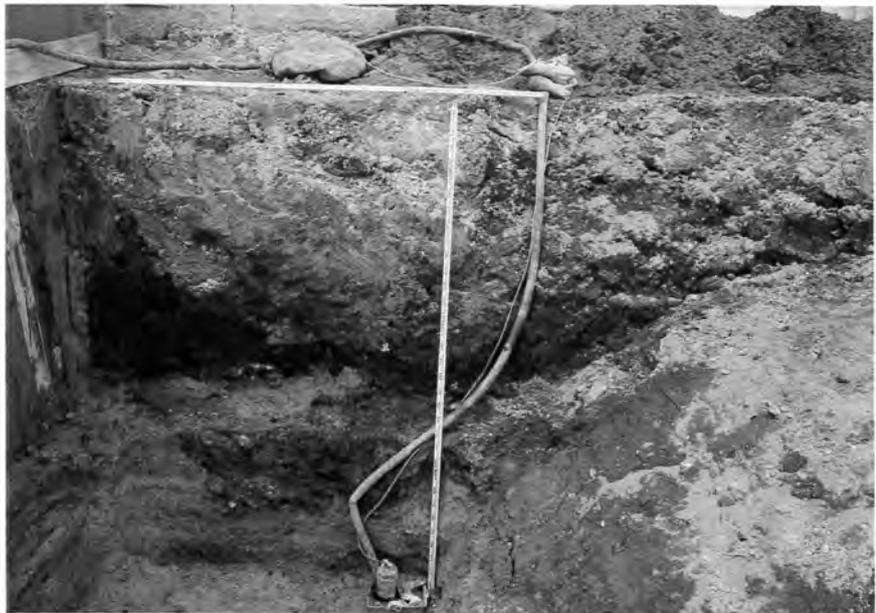
佐藤隆2008、「大坂本願寺推定に関する考古学資料-特別史跡大坂城跡における発掘調査成果から-」：『大阪歴史博物館研究紀要』第7号、pp.31-43

森村健一1985、「堺環濠都市遺跡出土の李朝陶磁器」：『貿易陶磁研究』第5号、pp.55-69

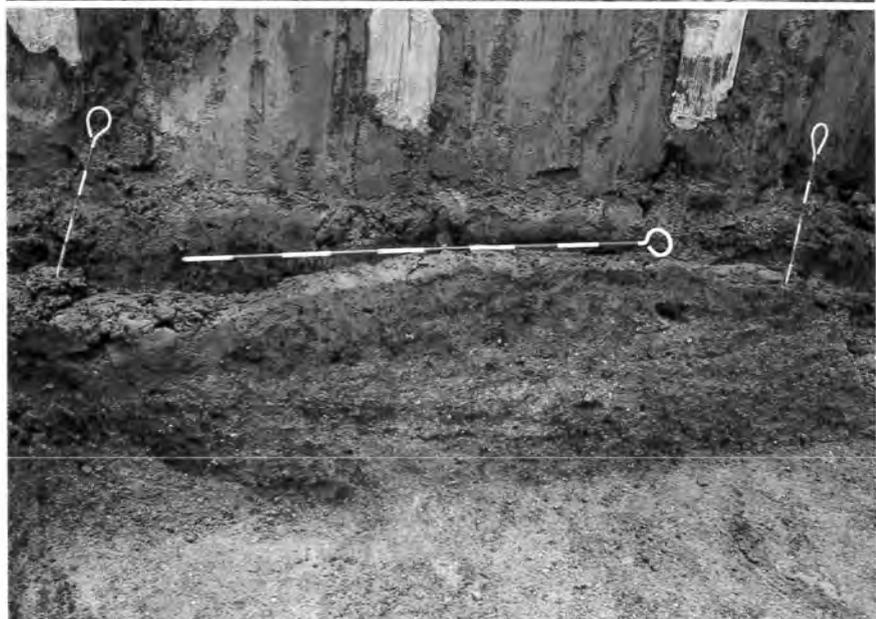
第2層上面
遺構検出状況
(北から)



西壁地層断面
(東から)



南壁地層断面
(北から)



大坂城跡発掘調査(OS12-37)報告書

調査個所 大阪市中央区農人橋2丁目43-1ほか3筆
調査面積 49㎡
調査期間 平成25年3月18日～3月25日
調査主体 公益財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所
調査担当者 次長 南 秀雄

1) 調査に至る経緯と経過

調査地は豊臣氏大坂城の惣構の西南部に当たる。調査区の南約5mには背割下水が流れており、東約150mの南大江小学校にはその展示施設がある。至近では、西10mでOS10-4・11-11次調査、北40mでOS12-19次調査などの発掘調査がある(図1)。OS10-4次調査では、豊臣前期の最初の城下町造成から18世紀前葉に至る各段階の整地と遺構面が検出されている[大阪文化財研究所2012a]。OS11-11次調査では背割下水の裏込の調査から、下水石積みの構築が18世紀中頃と推定された[大阪文化財研究所2012b]。

既発掘データにより、今次やOS10-4・11-11次調査地の南には、龍造寺谷と呼ばれる大きな埋没谷が東西に延びていることがわかっている。また、久太郎通の北のブロックにも農人谷と仮称する埋没小谷が東西に推定されている[大阪文化財研究所2012b]。二つの谷に挟まれた狭長な尾根がほぼ久太郎通に相当し、調査地点は北から南へ低くなる龍造寺谷の北斜面に当たる。

本調査では、大阪市教育委員会の試掘結果を受け、現地表より約1.8mの第5層中まで重機で掘削し、第7・8・9・10a・10b層の各層上面で遺構検出を行った。第10b層は南半のみを掘削し、城下町造成前である第11層上面まで到達して調査を終えた。

基準点はMagellan社製ProMark 3により測位し、良好な成果の出た1点を基準に、地図より世界測地系に基づく座標値を得た。標高はT.P.値(東京湾平均海面値)でTP+〇mと記した。

2) 調査の結果

i) 層序(図3・4)



図1 調査地位置図

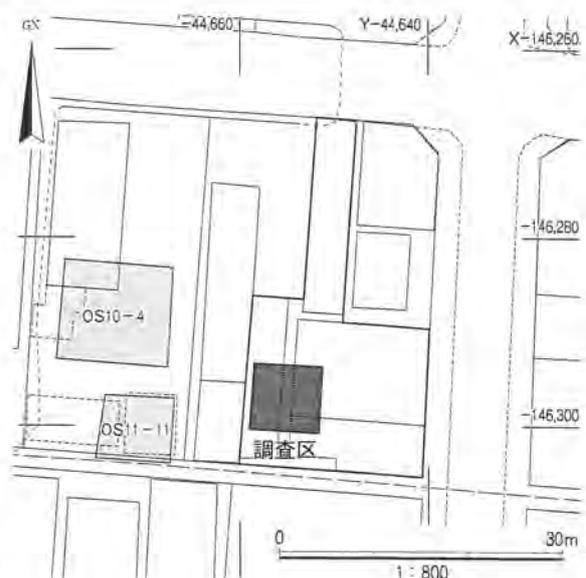


図2 調査区位置図

現地表の標高はTP+6.0mである。第11層を除いて盛土または整地層である。

第1層：層厚20～35cmの焼土層で、第二次世界大戦時と推定される。

第2層：黒褐色(10YR3/2)中粒砂層で、層厚は15～35cmである。炭や焼土片が混じる。近代の地層と推測される。

第3層：にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質粗粒砂層で、層厚は35～40cmである。上面に生活面がある。江戸時代末と推測される。

第4層：暗褐色(10YR3/3)シルト質粗粒砂層で、層厚は25～45cmである。レベル等から本層はOS10-4次調査の第4層に相当すると考えられ、OS10-4次第4層は18世紀前半より新しい。南・西壁のレベルから、西壁にかかる石組みは第4層段階に造られたと推測される。

第5層：オリーブ褐色(2.5Y4/4)シルト質中粒砂層で、層厚は30～45cmである。上面は生活面となる。OS10-4次調査の第5層に相当すると考えられ、OS10-4次第5層は17世紀後半～18世紀前葉と推定した。

第6層：オリーブ黒色(5Y3/2)シルト質粗粒砂層で、シルト偽礫が入る。層厚は10～35cmである。第6層からは土師器焙烙20、肥前磁器碗17～19・皿21、肥前京焼風陶器碗22、軒丸瓦24が出土した。17・19は染付、18は青磁染付、21は青磁である。第6層は17世紀末～18世紀初であろうか。

第7層：黒褐色(2.5Y3/1)シルト質粗粒砂層で、層厚は5～35cmである。第7層上面にはSE704、ゴミ穴SK702、礎石などがあつた。第7層からは土師器焙烙6、肥前磁器碗7～9、同皿10・11、軒平瓦25が出土した。11は青磁、他は染付である。第7層は17世紀中頃と推定される。第7層はOS10-4次調査では第6層(17世紀中葉)あたりに相当するが、そこで特徴であつた、盛土中の水成層は見られない。

第8層：明黄褐色(2.5Y7/6)粗粒～極粗粒砂層の一気の盛土で、層厚は25cm以上である。本層以下は豊臣期と推定される。第8・9層は、OS10-4次調査の第8・9層に相当すると考えられる。本調査地には、OS10-4次調査に存在した大坂夏ノ陣の焼土とその再堆積層(OS10-4次の第7層、畠か)が無い。

第8層上には小溝SD806・807、ゴミ穴SK801やSK802などがあつた。これらは徳川期の遺構である。軒丸瓦23は第8層の出土である。

第9層：灰黄色(2.5Y6/2)シルト・粘土の偽礫からなる丁寧な盛土で、層厚は10～30cmである。

第10a層：にぶい黄色(2.5Y6/4)極粗粒砂層で、シルト偽礫が入る。一気の盛土で、層厚は15～35cmである。上面には木質などが薄く溜まっていた。本層以下では遺構は検出してない。第10a・10b層は、

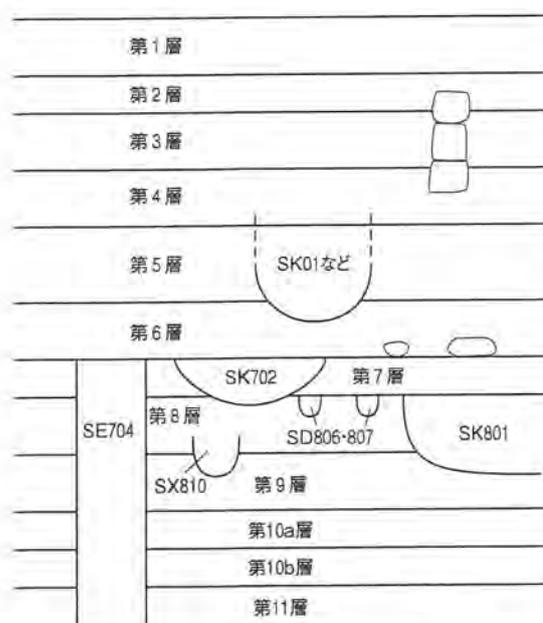


図3 地層と遺構の関係図

OS10-4次調査の第10a・10b層に相当すると考えられる。出土遺物では判然としないが、第8・9層が豊臣後期、第10a・10b層が豊臣前期に当る可能性がある。

第10b層：浅黄色(2.5Y7/3)極粗粒砂層の一気の盛土で、層厚は10~45cmである。当地の城下町造成の最初の盛土である。本層出土の26は、何かの一部となる、緩やかな曲面を成す板である。

第11層：灰色(7.5Y4/1)粗粒砂層で、表層に有機物のシルトがある。軟弱な自然堆積層である。

ii)遺構と遺物(図5~7)

第9層上面・8層中(豊臣後期)

第9層上面には、長さ0.70m、深さ0.20mのSK901の他に遺構はなく、薄い炭層が中央にあった。第8層中では、木の根が残る土壌SX810があり、立ち木などがあつた可能性がある。屋敷地の裏手あたり、豊臣後期の段階ではほとんど利用されていなかった。

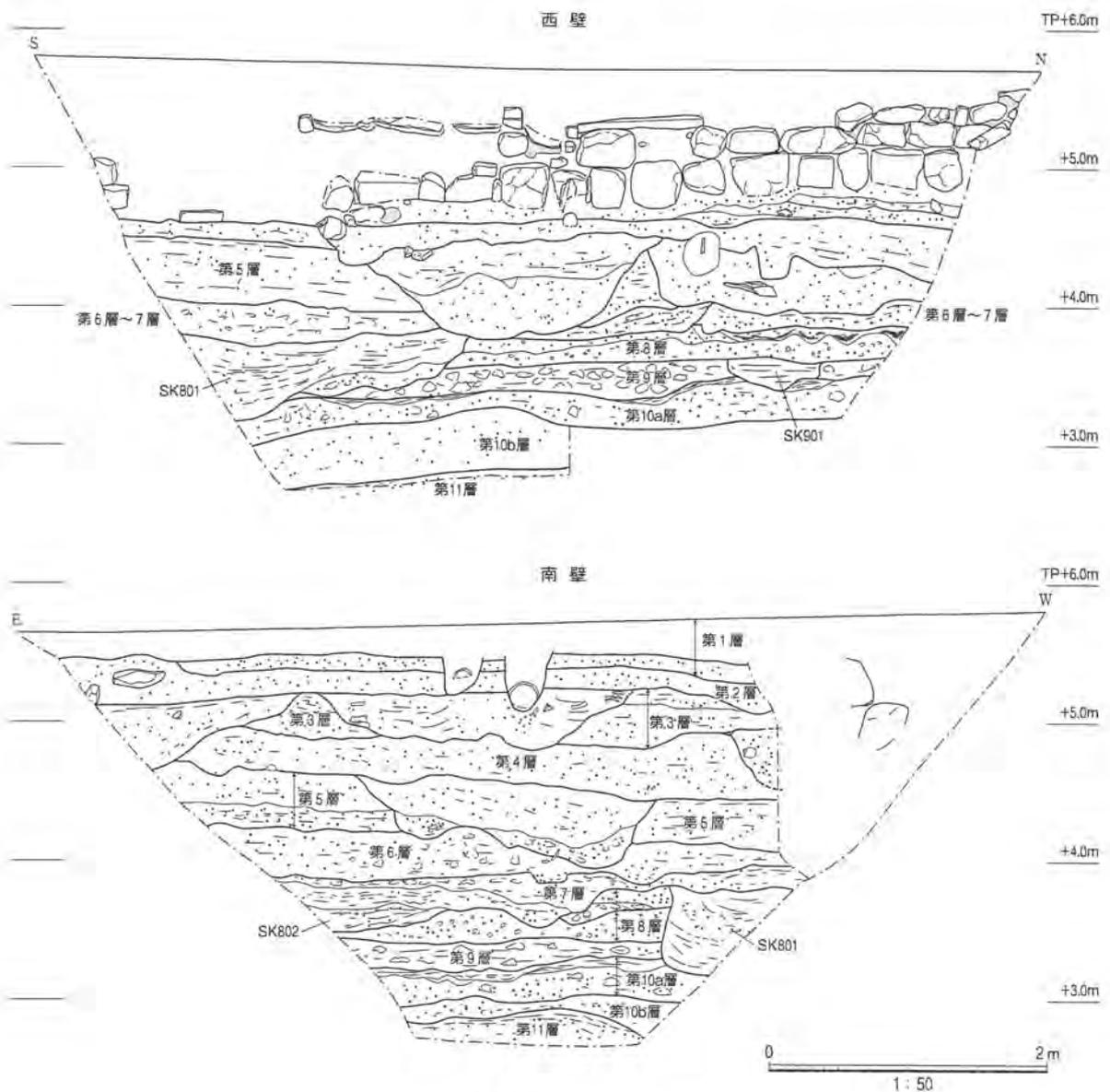


図4 西・南壁地層断面図

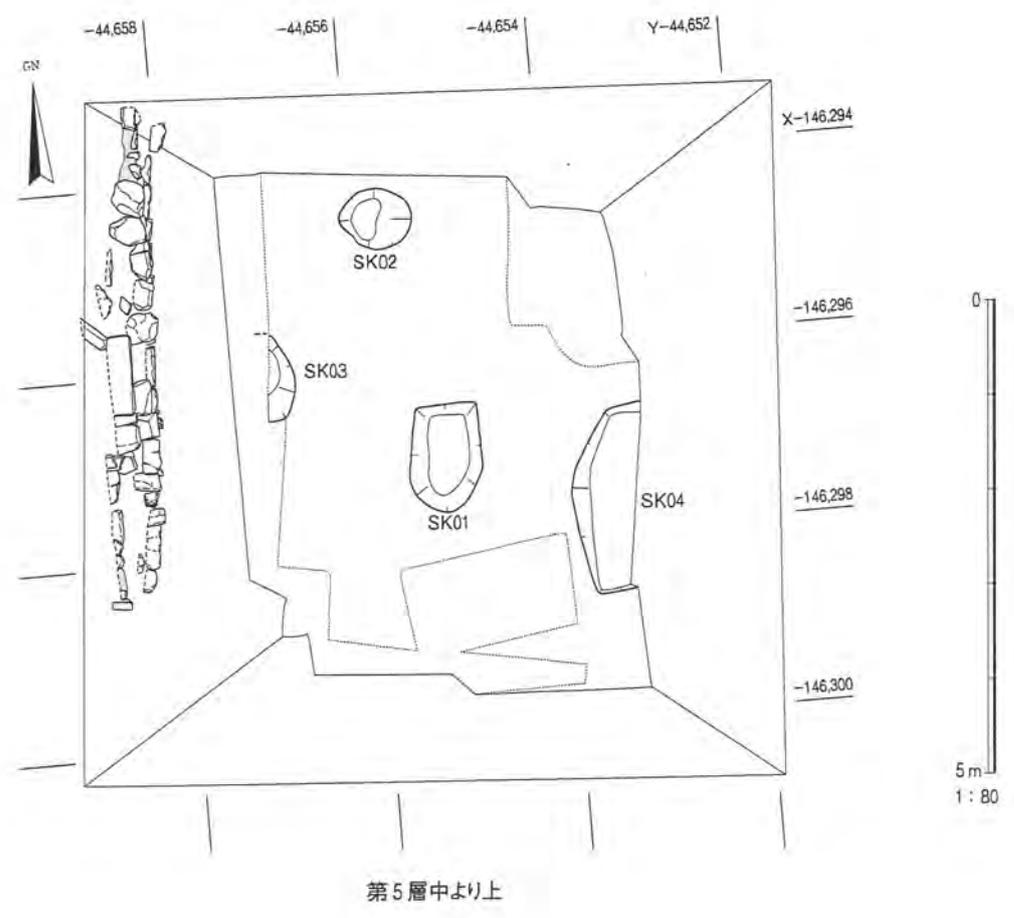
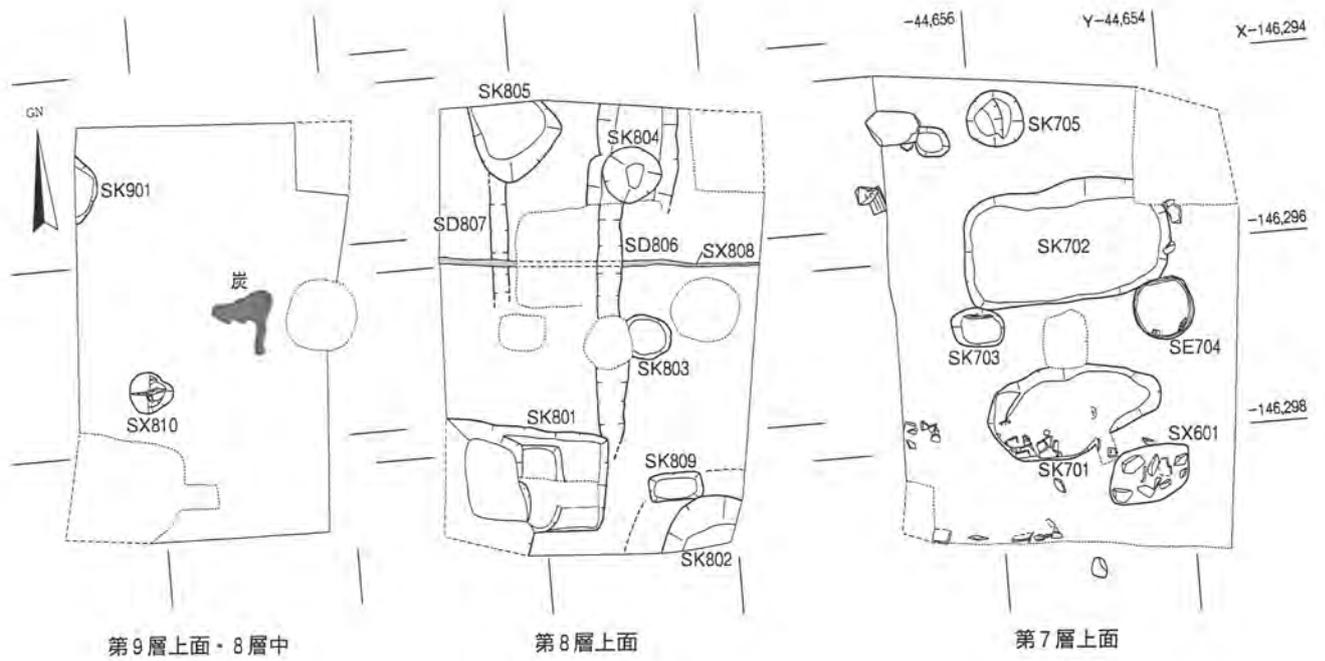


図5 遺構平面図

第8層上面(徳川初期)

南西隅のSK801は東西1.8m以上、南北1.4m以上、深さ0.60m、多量の陶磁器・瓦が出土したゴミ穴である。SK802・803・809は浅く、SK801と類似したゴミを含む埋土である。SK801からは、瀬戸美濃焼蓋1、肥前陶器皿2、肥前磁器染付碗3・鉢4・徳利5が出土した。SK801は17世紀中頃であろう。SK804・805は、炭混りの第8層と類似する砂礫層が埋土である。深さはSK804が0.25m、SK805が0.20mである。

SD806・807は平行する南北方向の溝で、深さ0.03~0.10mである。耕作痕の可能性はある。

東西に延びるSX808は板状の木質の痕跡で、幅0.03~0.06mであった。西壁断面図で表現できていないが、第8層上面から高さ0.2mほどが残っていた。溝のように対にならず、盛土時の土留の可能性もある。

第7層上面(17世紀後半)

北西隅には長さ0.6mの礎石があり、その南の石の下には板が敷かれていた。前段階までと異なり、奥側に当る調査区にも建物がある。礎石の可能性のある小振りの石が他に2個あった。

SE704は木枠で、直径0.65mである。SK702はゴミ穴で、長さ2.20m、幅1.25m、深さ0.40mである。SK702からは瀬戸美濃焼花生12、肥前磁器染付碗13・皿14、土人形15が出土し、17世紀後葉と推定される。SK703・705は円形の土坑で、深さはSK703が0.40m、SK705が0.45mである。

SX601は石を集めた遺構だが、用途はわからない。石は第6層掘削中に主に出土した。SK701は遺構ではなく、SK801などへ落込んでいく地層を誤認した可能性が高い。土師器甕16が出土した。

第5層中より上

最初の遺構検出を行った第5層中より上の遺構を図5下に表示した。SK04は瓦等を捨てた土坑である。

西壁にかかる東面する南北石組みは第4層段階に造られたと推定される。石組みは背割下水へ繋がる溝の西壁で、東壁の石は土坑などで壊されたと推測した。2~3段あり、上部は漆喰で隙間を埋めている。周囲の盛土に伴って石を付加し、近代まで継続して使われている。

3)まとめ

調査地の地層は、豊臣前期から18世紀前半頃までの間で、隣接したOS10-4次調査地とかなりの部分で対応できる。屋敷地の奥でもあり、豊臣期には顕著な遺構はなく、17世紀中頃~後半になってゴミ穴や建物が造られるようになる。

調査地周辺は旧地形の微細な変化などもわかってきている。今次を含めた周辺の調査成果は、豊臣~徳川期の初期城下町の形成過程や、背割下水の時期などの解明に役立つと考えられる。

参考文献

大阪文化財研究所2012a、「大坂城跡Ⅲ」

大阪文化財研究所2012b、「大坂城跡Ⅴ」

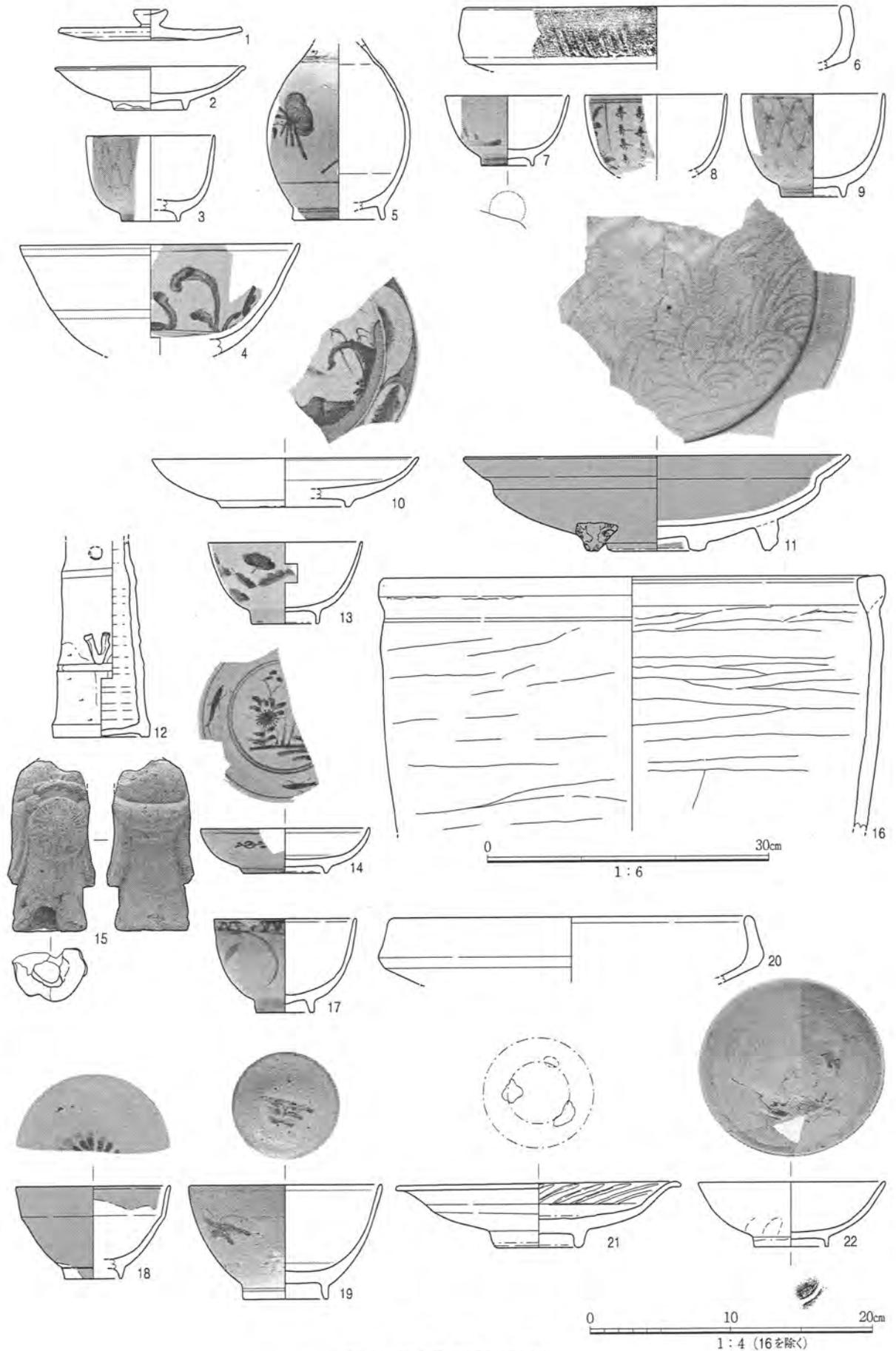


图6 出土遺物実測図(1)
SK801(1~5)、SK702(12~15)、SK701(16)、第7層(6~11)、第6層(17~22)

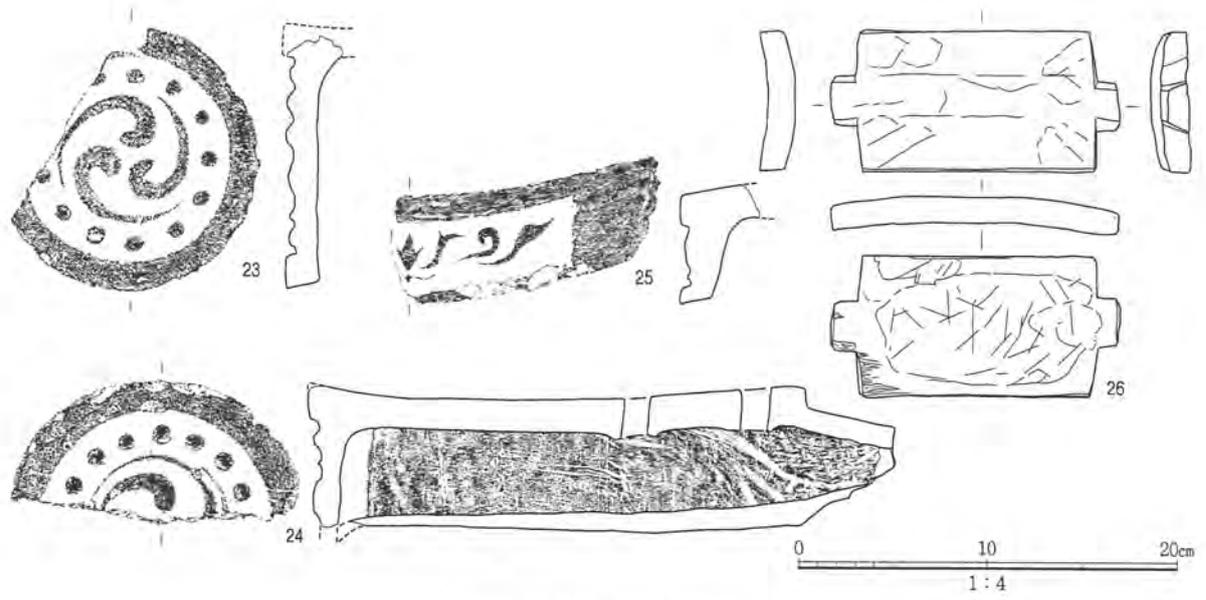


图7 出土遗物实测图(2)
 第10b层(26)、第8层(23)、第7层(25)、第6层(24)

南壁地層断面



第11・10b層上面
(南東から)



第10a層上面
(南東から)



第9層上面・8層中
(東から)



第8層上面
(東から)



第7層上面
(東から)



上本町遺跡発掘調査(UH12-7)報告書

調査個所 大阪市中央区上汐1丁目1-6
調査面積 28㎡
調査期間 平成24年7月26日～7月31日
調査主体 公益財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所
調査担当者 次長 南 秀雄、高橋 工

1) 調査に至る経緯と経過

調査地は上町台地の脊梁部に立地する上本町遺跡の北部に位置し、古代においては難波宮の南に接し、近世では豊臣氏大坂城の南端である惣構堀の南に当る。調査地周辺は、古代の難波京や近世の平野町など、都市大阪の発展過程に係る遺構が残されている地域である。UH10-1次調査[大阪文化財研究所2012a]、UH12-3次調査[大阪文化財研究所2012b]、UN02-5次調査[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2004]、TX97-1次調査[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1999]では、飛鳥・奈良時代の遺構・遺物が出土しており、UH94-1次調査、UN02-5次調査、UH98-3・5次調査[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2000a・b]では、豊臣期から徳川期にかけての遺構・遺物が発見されている(図1)。

当地においては、建築工事に先立って大阪市教育委員会が試掘調査を行ったところ、現地地表下0.8m以下に発掘調査の対象となる遺構面・地層が発見され、本調査が行われることとなった。調査は、敷地の南西に4m×5m(20㎡)のトレンチを設定し、近代の地層である第2層までを重機を用いて除去した(南区)。その後の掘下げ、遺構検出・掘削は人力により、適宜に実測図と写真撮影による記録作成を行った。地山層(第7層)上面で南北方向に延びる古代の溝を検出し、この連続を追求するため、教育委員会と協議の上で、北側に2m×4m(8㎡)の拡張区を設けた(北拡張区;図2)。また、基準点はmagellan社製ProMark3により測位し、本報告で用いた方位は世界測地系に基づく座標北を基準とした。標高はT.P.値(東京湾平均海面値)でTP+〇mと記した。

2) 調査の結果

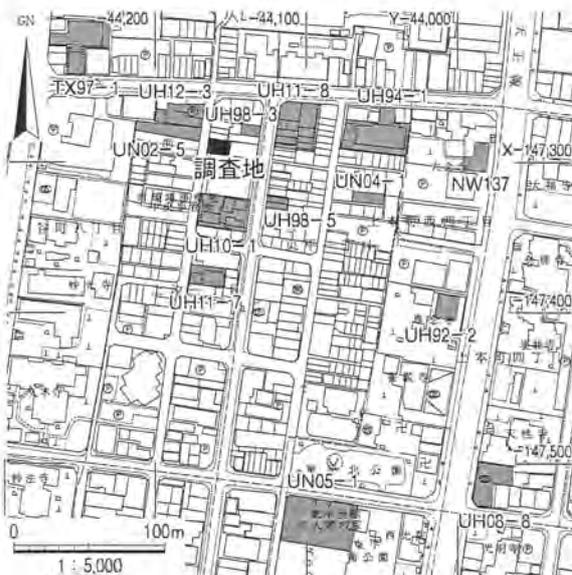


図1 調査地位置図

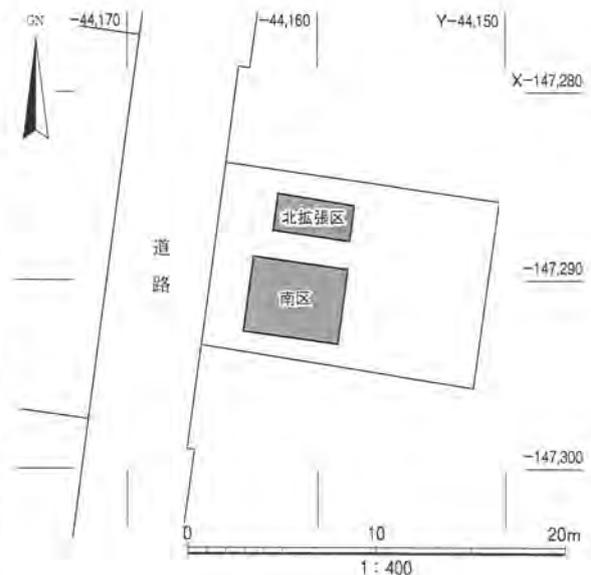


図2 調査区の配置

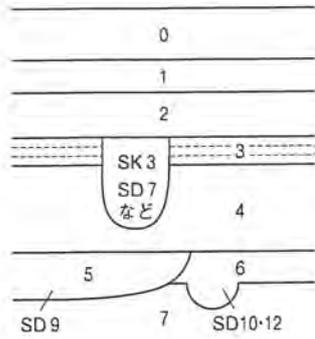


図3 地層と遺構の関係

i) 層序と地形(図3・4)

調査地はガレージとして利用されており、地表はコンクリートで舗装されて平坦であった。調査地の北約50mは北へ下がる急坂となるが、これは清水谷(惣構堀)の南斜面に当る。

コンクリート舗装(第0層；調査着手時は撤去済)の下位に以下の7層を確認した。

第1層：黒褐色細粒～中粒砂からなる現代の整地層で、層厚は約15

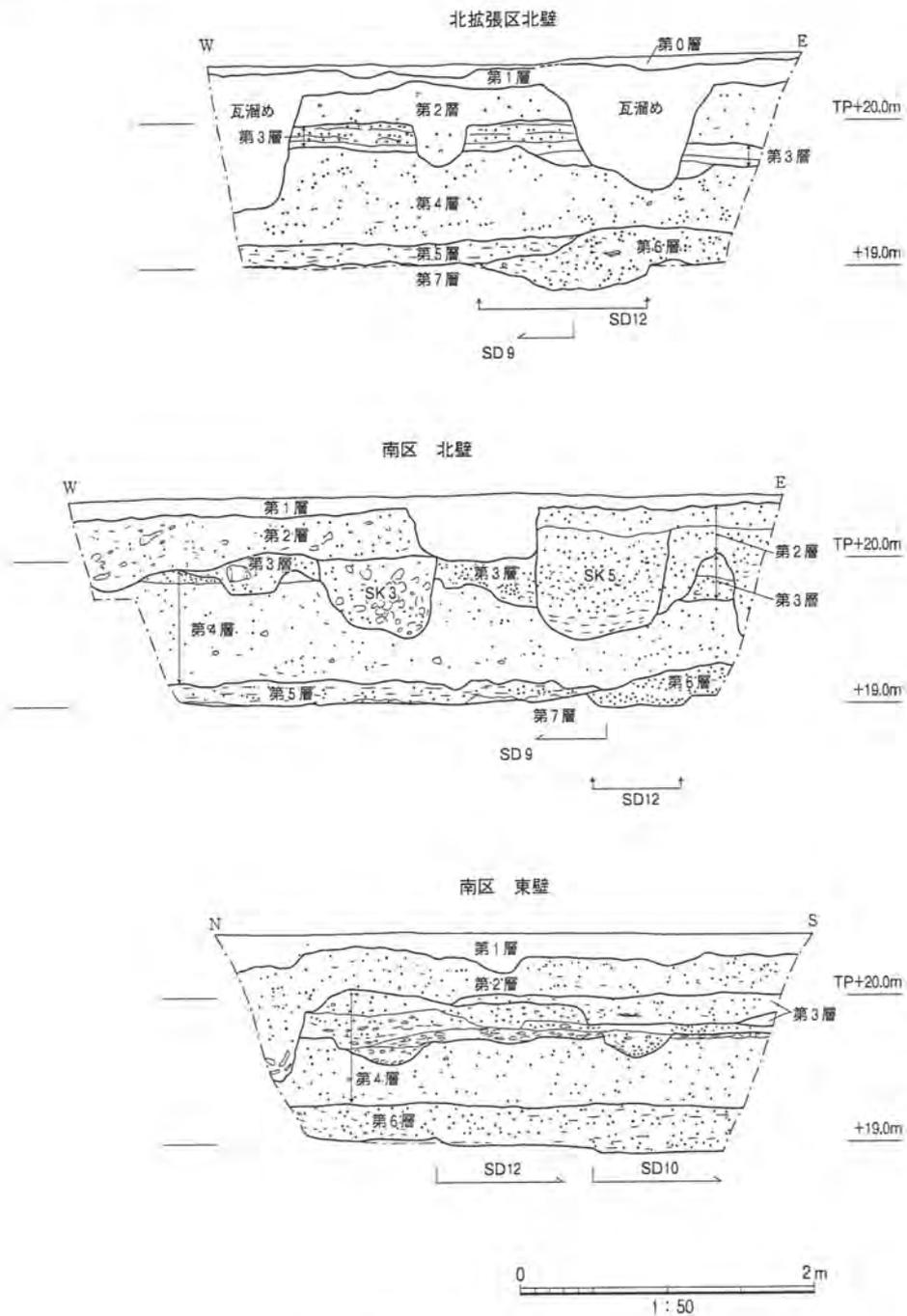


図4 地層断面図

cmであった。上面の標高はTP+20.4mである。

第2層：黒褐色中粒～粗粒砂からなる近代の整地層である。層厚は約25cmであった。

第3層：黄褐色粗粒砂や褐色シルトなど、複数の薄層からなる整地層である。層厚は約15cmであった。本層上面では17世紀後葉～18世紀初頭の土壙や溝などが検出され、本層の年代もそれに近いものとみてよい。

第4層：にぶい黄色粗粒砂からなる盛土層で、地山層の偽礫をわずかに含む。層厚は約70cmで、本層からの出土遺物は少ないが、中国産青花皿の細片(図8-8)が含まれることから、地層の年代は徳川初期以降であることわかる。

第5層：黄褐色シルト質粘土からなる自然堆積層で、SD9の埋土である。層厚は約15cmで、奈良時代の須恵器片や瓦器細片(図8)が出土し、古代から中世にかけて堆積したものである。

第6層：にぶい黄褐色粘土質砂からなる盛土層で、SD10・12を埋積する。層厚は約25cmであった。7世紀後葉～末頃の土器(図8)が出土し、本層の年代の上限を示している。本層上面でSD9を検出した。

第7層：にぶい黄褐色シルトからなる地山層である。草木根による擾乱が著しく見られた。本層上面でSD10・12、SP11を検出した。上面の標高はTP+19.0mである。

ii) 遺構と遺物(図5～8)

第7層上面で、SD10・12、SP11を、第6層上面でSD9を検出した。

a. 古代の遺構(第7層上面および第6層上面；図5・6・8)

SD10 南区の南壁際で検出された東西方向の溝で、南端は調査区外にあって幅0.90m以上、深さは0.15mであるが、北側は一段低くなり、深さ0.20mである。方位はN0°30'E(図上読定値；以下省略)ではほぼ正東西方位をとる。

SD12 SD10に取り付く南北方向の溝で、南区東部から北拡張区に続くことを確認した。幅0.75m、深さ0.10mで、方位はN1°00'Wではほぼ正南北方位をとる。埋土は第6層で、SD10とともに埋められていたことから、2条の溝は同時に存在していたことになる。第6層中に含まれる遺物(図8の3～7)から、7世紀後葉～末頃に廃絶したものとみられる。

SP11 南区の西部で検出された小穴で、東西0.15m以上、南北0.50m、深さ0.30mで、地山偽礫をわずかに含む灰黄褐色粘土質シルトで埋められていた。遺物は出土しなかった。

SD9 南区から北拡張区にかけて検出した南北方向の溝である。西端は調査区外にあって幅は2.8m以上、深さは0.15mを測り、方位はN2°00'Eではほぼ正南北方位をとる。埋土は第5層で、泥が堆積して埋った状況であった。本層からは土師器・須恵器・瓦器の細片が少量出土した(図8の1・2)。これらの年代から、本遺構の年代の上限は奈良時代、下限は12～13世紀である。

b. 近世の遺構(第3層上面；図7・8)

南区で土壙・溝などを検出した。溝は調査区の東部で検出され、SD7は南北に延び、SD8は南北に延びて、ほぼ直角に東へ折れる。いずれも幅0.3～0.4m、深さ0.1mほどで、地山層の偽礫で埋められていた。屋敷地の区画に係る溝であろうか。土壙SK3～5は直径1.5m程度、深さ0.5～0.8mで人為

的に埋められていた。SK4・5はSD7を切っていた。このほか、小穴や礎石らしい石が検出されたが建物を復元するには至らなかった。これらの遺構の年代は、SK4から出土した備前焼播鉢9、肥前磁器染付皿10(図8)から17世紀後葉～18世紀初頭とみられる。これらは町屋の一部を構成した遺構であろう。

c. 包含層出土の遺物

第4層から出土した遺物は中国産青花皿8を細片ではあるが図化した。17世紀初頭頃のものである

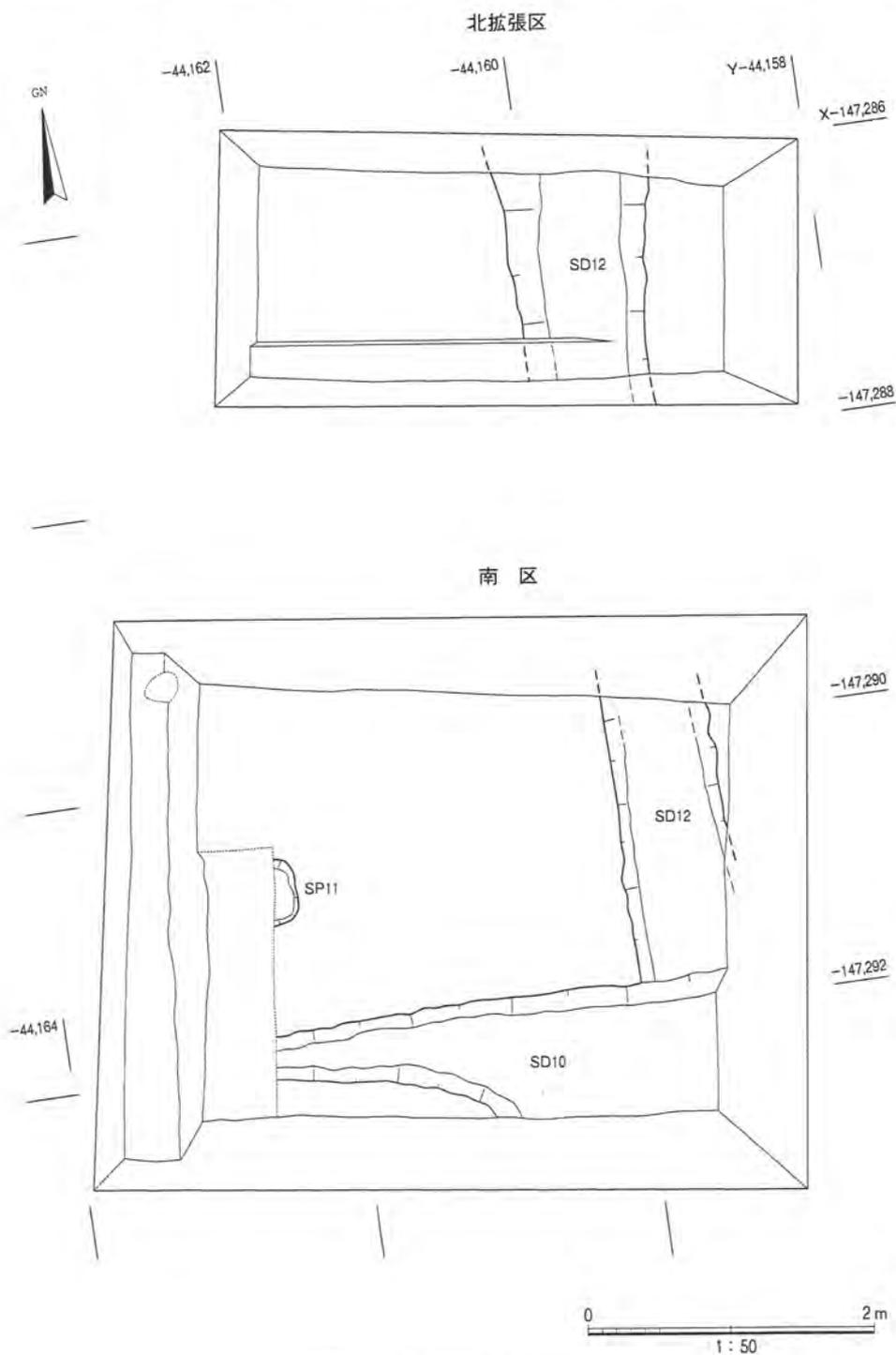


図5 第7層上面遺構平面図

う。地層の年代を代表するものかどうかはわからない。第5層(SD9の埋土)から出土したものは須恵器杯蓋1と瓦器碗2を図示した。1は奈良時代のものである。図示しなかったが、同時代のものとして断面を多角形に成形した高杯脚部の破片がある。2は風化で調整が不明であるが、12~13世紀頃のものであろう。第6層からは土師器杯B3・杯C4・高杯5・甕7、須恵器杯H身6を示した。3~5・7は7世紀後葉~末で、第6層の客土が行われた時期を示す。6は6世紀末~7世紀前葉のもので、混入品である。

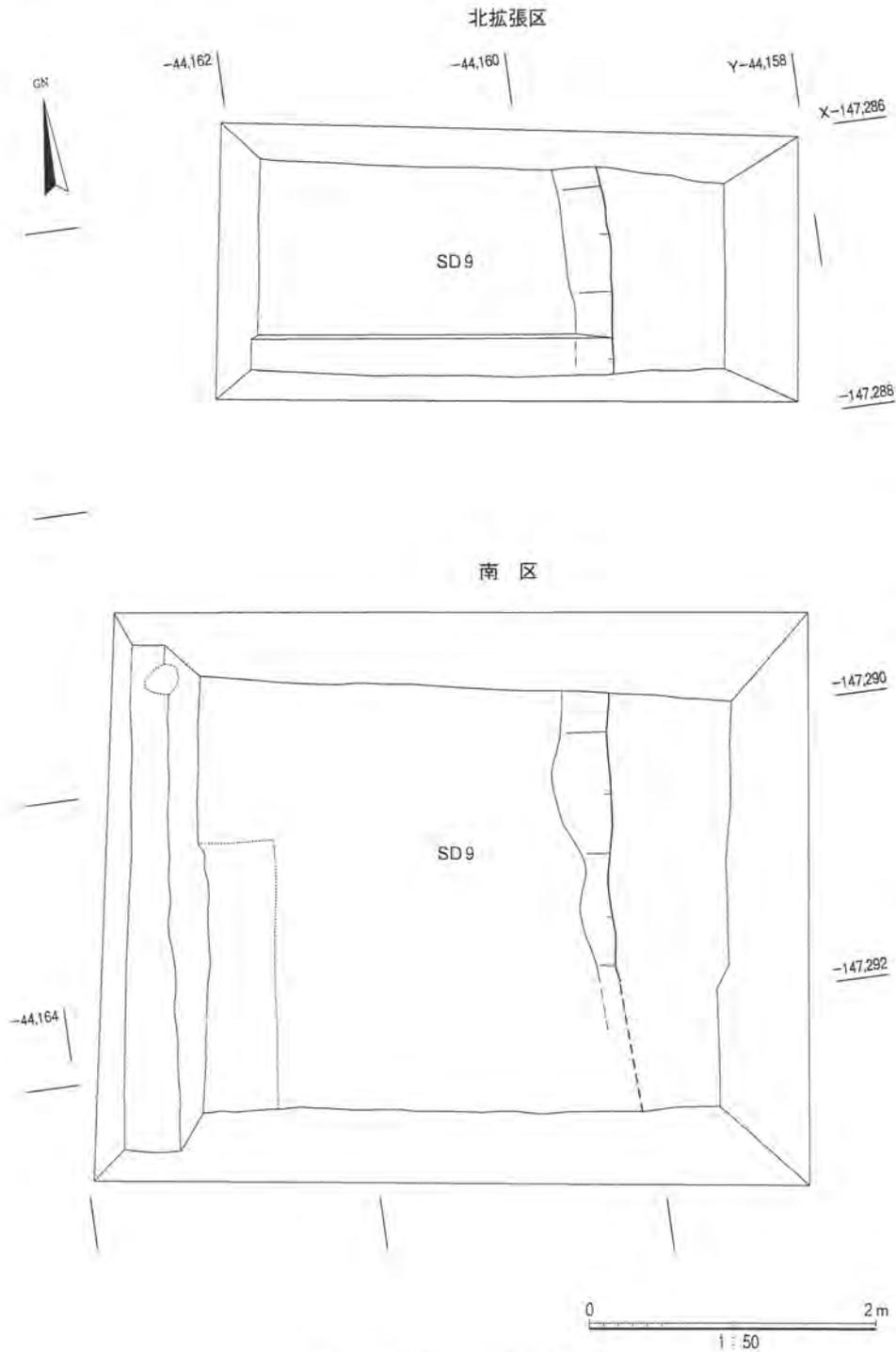


図6 第6層上面遺構平面図

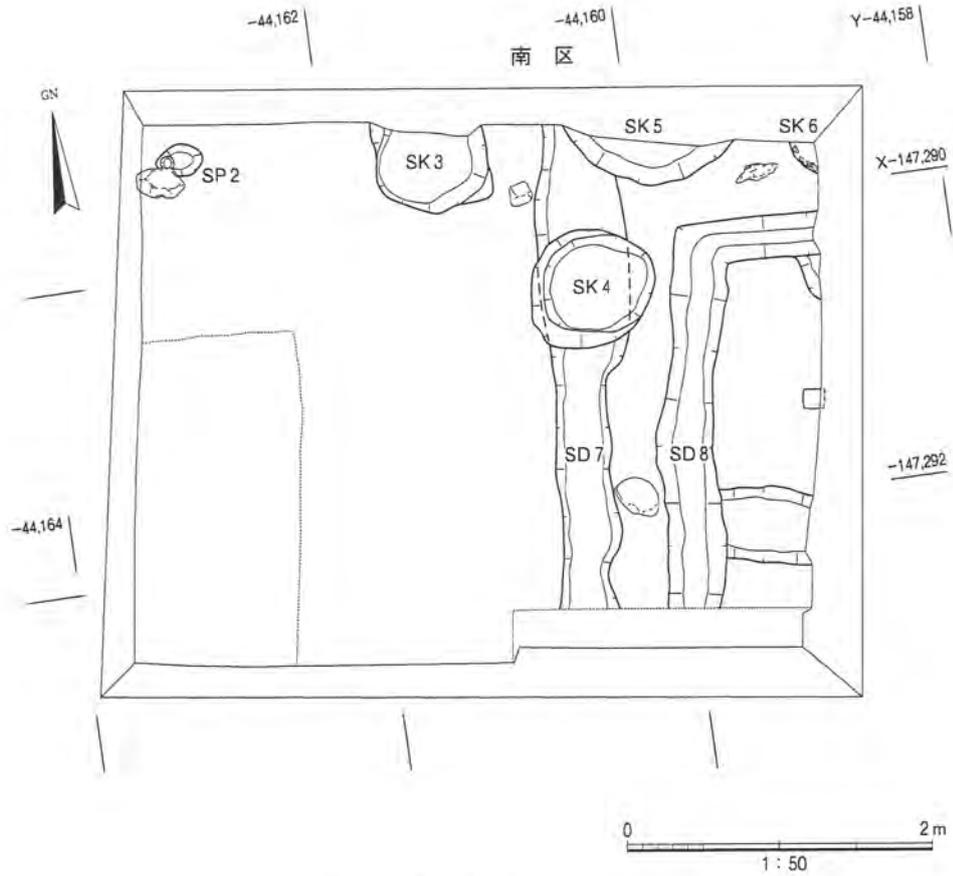


图7 第7層上面遺構平面图

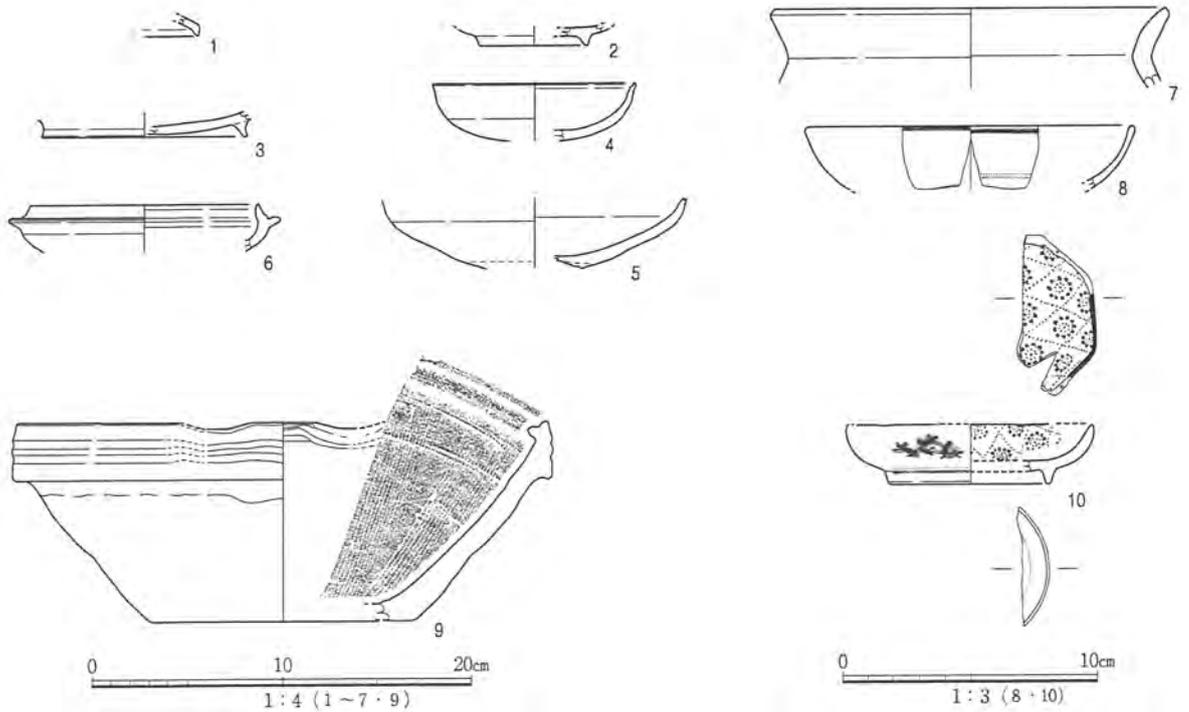


图8 出土遺物実測图

第5層(SD9)：1・2、第6層(SD10)：3、第6層(SD12)：6、第6層：4・5・7、第4層：8、SK4：9・10

3) 正方位をとる溝と難波京についての考察

i) SD12・10・9と難波京条坊

難波宮が条坊制によって区画された京城を伴うとする説は、澤村仁・藤岡謙二郎・岸俊男らによって提唱され、今日では、京城が存在することについてはほぼ衆目の一致するところとなり、整備の開始時期と施工範囲が問題点となってきている[澤村仁1970・藤岡謙二郎1971・岸俊男1975]。これらの説の立論の定点は、明治19年作製大阪実測図などに古道や条坊道路の痕跡が読み取れるという歴史地理学的所見にあり、難波宮の中心軸上を南下する道路(藤原京以降の朱雀大路相当)や四天王寺東方の方格子割(条坊の痕跡)が条坊制の名残とされている。条坊復元の原則は各氏とも共通しており、所謂朱雀大路を中心とし、その左右に1坊を藤原京と共通する265.5m四方(半里)の条坊を割り付け、1坊を4坪に分けるものである。最新の復元案である[積山洋2010]は考古学的調査成果を本格的に援用したものであるが、これもこの原則に則っている。

今回の調査で発見されたSD12・10・9はこの原則による条坊想定線によく一致する。すなわち、積山復元に対照すると、SD10は宮南面の2坊めで中心大路から西へ2坊めの南を画する条路側溝の位置に一致する。SD12の中心とSD10の交差する位置は、中心大路から西へ2本めの坊路(仮称：西二路)と先の南面条路との交差点から約64.5mの距離にある。難波京の1坊を通説通りに265.5m四方とし、これを16に坪割りする坊間路があったとすると道路の中心の間隔は66.375m ($265.5 \div 4$)となり、SD12の中心は西側の坊間路中心から西へ約2mの位置に当る($66.375 - 64.5 = 1.875$; 図9・10)。これはこの道路の西側の側溝の位置として相応しく、同時に、側溝の心々でみた道路幅員は約4m($= 1.975 \times 2$)ということになる。SD9は奈良時代から中世にかけて存続したとみられ、第6層が客土された後も維持された道路の側溝と捉えることができ、条坊に基づく地割が中世にも継承されたと考えられる。

上記の1坊を4分する道路の存在が正しく、坊内の坪割りに係るものだとすると、難波京における1坊の大きさの捉え方によって次の二つの坪割りが考えられる。一つめは1坊を265.5m四方とした場合で、従来、1坊を4分し、4坪(4町)とする坪割りが考えられていたが、件の道路の存在から1坊を平城京と同じに16分して16坪とする坪割りを想定することが可能となる。当然、1坪の面積は平城京に比べて小さい1/4町になる。しかし、これはSD12・10より時期が降るものではあるが、後期難波宮造営時宅地班給記事の「三位以上：1町、五位以上：半町、六位以下：1/4町以下」とした規定の最小単位に合致するようである。もう一つは、1坊を530m四方(最近では藤原京も平城京と同じ530m四方であったとする考え方が優勢である[小沢毅1997])とした場合で、この場合、1坊は72分されることになり、いかにも坪割りが細かすぎるので、今回の発見の道路は坪割りを反映しているとするより坪内を細分した宅地割りを反映しているとみた方がよさそうである。既に述べたように、SD12・10の年代は7世紀に求められ、平城京において宅地の細分が奈良時代後半の新しい時期に盛んになることが指摘されていること[山岸常人1988]を鑑みても、前者の1坊265.5m四方で1坊を16坪に割り、1坪の面積を1/4町とする考え方により高い蓋然性を見出すことができるのである。SD12による区画がSD9によって後に継承されることも坪割りの溝であることの証左であろう。目を転じ

て、明治19年大阪実測図の四天王寺東南に見える「字十六」は条坊の十六条を示すと考えられてきたが [岩本次郎1992]、坪割りの溝の十六坪を反映した可能性が生じてくるのである。

ii) 上本町遺跡北部の条坊関連遺構

本調査第6層の年代は、前述したように7世紀後葉～末とみられる。この時期には、天武6(679)年の「難波に羅城を築く」記事、天武12(683)年の複都制の詔などから難波京の建設が本格的に進行したと考えられており、第6層はこの京域造成工事に伴う整地層であることが考えられる。このことが正しければ、第6層によって埋積されるSD12・10は、天武朝の難波京建設工事に先行することになる。これは天武朝に先行して京の条坊道路が存在したことを示しており、具体的には孝徳朝に遡るとみてよいであろう。孝徳朝に条坊制に則った京域があったことに関しては否定的な意見が多いが、SD12・10はその可能性を示しており、その意味で重要な発見といえるのである。近年、前期難波宮の周縁部で曹司とみられる建物群が相次いで発見されており、藤原宮以降のような、内裏・朝堂院を曹司が取り巻いて存在する景観が前期難波宮の段階に遡ることが確実になってきている。そこに働く官人の住宅を確保する必要があったとすれば、広い宅地が準備されていたことは十分に首肯することができる。

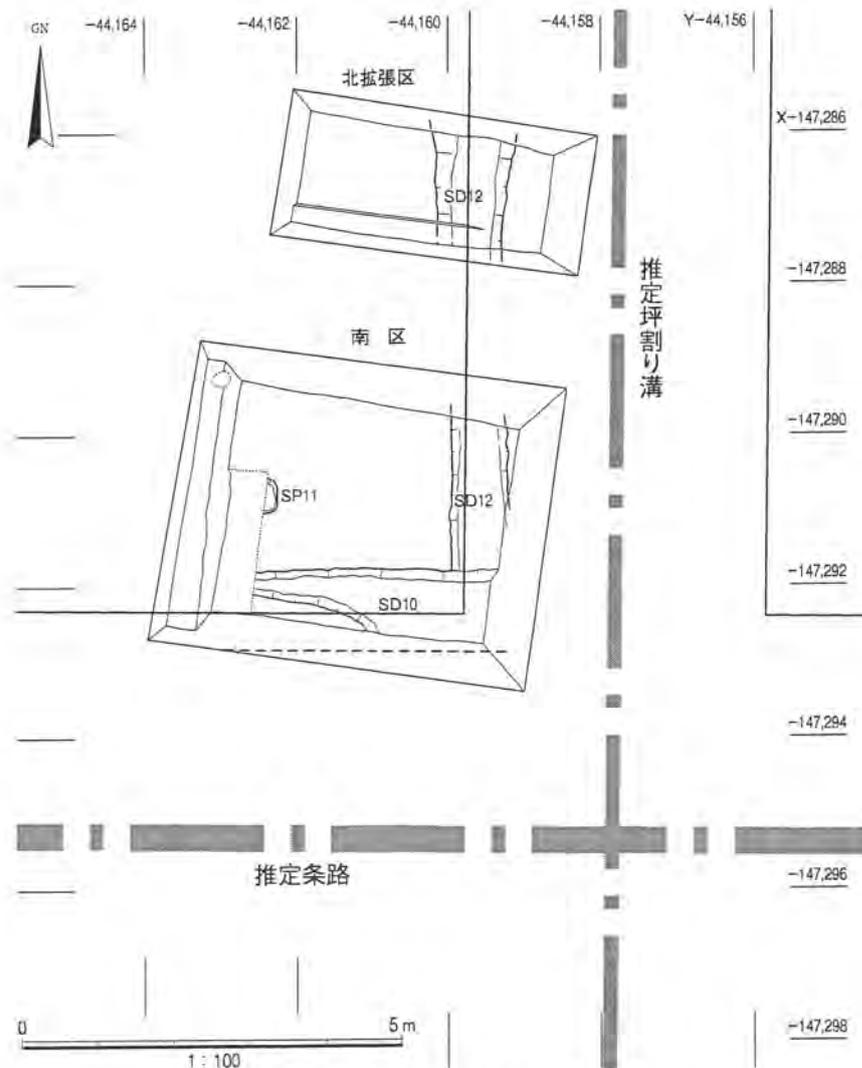


図9 SD10・12と条坊道路想定線

つまり、理論的には、この時期の京整備は必然ということもできるのであり、実際に遺構が発見されることが待たれる。

では、孝徳朝の条坊と認め得る遺構がほかにも発見されているのだろうか。上本町遺跡の北部に当る本調査地周辺は比較的多くの調査が行われており、その成果をまとめると次のようになる(図10)。

①本調査で7世紀中葉の可能性がある溝(SD10・12)と中世まで存続した溝(SD9)があり、上述のようにいずれも条坊および坪割り想定線に一致する。

②UH08-8次調査で7世紀中葉の遺物を含み、西一路の側溝とみられる溝が存在する。

③UH92-2次調査で7世紀中葉とされる正南北方向の溝2条が存在するが、条坊および坪割り想定線には合致しない。

④UH11-8次調査で7世紀後葉の遺物を含み、条坊区画に対して大きく斜交する溝が存在する。

⑤本調査で想定した坊間路は、すぐ南のUH11-7次調査では検出されていない。

⑥NW137次調査で奈良時代に属し、条坊の方位に合致し直角に曲がる溝が存在し、条路方向には条坊想定線に合致するが、坊路方向には合致しない。

⑦UN05-1次調査で1坊を2分する線に合致する南北方向の溝が存在するが、時期は中世末～近世に降る。

①～③は孝徳朝の条坊やそれに基づく遺構としてもおかしくはない。しかし、それに続く天武朝の④は難波宮以前の遺構の方向を踏襲しており、条坊制とは無関係である。⑥は後期難波宮の時期に属し、他の地域でもこの時期に条坊想定線に合致する遺構は散見される。①・⑦は条坊の地割が中世にまで継承されたものとみられ、同様な例は他にも複数ある。

以上のように、①～③を積極的に評価すれば条坊制は孝徳朝に遡るといえるが、④・⑤のような状況が近辺に存在し、この考えに警告を与えている。孝徳朝の難波京については、現段階では可能性を指摘するに留め、今後、調査例の増加を待って判断するべきであると考えらる。

4)まとめ

・古代の溝であるSD10・12と古代～中世に存続したSD9を発見した。これらの溝は難波宮の周辺に開かれた市街地、難波京の条坊に関する道路の側溝であるとみられる。

・溝の年代からみて、難波京条坊の成立は孝徳朝に遡る可能性があり、かつ、中世にも受け継がれたとみられる。

・徳川期の町屋の一部とみられる遺構を発見した。

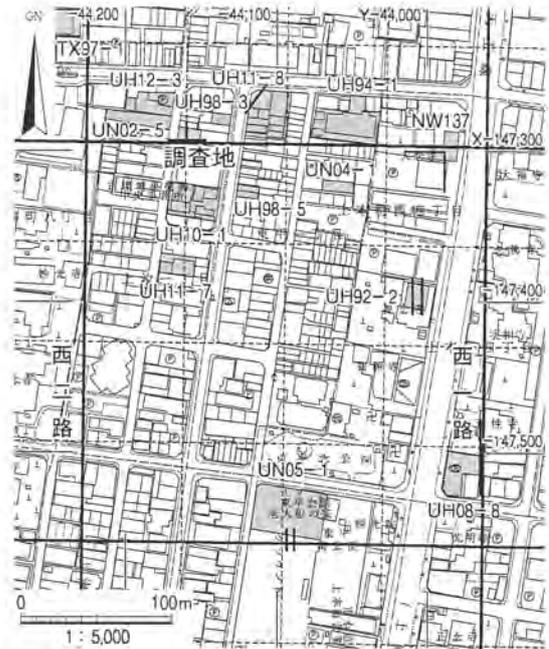


図10 坪割り想定線(破線)と遺構

引用・参考文献

- 岩本次郎1992、「副都難波京」：直木孝次郎編『古代を考える 難波』、吉川弘文館、pp.170-200
- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1999、「石原商店による建設工事に伴う確認調査(TX97-1)」：『平成9年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.31-39
- 2000a、「友成公氏による建設工事に伴う発掘調査(UH98-3)」：『平成10年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』 pp.57-61
- 2000b、「森口氏による建設工事に伴う発掘調査(UH98-5)」：『平成10年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』 pp.62-65
- 2004、「上本町遺跡発掘調査(UN02-5)報告書」：『平成14年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.33-39
- 大阪文化財研究所2012a、『上本町遺跡』Ⅲ
- 2012b、『中央区上汐一丁目における建設工事に伴う上本町遺跡発掘調査(UH12-3)報告書』
- 小沢毅1997、「藤原京の成立」：『考古学研究』第44巻第3号、考古学研究会、pp.52-71
- 岸俊男1975、「都城と律令国家」：『岩波講座日本歴史2 古代2』岩波書店
- 澤村仁1970、「難波京について」：『難波宮址の研究』第六
- 積山洋2010、「複都制下の難波京」：『東アジアにおける難波京と古代難波の国際的性格に関する総合研究』、平成18～21年度科学研究費補助金研究成果報告書、pp.79-96
- 藤岡謙二郎1971、「古代の難波京域を中心とした若干の歴史地理学的考察」：『織田武雄先生退官記念人文地理学論叢』柳原書店
- 山岸常人1988、「宅地と住宅」：『特集古代の都城』季刊考古学第22号、雄山閣出版、pp.64-68

南区 南壁地層断面



南区 SD9とSD10
(西より；SD12未掘)



北拡張区 SD9
(南西より)



西心斎橋1丁目所在遺跡発掘調査(WS12-2)報告書

調査個所 大阪市中央区西心齋橋2丁目15-4
調査面積 約49㎡
調査期間 平成25年3月8日～3月11日
調査主体 公益財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所
調査担当者 次長 南 秀雄、市川 創

1) 調査に至る経緯と経過

今回の調査地は、上町台地西側の低地部に立地し、地下鉄御堂筋線心斎橋駅の南西に位置する(図1)。調査地付近は古くは摂津国西成郡に属し、調査地の東には御津八幡宮が隣接し、南東180mの地点には織田信長の本願寺攻めにもその名のみられる三津寺がある。古代においては、付近は「難波御津」あるいは「難波三津」などとも文献に記された国家的港津「難波津」の推定地の1つとなっている[千田稔1984・大阪市史編纂委員会1989a]。また、鎌倉時代には石清水八幡宮の荘園である「三津寺荘」が調査地付近一帯に存在したとされる[大阪市史編纂委員会1989b]。中世末以降、付近は三津寺村と呼ばれ、江戸時代以降は市街地化が進んだ。このように、周辺は古代より近世にいたるまで歴史的に重要な場所にあり、現在も商業地として店舗が建ち並ぶ繁華な地域である。

西心斎橋1丁目所在遺跡における既往の調査成果をみると、北方160mで行われたWS08-1次調査では、海浜砂層から摩耗度の低い奈良時代の遺物が出土するとともに、12~13世紀頃の遺物を検出している[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2010]。またNB03-1次調査では、14世紀前半の遺構・



図1 調査地位置図(遺跡範囲は「大阪府地図情報提供システム」より)

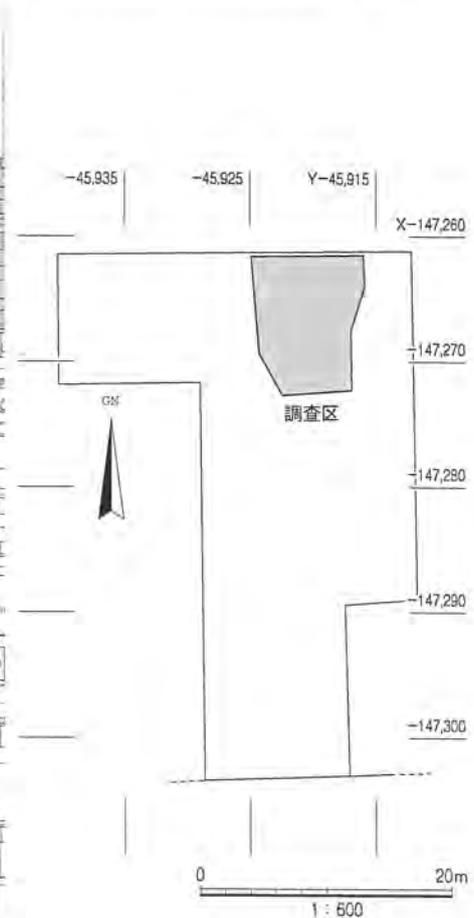


図2 調査区配置図

遺物を検出したほか、17世紀後半に整地が行われて以降、町としての開発が進んだことが明らかになった[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2004]。そのほか、調査地から御堂筋を挟んで東に位置する東心斎橋1丁目所在遺跡(HB01-1次調査)では17世紀中葉の遺構・遺物を[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2003]、南方350mに位置する難波1丁目所在遺跡(NA05-1・NB09-1次調査)では、奈良時代の湿地性堆積層や中世の遺構・遺物を確認している[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2006、大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2011]。これらの調査によって、かつて大阪湾に面した海浜部であった当地の成立と開発に係わる知見が蓄積されている(図1)。

大阪市教育委員会によって試掘調査が実施されたところ、現地表下1.75m以下の深さに中世～徳川期の遺構面および遺物包含層を確認したため、今回の調査を実施することとなった(図2)。調査は3月8日より着手し、事業者によって後述する第2層まで掘削が行われた状態で開始した。その後、遺構埋土および第3層以下の掘下げはすべて人力によって行い、遺構検出・掘下げ・断割り・記録などの作業を適宜行い、調査を進めた。こうした工程を経て、現場での作業については、3月11日に機材類の撤収を含むすべての工程を完了した。

また、本報告書で用いた方位は、現場で記録した街区図を1/2500大阪市デジタルマッピング地形図に合成することにより得た世界測地系座標に基づき、座標北を基準にした。標高はT.P.値(東京湾平均海面値)で、TP+〇mと記した。

2) 調査の結果

i) 層序(図3・4)

調査地周辺の地形はほぼ平坦で、標高はTP+2.2mほどである。今回の調査では、現地表下325cmまでの地層を3層に区分した。

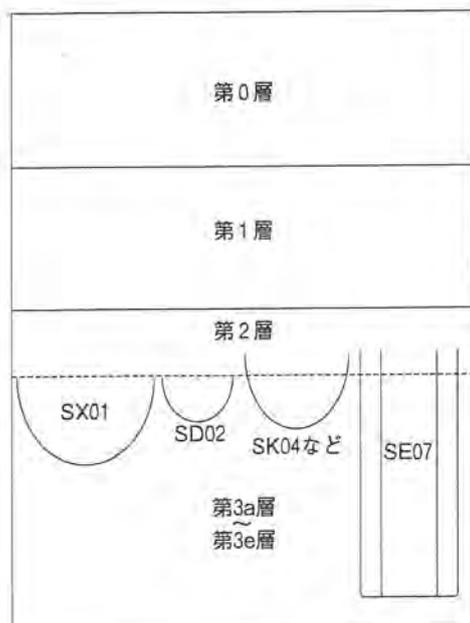


図3 地層と遺構の関係図

第0層：現代の盛土および攪乱であり、層厚は最大で220cm以上ある。

第1層：徳川期の盛土層であり、主として暗褐色のシルト質砂からなる。層厚は最大で88cmだった。層内には複数の遺構面が認められ、調査区西壁では礎石状の石材が観察できた。壁面の清掃中に、徳川期の肥前磁器が出土している。

第2層：徳川期の盛土層であり、オリーブ褐色の含炭シルト質中粒砂～細礫からなる。層厚は最大で54cmであった。本層から遺物は出土しなかったが、SK09との重複関係から、17世紀後半以降の地層であることがわかる。

第3層：上部で平行葉理の発達する海浜成層であり、上位から第3a層～第3e層の5層に細分した。

第3a層は、黄褐色の細粒砂～中礫からなり、分級は悪い。

層厚は最大で16cmであった。本層の上面で、SX01、SD02、SK04~06・08~10、SE07を検出した。

第3b層は、黄褐色の極細粒~細粒砂からなる。層厚は10cmであった。

第3c層は、黄褐色の細粒~中粒砂と粗粒砂~細礫の互層からなる。層厚は66cmで、北西に緩く傾斜する平行葉理が発達する。

第3d層は、黄褐色の中粒~粗粒砂と中礫質中粒~極粗粒砂の互層からなり、調査区の東側へ向うにつれわずかに細粒化していた。層厚は最大で34cmであった。

第3e層は、黄褐色の中粒砂~細礫と中礫質中粒~極粗粒砂の互層で、雲母が顕著に含まれていた。層厚は35cm以上あり、トラフ型斜交葉理が観察できた。

これらのうち、第3a層は後浜の堆積層、第3b層以下は上部外浜~前浜の堆積層であろう。また、第3d・3e層は極めて粗粒であることから、瀑浪による堆積物と考えられる。第3層からは土師器・須恵器・瓦が出土している。このうち図8に示した東播系須恵器6から、第3層の時期の一端が14世紀に求められる。

ii) 遺構と遺物

a. 中世の遺構と遺物(図5・6)

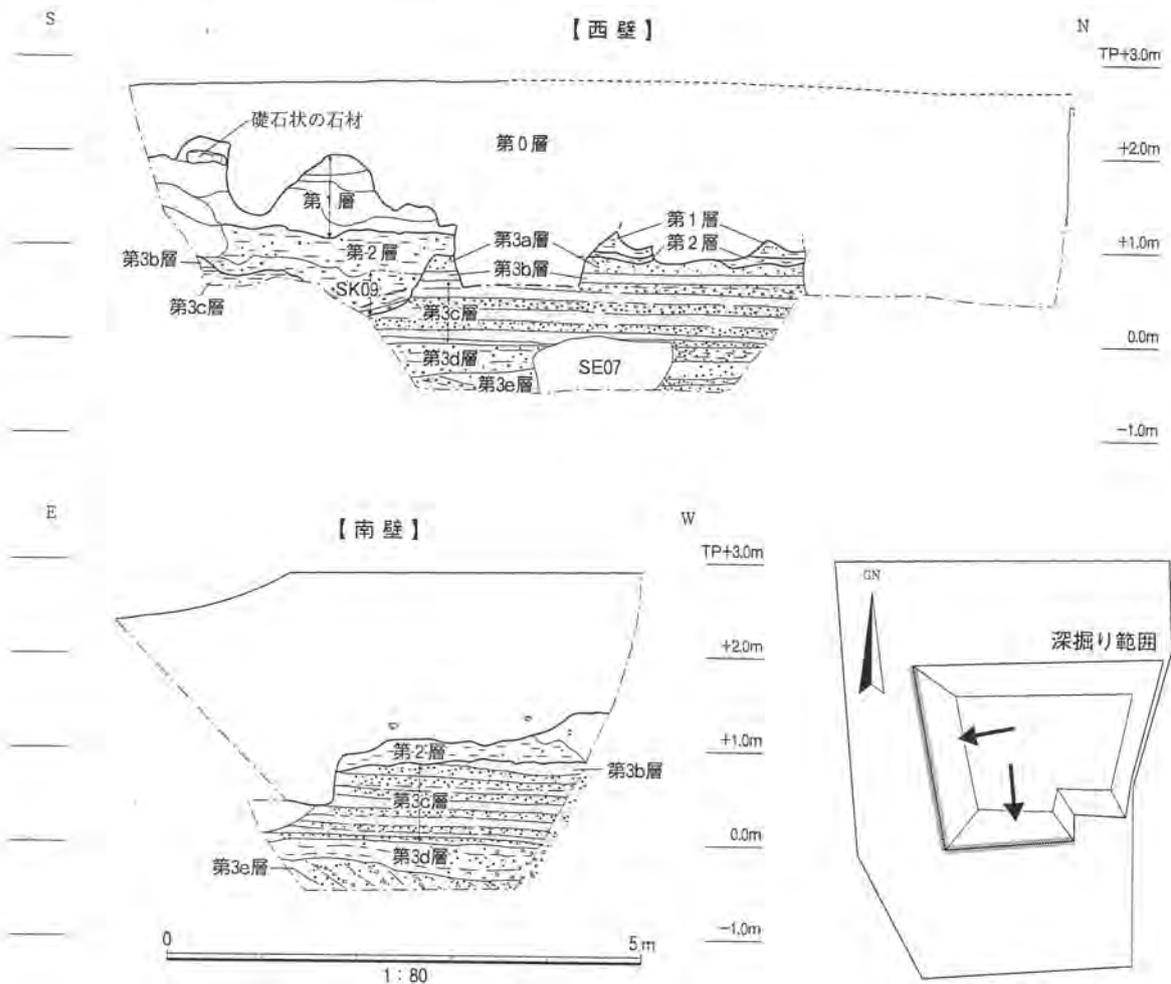


図4 調査区西壁・南壁地層断面図

第3層上面において検出した遺構のうち、SX01・SD02は出土遺物および埋土の特徴から中世後期の遺構であると考えられる。

SX01 調査区の東北部で検出した。北西-南東方向に延び、長さは2.5m以上、幅は0.7m以上ある。検出面からの深さは0.5mである。遺構の性格は土壙ないし溝であろう。埋土は褐灰色シルト質細粒～中粒砂からなる機能時堆積層があり、礫混りシルト質中粒～極粗粒砂で埋る(図6)。当遺構からは土師器・須恵器・瓦質土器・瓦が出土し、このうち瓦質土器1・2を図示した(図6)。1は甕の口縁部で、玉縁状に外反する形態である。内面の口縁部より下位にはわずかにハケメが観察できる。2は挿鉢で、口縁端部を下側に拡張し、体部外面にはヘラケズリを施す。形態などからみて[佐藤隆1996]、1・2とも15世紀頃の資料であろう。

SD02 SX01の西側で検出した溝状の遺構である。長さ1.4m、幅0.3mで、検出面からの深さは0.2mであった。埋土は細粒～極粗粒砂で、遺物は出土しなかった。

b. 徳川期の遺構と遺物(図5・7・8)

第3層上面において、SE07およびSK04～06・08～10を検出した(図5)。

SE07 調査区の西端で検出した。円形を呈する掘形の直径は1.6mで、検出面からの深さは0.8m以

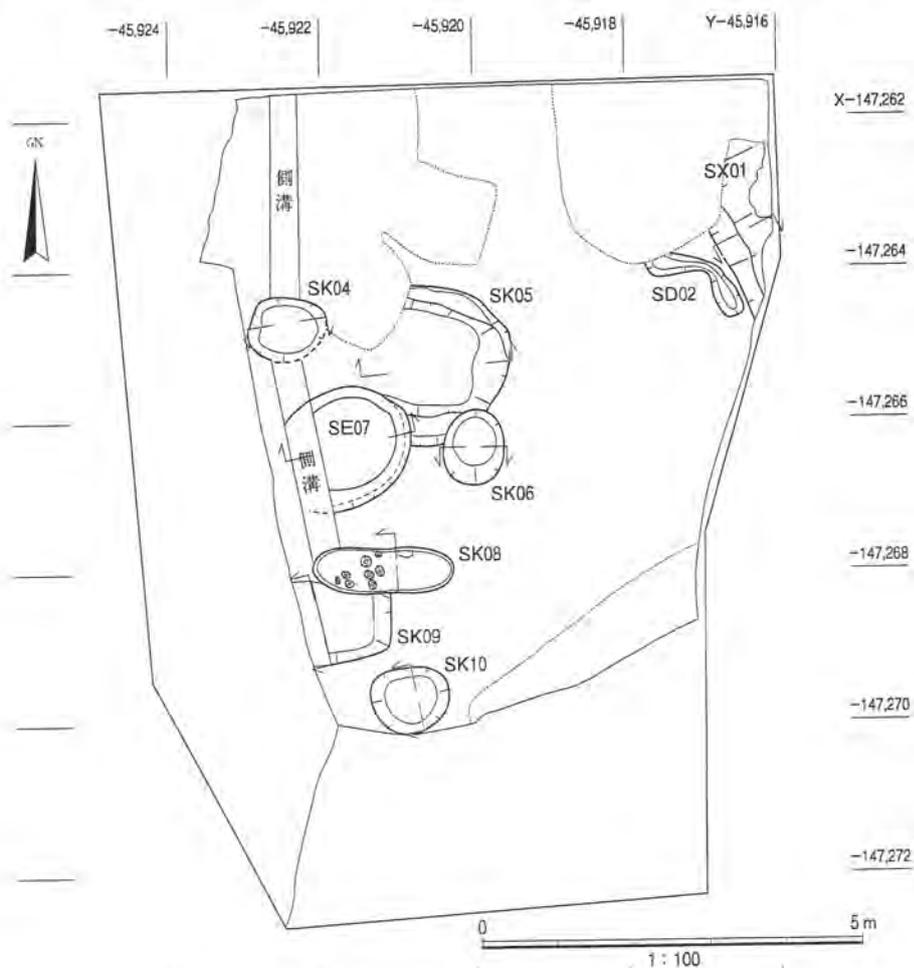


図5 第3層上面の遺構平面図

上ある。断面観察から、円形に組んだ木材を井戸側としたことがわかり、その直径は1.0mである(図7)。井戸側内の埋立て土は、上部が漆喰を含む砂礫、下部が砂礫であった。掘形の埋土は砂礫である。当遺構からは土師器・須恵器・肥前陶器・肥前磁器・軟質施釉陶器・関西系陶器・土製品・瓦・金属製品・スラグ・貝類が出土し、このうち井戸側内から出土した肥前磁器3を図示した(図8)。3は蛇の目凹形高台の染付皿である。当資料から、井戸の廃絶時期が18世紀後半以降であることがわかる。

SK04 調査区の西端で検出した。平面系はいびつな楕円形を呈し、長径1.0m、短径0.8mで、検出面からの深さは0.3mであった。埋土は最下部に機能時堆積層とみられる含炭中粒～粗粒砂質シルトがあり、含炭シルト質細粒～極粗粒砂で埋没する(図7)。当遺構からは関西系陶器・丹波焼・肥前磁器・金属器が出土している。

SK05 調査区の中央部で検出した。SE07およびSK04・06によって破壊されているが、本来は東西に長い長方形を呈し、東西2.7m以上、南北2.1mの規模がある。検出面からの深さは0.5mである。埋土は炭およびシルトの偽礫を含むシルト質中粒～極粗粒砂で、粗粒砂の薄層が挟在する(図7)。当遺構からは土師器・瓦質土器・肥前陶器・肥前磁器・関西系陶器・瓦・鞆羽口・金属器・サヌカイト・動物遺体が出土した。

SK06 調査区の中央部で検出した。平面形はほぼ円形で、直径は1.0m、検出面からの深さは0.3mであった。埋土は下半が粗粒砂の偽礫を含む細粒～極粗粒砂、上半がシルトの偽礫を含むシルト質中粒～極粗粒砂である(図7)。当遺構からは肥前磁器が出土している。

SK08 調査区の南部で検出した。平面形は東西に長く、長さは1.8m、幅は0.6m、検出面からの深さは0.3であった。埋土は含炭シルト質細粒～中粒砂である(図7)。当遺構からは土師器・備前焼・肥前陶器・肥前磁器・関西系陶器・瓦・金属製品・埴壇・壁土など、18世紀中葉以降の資料が出土している。

SK09 調査区の西南端で検出した。遺構の北部はSK08によって破壊されている。東西・南北とも1.2m以上の規模があり、検出面からの深さは0.4mである。埋土は下部に機能時堆積層とみられる含炭シルト質中粒～粗粒砂があり、上部は含炭シルト質細粒～極粗粒砂で埋る(図7)。当遺構からは土師器・瓦質土器・肥前磁器・関西系陶器・瓦が出土した。

SK10 調査区の南端で検出した。平面形はほぼ円形で、直径は1.0m、検出面からの深さは0.3mであった。埋土の下半は含炭シルト質中粒～粗粒砂で、最下部には第3層由来の偽礫を含んでいた。埋土の上半は、含炭シルト質中粒～極粗粒砂である(図7)。当遺構からは土師器・肥前陶器・肥前磁器

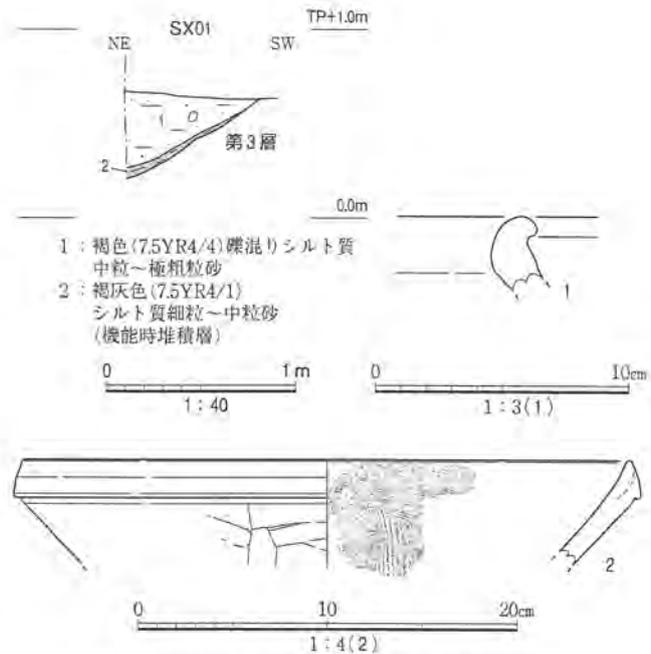


図6 SX01遺構断面図および出土遺物実測図

が出土し、このうち肥前磁器4・5を図示した(図8)。染付の碗4は器壁が厚く、高台端部には砂が付着する。口縁が外折する青磁の皿5は、内面を蛇ノ目釉剥ぎする。これらの遺物からみて、遺構の時期は17世紀後半であろう。

b. 各層出土遺物(図8)

第3層出土遺物では、東播系の須恵器6および平瓦7を図示した。6は口縁端部を上下に拡張しており、形態からみて14世紀前半頃の資料であろう。当資料が、第3層出土資料中でもっとも新しい年代を示す。平瓦7は凹面に粗い布目痕を有する。

このほか、重機掘削後の清掃中に出土した土製品8を図示している。粗い胎土を使用して手づくねで作られており、外面は強く被熱している。窯での焼成時に融着防止などの目的で使用された窯道具であろう。

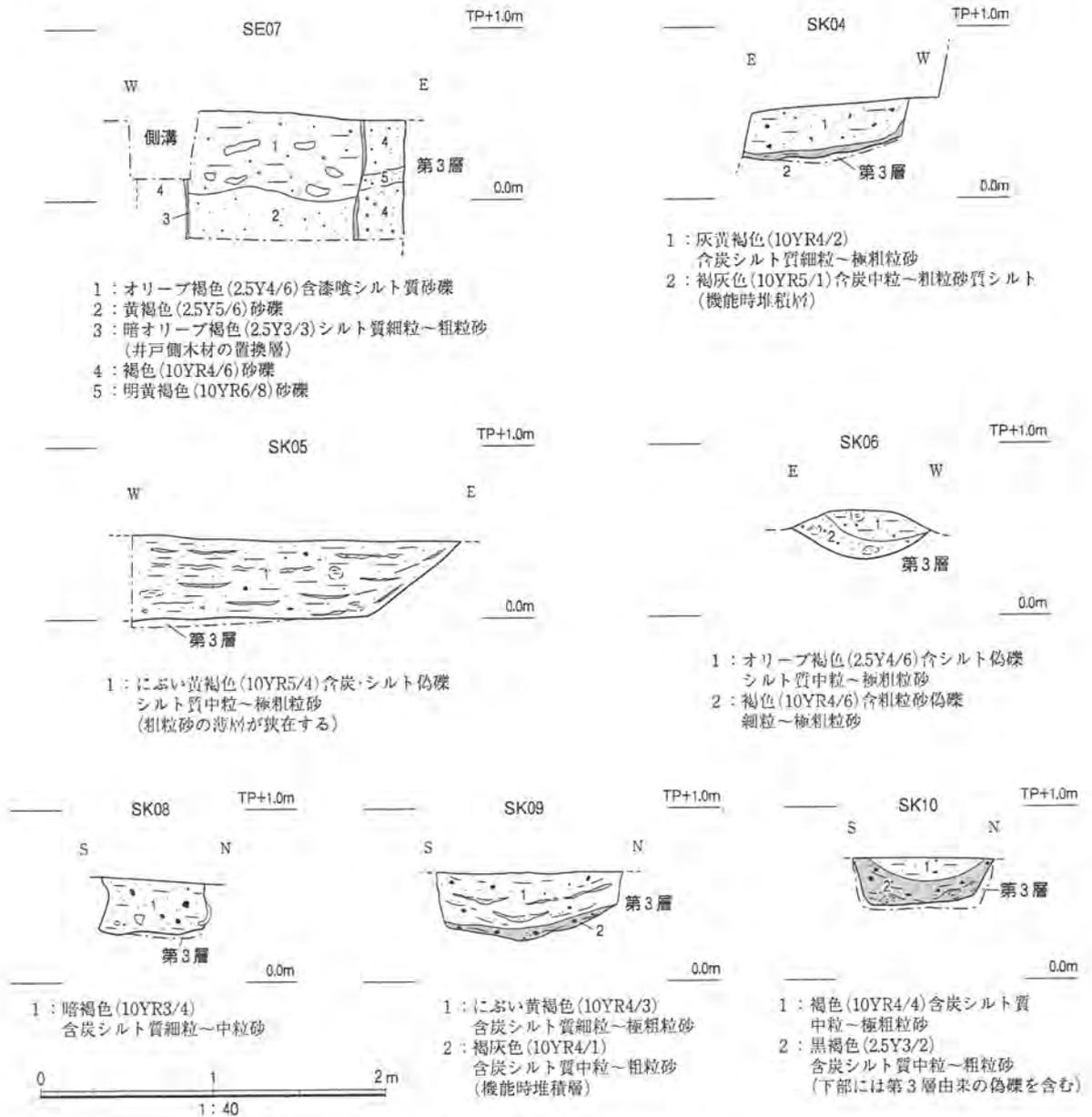


図7 徳川期の遺構断面図

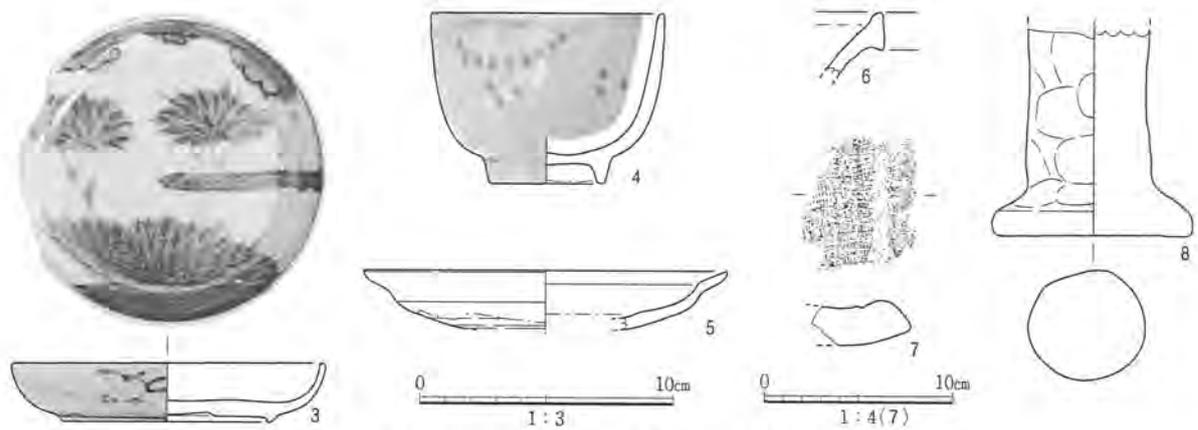


図8 徳川期の遺構および各層出土遺物実測図
SE07(3)、SK10(4・5)、第3層(6・7)、重機掘削後清掃中(8)

3)まとめ

以下に、今回の発掘調査成果をまとめる。

- ・周辺での調査と同様、今回の調査でも海浜成層を検出した。その標高はTP+0.90mであり、もっとも新しい時期を示す遺物は14世紀前半頃のものであった。
- ・遺構では、15世紀頃のSX01がもっとも古いものである。
- ・その後、若干の空白期があり、再度遺構・遺物が認められるのは17世紀後半である。
- ・古代における港津施設や、中世における三津寺荘の存在を具体的に示す知見は得られなかったが、かつて大阪湾に面していたこの地の成立ちと開発を考える上で、重要な成果を得ることができた。

引用文献

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会

2003、「東心斎橋1丁目所在遺跡発掘調査(HB01-1)報告書」：『平成13年度 大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.31-36

2004、「西心斎橋1丁目所在遺跡発掘調査(NB03-1)報告書」：『平成15年度 大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.15-20

2006、「難波1丁目所在遺跡発掘調査(NA05-1)報告書」：『平成17年度 大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.27-31

2010、「西心斎橋1丁目所在遺跡発掘調査(WS08-1)報告書」：『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』2008、pp.269-276

大阪市教育委員会・大阪文化財研究所

2011、「難波1丁目所在遺跡発掘調査(NB09-1)報告書」：『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』2009、pp.105-114

大阪市史編纂委員会1989a、『新修 大阪市史』第一巻 大阪市

大阪市史編纂委員会1989b、『新修 大阪市史』第二巻 大阪市

佐藤 隆1996、「中世後期の陶磁器・土器について」：『四天王寺旧境内遺跡発掘調査報告』I 大阪市文化財協会、pp.81-92

千田 稔1984、『埋もれた港』学生社

調査地遠景
(南西から)



調査区地層断面
(北東から)



第3層上面の遺構
(南から)



上本町遺跡発掘調査(UH12-9)報告書

調査個所 大阪市天王寺区上本町9丁目302-15・302-16・302-17
・302-34
調査面積 40㎡
調査期間 平成25年2月12日～2月13日
調査主体 公益財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所
調査担当者 次長 南 秀雄、櫻田小百合

1) 調査に至る経緯と経過

調査地は上町台地の中央部に位置し、上本町遺跡の南半部に当る。これまでに周辺で行われた調査では近世や古代の遺構が確認されており、調査地東側で行われたNW81-4次調査では奈良時代の井戸が検出されている[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1983]。

今回の調査は、建設工事に先立ち大阪市教育委員会が平成25年1月28日に試掘調査を行った結果、遺構・遺物が確認されたことから本発掘調査を実施したものである。

調査は、平成25年2月12日に着手し、東西5m、南北8mの調査区を設定して行った。現代の整地層および第1層を重機により慎重に掘削し、遺構検出および遺構の掘下げを人力により行った。平面図(縮尺1/20)・地層断面図(縮尺1/20)・遺構断面図(縮尺1/10)の実測、および写真撮影により記録作業を行った後、埋戻しを行い、平成25年2月13日に撤収した。

なお、基準点はMagellan社製ProMark 3により測位し、本報告で用いた方位は世界測地系に基づく座標北を基準とした。水準値はTP値(東京湾平均海面値)で、TP+○mと表記した。

2) 調査の結果

i) 層序

調査地における現地表面の標高はTP+16.6m程度で平坦である。

第0層：現代の整地層である。層厚は60~80cm程度である。

第1層：オリブ褐色(2.5Y4/4)中~細礫の混じるシルト質粗粒~細粒砂からなる19世紀前半以降の地層である。層厚は0~20cmである。

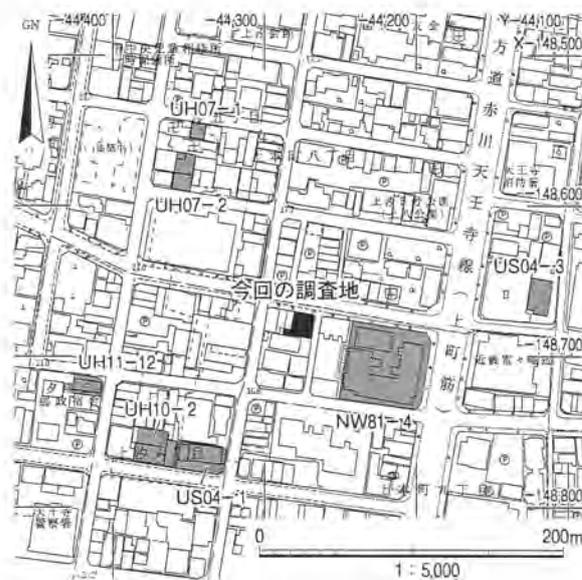


図1 調査地位置図

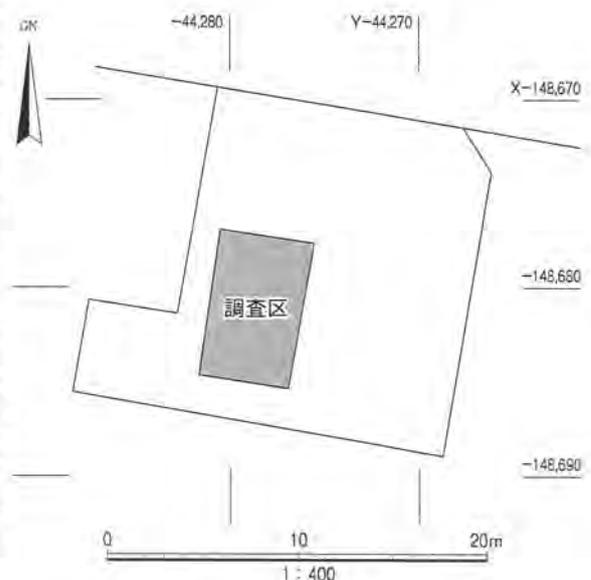
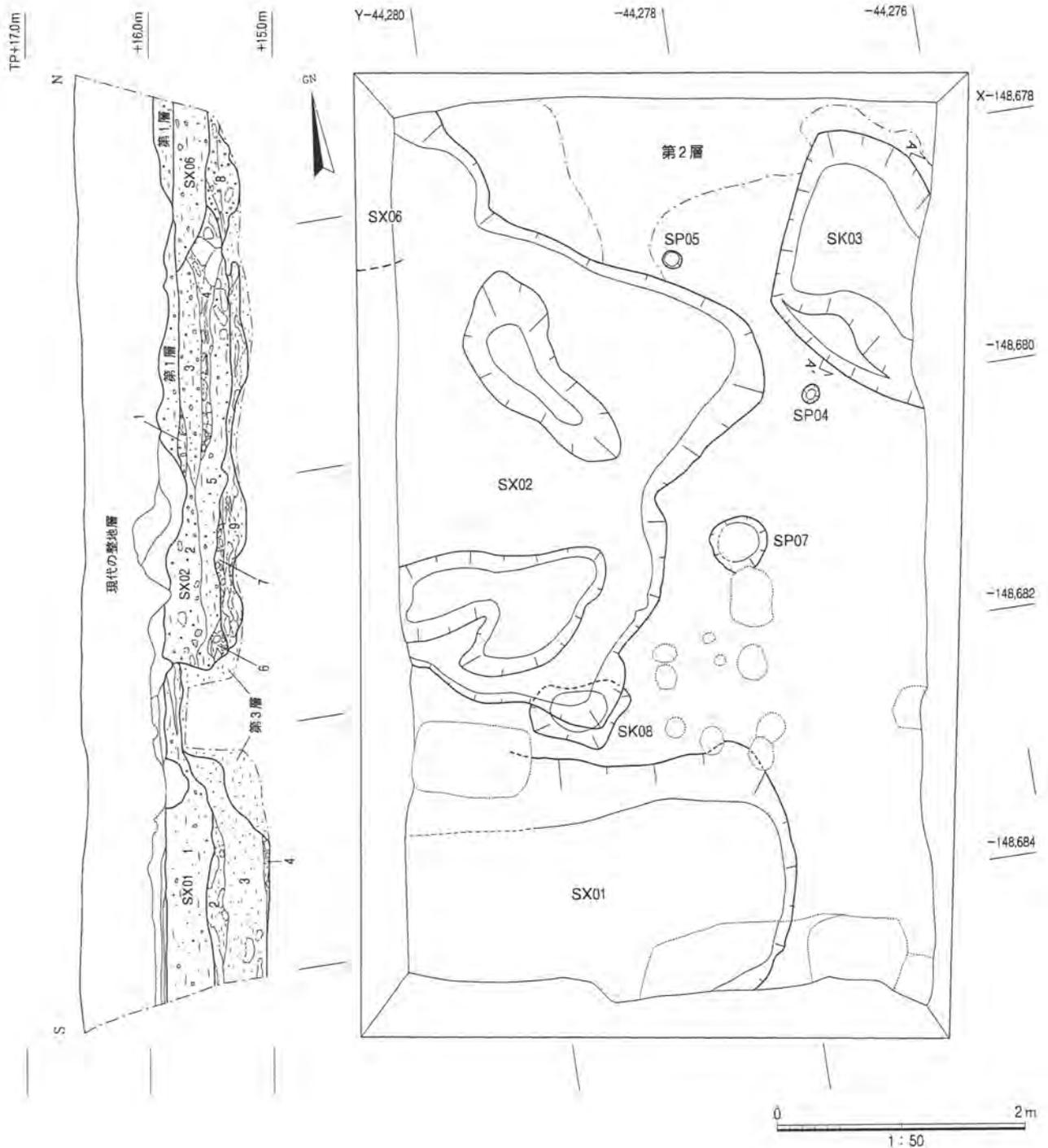


図2 調査区位置図



第1層: オリーブ褐色(2.5Y4/4)シルト質粗粒～細粒砂(中～細礫混じる)
 第2層: 褐色(10YR4/4)中礫～粗粒砂(調査区北端部にのみ残存)
 第3層: 灰オリーブ色(5Y6/2)細粒～極細粒砂

SX01:

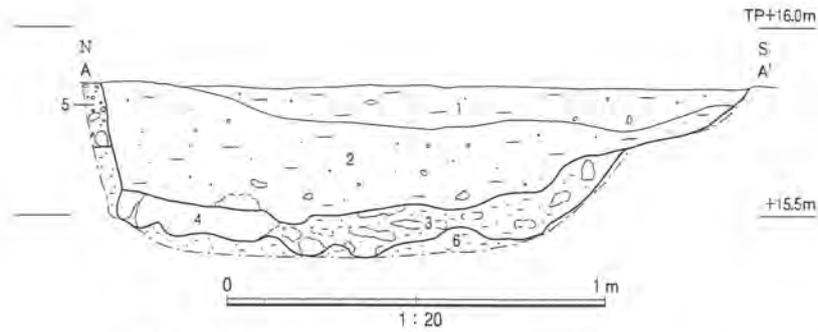
- 1: におい黄褐色(10YR4/3)細粒砂質シルト(中礫～粗粒砂混じる)
- 2: オリーブ黄色(5Y6/3)細粒～極細粒砂(第3層由来)に第2層の偽礫(オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト質極粗粒～粗粒砂)混じる[加工時堆積層]
- 3: オリーブ黄色(5Y6/3)細粒～極細粒砂(第3層由来)に第2層の偽礫(オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト質極粗粒～粗粒砂)混じる[加工時堆積層]
- 4: オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト質粗粒～細粒砂(中礫～極粗粒砂混じる)[加工時堆積層]

SX02:

- 1: オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト(中礫～粗粒砂混じる)
- 2: 暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト質細礫～粗粒砂(中礫、3の偽礫、第3層の偽礫混じる)
- 3: におい黄褐色(10YR4/3)細粒砂質シルト(中礫～粗粒砂混じる)
- 4: オリーブ褐色(2.5Y4/3)粗粒～細粒砂質シルト(第2層の偽礫、第3層の偽礫混じる)
- 5: オリーブ褐色(2.5Y4/4)極粗粒～細粒砂質シルト(中～細礫、第2層の偽礫混じる)
- 6: 黄灰色(2.5Y4/1)シルト質細礫～粗粒砂(第3層の偽礫混じる)
- 7: 灰オリーブ色(5Y6/2)シルト質細粒砂(第3層由来)に第2層の偽礫混じる[加工時堆積層]
- 8: におい黄褐色(10YR5/4)中礫～粗粒砂(第2層由来)に第3層の偽礫混じる[加工時堆積層]
- 9: 灰白色(5Y7/2)細粒～極細粒砂(第3層由来)に第2層(黄褐色(10YR5/6)の偽礫混じる[加工時堆積層])

SX06: 暗灰黄色(2.5Y4/2)細粒～極細粒砂質シルト(中礫～粗粒砂混じる)

図3 平面図・西壁地層断面図



- 1: 黒褐色(10YR3/2)シルト(中礫～粗粒砂混じる)
- 2: オリーブ褐色(2.5Y4/4)粗粒～細粒砂質シルト(中礫～極粗粒砂・5の偽礫混じる)
- 3: 灰オリーブ色(5Y5/3)細粒～極細粒砂(6由来)に5の偽礫混じる(加工時堆積層)
- 4: 5の偽礫(黄褐色(2.5Y5/4))(加工時堆積層)
- 5: 黄褐色(2.5Y5/6)中礫～粗粒砂[第2層]
- 6: 灰オリーブ褐色(5Y6/2)細粒～極細粒砂[第3層]

図4 SK03断面図

第2(地山)層: 褐色(10YR4/4)中礫～粗粒砂からなる段丘の構成層である。調査区北端部にのみ残存した。層厚は0～20cm程度である。

第3(地山)層: 灰オリーブ色(5Y6/2)細粒～極細粒砂からなる段丘の構成層である。層厚は70cm以上である

ii) 遺構と遺物

遺構は地山層上面で検出した。検出した遺構は、落込み3基、土壇2基、小穴3基である。

SX01 東西3.16m以上、南北2.78m以上、深さ0.80mを測る落込みである。地山の偽礫を含む2層

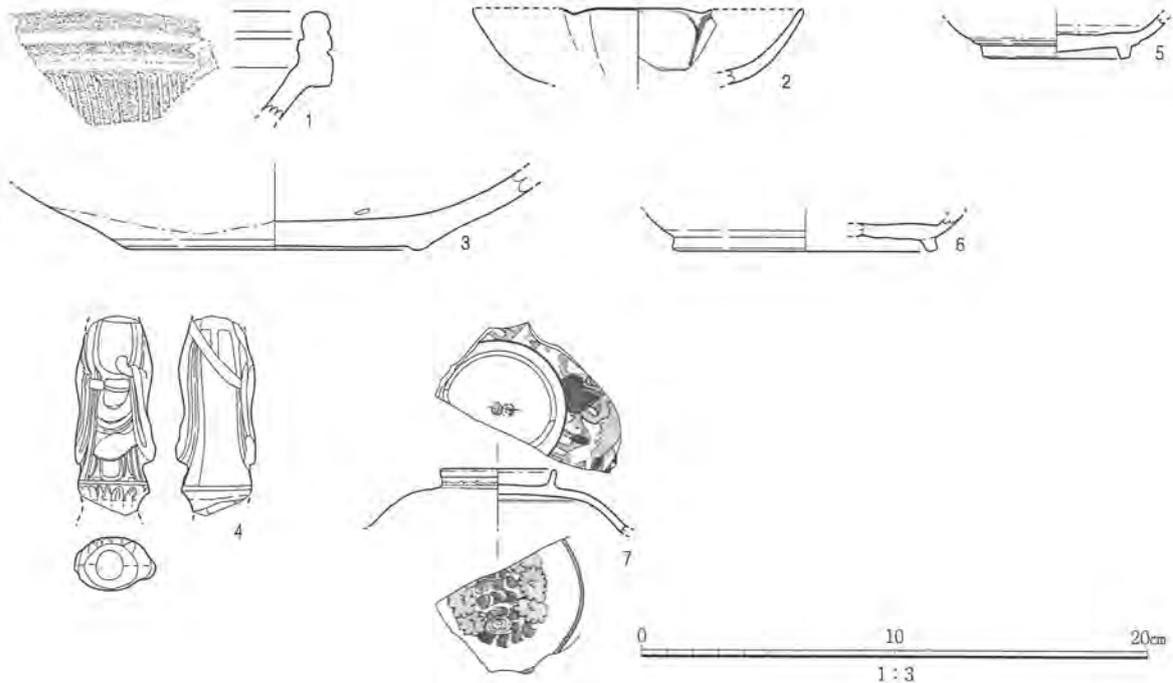


図5 出土遺物実測図

SX01(1)、SX02(2～4)、SK03(5・6)、SX06(7)

以下は加工時堆積層と考えられ、1層は客土により埋められたものと考えられる。土採り穴の可能性はある。遺物は土師器・須恵器・国産陶器・瓦が出土している。堺播鉢1が出土していることから18世紀後半の遺構と考えられる。

SX02 東西2.96m以上、南北4.55m以上、最深部の深さ0.74mを測る落込みである。7～9層は地山の偽礫を含んでおり加工時堆積層と考えられ、1～6層は客土により埋められたものと考えられる。土採り穴の可能性はある。遺物は土師器・須恵器・国産陶磁器・瓦・土製品が出土している。凸面縄目叩き、凹面布目の瓦や17世紀中葉の肥前磁器染付輪花皿2なども含んでいるが、瀬戸美濃焼陶器の盤3が出土していることから19世紀前半の遺構である。仏像の土人形4もこの時期のものであろう。

SK03 東西1.42m以上、南北1.72m、深さ0.46mの土壙である。地山の偽礫を含む3層以下は加工時堆積層と考えられ、1・2層は埋められたものと考えられる。出土遺物には、土師器・須恵器・輸入磁器・瓦がある。7世紀後葉～8世紀と考えられる須恵器杯B6や、凸面縄目叩き、凹面布目の瓦などを含んでいるが、中国産白磁皿5が出土していることから16世紀の遺構である。

SP04 直径0.14～0.16m、深さ0.07mを測る小穴である。出土遺物はなく、時期は不明である。

SP05 直径0.14～0.16m、深さ0.11mを測る小穴である。出土遺物はなく、時期は不明である。

SX06 南北1.38m以上、深さ0.3mを測る落込みである。肥前磁器・軟質施釉陶器細片・瓦が出土している。肥前磁器の染付端反り碗の蓋7が出土しているほか、SX02との重複関係から19世紀前半の遺構と考えられる。

SP07 直径0.46m、深さ0.12mの小穴である。出土遺物はなく、時期は不明である。

SK08 東西0.72m、南北0.58m、深さ0.31mの土壙である。出土遺物はなく時期は不明であるが、SX02との重複関係からこれよりも古いといえる。

3)まとめ

今回の調査では、16世紀の土壙1基、18世紀後半～19世紀前半の落込み3基、時期不明の土壙1基、小穴3基を検出した。また、今回の調査では古代に遡る遺構は確認できなかったが、落込みや土壙内に古代の遺物が含まれていたことから、付近に古代の遺構が存在した可能性がある。調査地周辺における古代の遺構としては、NW81-4次調査で検出された井戸のほか、UH08-9次調査において7世紀後葉の井戸が検出されている[大阪文化財研究所2012]。今後、資料がさらに蓄積されることで、当該期における当遺跡周辺の様相が明らかになることを期待する。

参考文献

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1983、「難波宮跡(NW81-4次)発掘調査概報」：『昭和56年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.57-62

大阪文化財研究所2012、『上本町遺跡発掘調査報告Ⅳ』



全景(北東から)



全景(南東から)



西壁地層断面(北東から)



SK03(南東から)

上本町遺跡発掘調査(UH12-18)報告書

調査個所 大阪市天王寺区生玉前町305-18
調査面積 18㎡
調査期間 平成25年3月19日～3月21日
調査主体 公益財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所
調査担当者 次長 南 秀雄、黒田慶一

1) 調査に至る経緯と経過

上本町遺跡は、市内を南北に延びる上町台地の中央部にある。調査地は前・後期難波京の京域内に当り、難波京朱雀大路跡からは西へ約730mに位置している。周辺の調査では、奈良時代以降の遺構や遺物が多数発見されている(図1)。北隣のUH09-3次調査では奈良時代の井戸のほか、奈良時代の条坊推定線に重なる中世後期の東西溝が検出されている[大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2011]。北東70mのUS06-1次調査では奈良時代後半～平安時代初頭の建物群を検出し[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2008]、東130mのUH10-5次調査[大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2012]や北北東200mのUS04-2次調査[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2005]でも奈良時代の溝や柱穴が見つまっている。これら密に分布する遺構中、建物や溝は正方位を採っている。

平成25年3月1日に大阪市教育委員会が試掘調査を行ったところ、地表下1.5～1.8mで地山が検出され、古代の土器も出土したことから、本調査を実施することになった。掘削深度が深く、排土の置き場が問題になったことから、大阪市教育委員会の立会いのもと、調査規模を縮小して、調査地の東寄りに南北3m、東西6mの調査区を設定(図2)し、3月19日から調査を開始した。地表下1.4mまで重機掘削し、以後は人力による遺構検出、検出状況の写真撮影、遺構の掘下げ、掘下げ後の遺構写真撮影、平面・断面図作成などの作業を行い、埋戻し終了後、3月21日に機材類の撤収を含むすべての工程を完了した。

以下、本報告で使用する標高はT.P.値(東京湾平均海面値)であり、本文・挿図中では「TP+○m」と示す。また、本報告書で用いた方位は、現場で記録した街区図を1/2500大阪市デジタル地図に合成することにより得た世界測地系座標に基づき、座標北を基準にした。



図1 調査地位置図



図2 調査区位置図

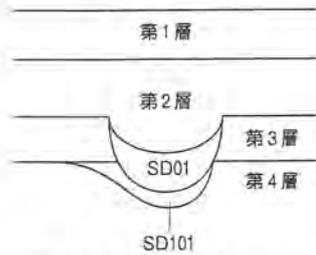


図3 地層と遺構の関係図

2) 調査の結果

i) 層序

調査地は谷町筋に面した平坦地で、地表面はTP+21.1~21.2mを測るが、北隣のUH09-3次調査地では、地表面はTP+21.3~21.4mであった。

第1層：炭・焼土を含む暗褐色(10YR3/3)シルト質粗粒砂の近~現代盛土層である。層厚は50~80cmで、下面に凹凸が見られる。

第2層：層厚30~80cmのにおい黄褐色(10YR4/3)粗粒砂質シルトの整地層で、溝SD01を最終的に埋める。本層からは肥前陶磁器など近世の遺物が出土した。

第3層：層厚25~30cmを測り、におい黄褐色(10YR4/3)シルト質粗粒砂などの水成層からなる。SD101の埋土である。

第4層：段丘構成層で、褐色(10YR4/4)粗粒砂質細礫からなる地山層である。上面は西側で行った試掘調査と同様、北から南へ距離2.0mで0.15~0.30m下がる緩斜面であった。上面はTP+19.6~19.7mで、北隣のUH09-3次調査区の本層上面が、TP+20.6~20.7mであったのに比して、かなり低くなっている。

ii) 遺構と遺物

a. 第4層上面の遺構(図4~6)

SD101 幅0.9~1.4m、深さ0.4mの正方位をとる東西溝で、北肩が緩く傾斜し、北下端沿いに、幅0.3m、深さ0.2mの小溝が形成されている。須恵器長頸壺1、肥前陶器碗2、平瓦3、獣骨が出土した。1は7世紀後葉、2は17世紀前葉、3は凸面に縄目叩き痕と離れ砂、凹面に離れ砂、狭端部に面取り

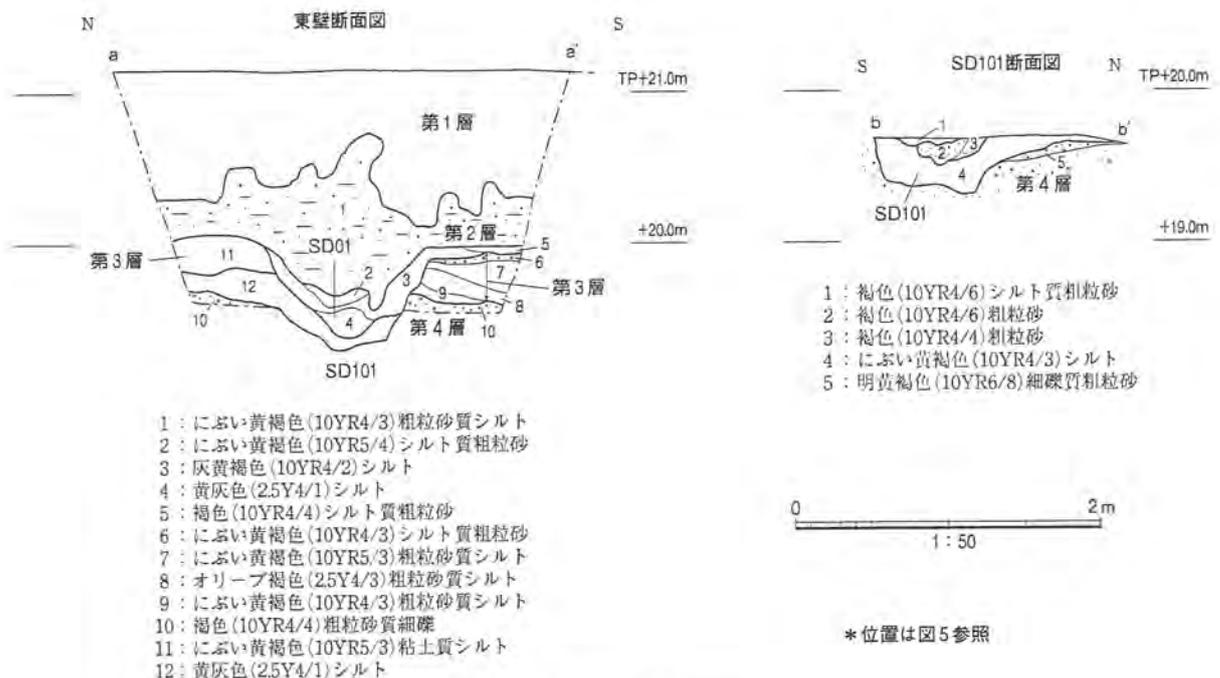


図4 地層・遺構断面図

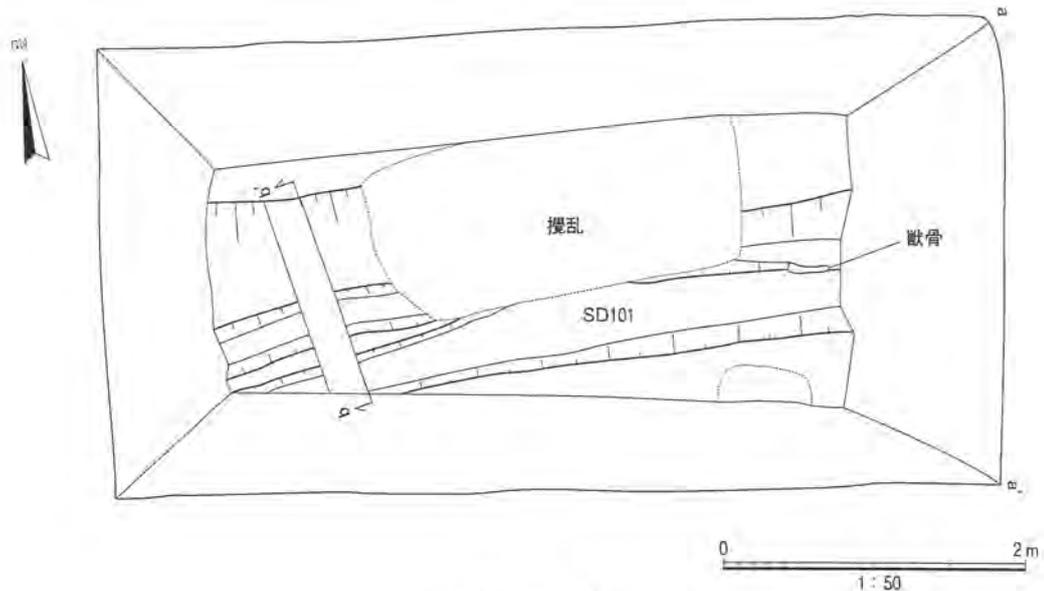


図5 平面図

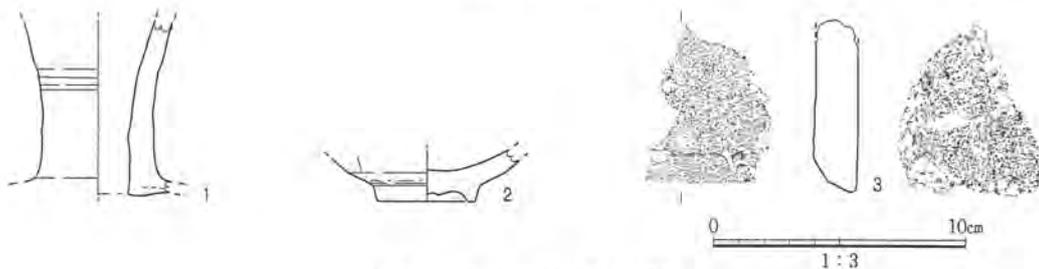


図6 SD101出土遺物実測図

が見られる中世瓦である。上層のSD01の埋土の一部もSD101と同じ黄灰色(2.5Y4/1)シルトで区別できなかったことから、2はSD01の埋土に伴う可能性がある。

b. 第3層上面の遺構(図4)

SD01 上端幅1.1m、下端幅0.3m、深さ0.6mの東西溝で、SD101の位置・規模を踏襲したものと考えられる。最下層に黄灰色(2.5Y4/1)シルトが堆積し、褐色(10YR4/4)シルト質粗粒砂などの水成層で埋まった後、整地土である第2層のにおい黄褐色(10YR4/3)粗粒砂質シルトで完全に埋められる。

iii) 遺構の検討(図7)

北隣のUH09-3次調査では、奈良時代の井戸と、奈良時代の難波京条坊推定線と重なる中世後期の東西溝SD301を検出したが、その溝幅は2.5m以上を測り、調査区内でSD301の南肩は検出されておらず、南で立上がる痕跡もなく、北肩上端はTP+20.7m、溝底面はTP+20.3mを測る。UH09-3次調査区南端は、今回のSD101の北肩から3.0mしか離れていないこと、SD101の北肩上端はTP+19.7m、底面がTP+19.3m、SD01の北肩上端はTP+20.0~20.1m、底面がTP+19.4mであることから、SD301の南肩が北肩ほどの標高をもつ場合、幅1.0~2.0mで、高さ0.7mの畦状の高まりを想定せねばならず、そのような遺構が永続して存在するとは考えられないので、SD301は溝というよりもその北肩が段を構成するもので、やや急な傾斜をもつ幅約5.5mのテラスの南側に、SD101とそれを踏襲したSD01が存在したと考えるべきであろう。

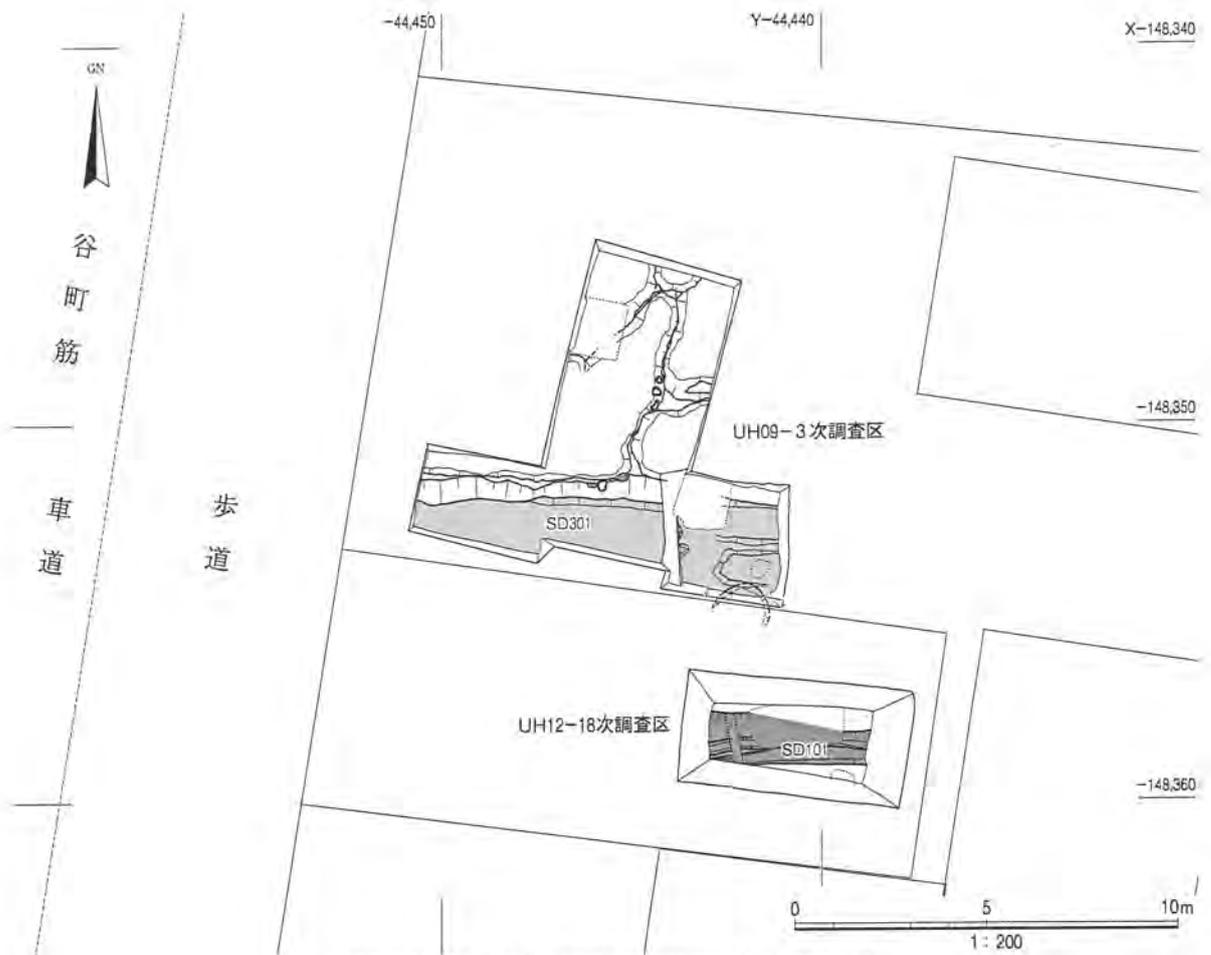


図7 UH09-3次SD301と今回のSD101の関係図

3)まとめ

今回の調査で、正方位をとる溝状遺構SD101・01を検出できた。遺構の標高からの検討で、北隣のUH09-3次調査の中世後期の正方位をとる溝状遺構SD301は溝ではなく、北肩が段をなし底面は、やや急傾斜のテラスを構成する可能性がある。

SD101がいつ掘削された溝であるか、また正方位をとる段がいつ形成されたかの検討は、将来の周辺の調査成果によらざるを得ないが、古代～中世にかけての段を用いた土地区画は、上町台地上に展開した都市的景観の中で評価すべきであろう。

以上のように、当地周辺は古代～中世の都市の変遷を復元する上で重要な地域である。今後とも周辺地域における調査成果を積み上げていくことは必要不可欠である。

引用・参考文献

- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2005、「上本町南遺跡発掘調査(US04-2)報告書」：『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2002・03・04)』、pp.203-210
- 2008、「上本町南遺跡発掘調査(US06-1)報告書」：『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2006)』、pp.251-259

大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2011、「上本町遺跡発掘調査(UH09-3)報告書」：『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2009)』、pp.191-200

2012、「天王寺区上汐四丁目における建設工事に伴う上本町遺跡発掘調査(UH10-5)報告書」：『平成22年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.29-39

調査区全景
(西から)



調査区全景
(北から)



SD101断面
(東から)



阿倍寺跡発掘調査(AB12-4)報告書

調査個所 大阪市阿倍野区松崎町2丁目38-6
調査面積 44㎡
調査期間 平成24年12月19日～12月20日
調査主体 公益財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所
調査担当者 次長 南 秀雄、高橋 工

1) 調査に至る経緯と経過

阿倍寺跡は上町台地上にあって、四天王寺の南約1kmに位置する。調査地周辺には、第二次世界大戦前まで阿倍寺に係る建物の基壇とみられる土壇が存在し、松長大明神にもかつて塔心礎があったとされる(図1・2)。また、7世紀後半の白鳳様式をもつ蓮華文軒丸瓦なども出土していることから、阿倍氏の氏寺である古代寺院阿倍寺が当地に存在したと目されている。

過去に行われた発掘調査では、土壇伝承地を取り囲むように、北側と東側にほぼ正方位をとる溝が検出されており(AB98-6・11-1次調査)、これらが伽藍地を画する溝であること、16世紀に溝が埋められることからこの頃に寺も廃絶したであろうことが考えられている[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2000、大阪文化財研究所2012a]。土壇伝承地西方のAB11-3・5次調査では南南東に延びる溝や概ね南東へ下がる斜面が見つかり、この辺りが寺域の西限と想定されている[大阪文化財研究所2012b・c]。

当地においては、建築工事に先立つ大阪市教育委員会による試掘調査によって、地表下約0.5mで地山層が検出され、近世とみられる遺構が存在することが明らかになり、本調査が行われることとなった。当初、敷地南東に調査区を設けて調査を開始したが(南区:25㎡)、攪乱多く、遺構もほとんど存在しなかったため、その北側にもう1箇所調査区を設け(北区:18㎡)て調査を行った。それぞれの調査区で、遺構の連続を追及するため小規模な拡張を行い、頭書の調査面積となった(図2)。表土は重機を用いて除去し、その後、地山層上面と遺構の検出、遺構の掘下げは人力で行い、適宜に実測図の作成や写真撮影によって記録を作成した。

また、本報告書で用いた方位は、現場で記録した街区図を1/2500大阪市デジタル地図に合成する

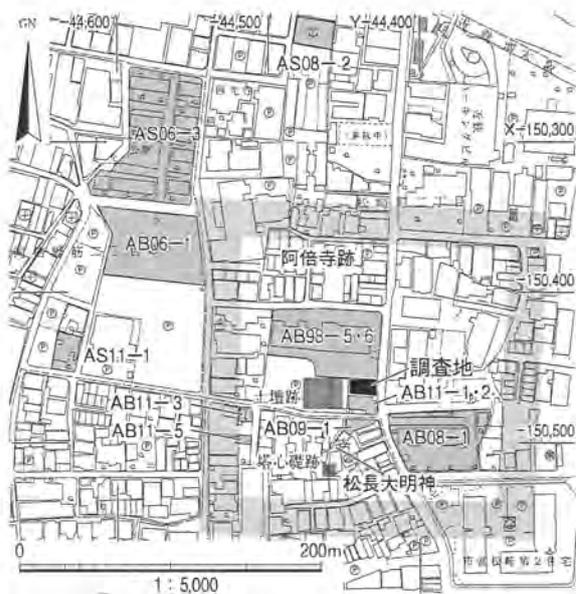


図1 調査地位置図

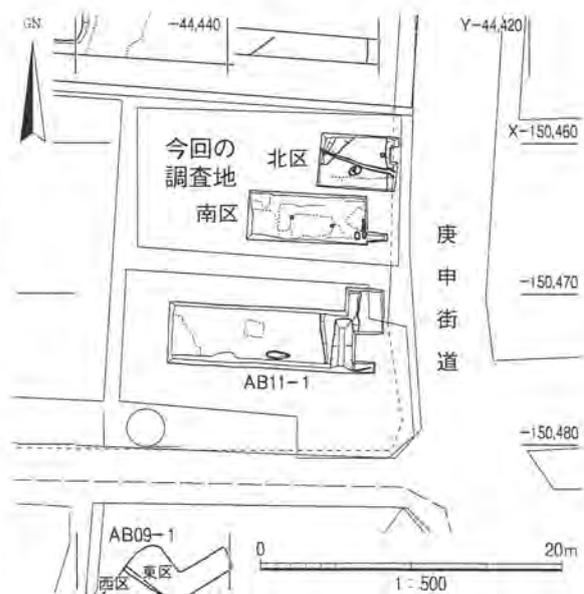


図2 調査区の配置

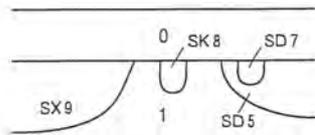


図3 地層と遺構の関係

ことにより得た世界測地系座標に基づき、座標北を基準にした。また水準値は東京湾平均海面値(T.P.値)であり、本文・挿図中ではTP+〇mと略記した。

2) 調査の結果

i) 層序(図3・4)

調査地内の現況地形は、西が高く、中央付近から東へ徐々に低くなって、約40cmの比高を生じてい

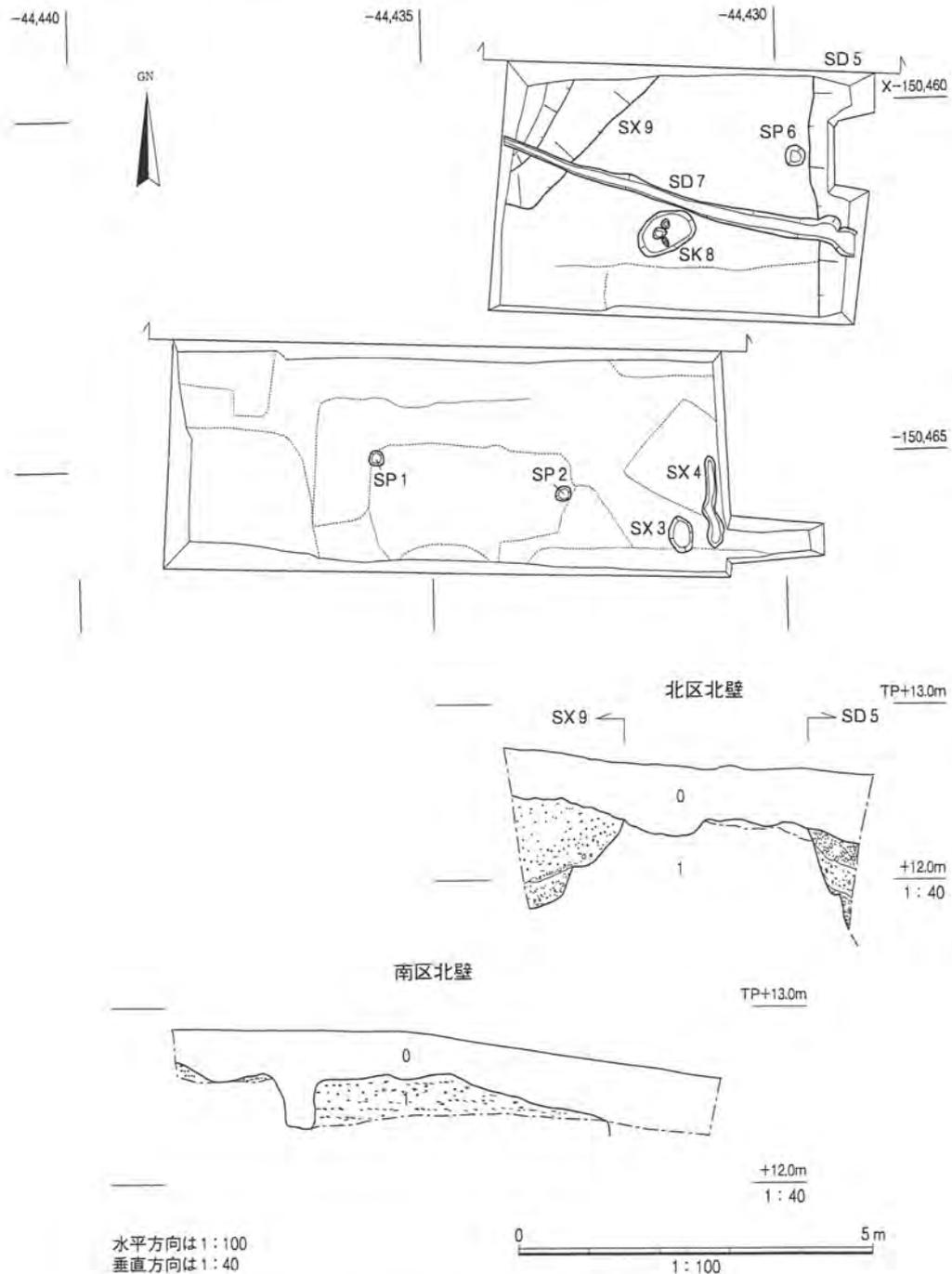


図4 遺構平面図・地層断面図

る。南・北区ともにこの低い方で発掘を行った。

第0層：瓦礫が混じる黒褐色砂からなる盛土層で、表土である。

第1層：明黄褐色粗粒砂～細礫からなる地山層である。岩相からみて、本来地山層上部を構成する細粒な堆積物は削剥されたとみられる。遺構はすべて本層の上面で検出した。

ii) 遺構と遺物(図4・5)

溝や土壇、落込み、小穴が検出されたが、出土遺物の年代から中世と近世の遺構に分けられる。

a. 中世の遺構

SX9 北区の北西で検出された落込みで、東西1.8m以上、南北1.7m以上で、概ね南西-北東方向に主軸をもつとみられ、調査区外北西に続くものとみられる。深さ0.6mまで掘り下げたが、底は検出されなかった。埋土は2層に分けることができ、上層はオリーブ褐色中礫質粗粒砂、下層は黄褐色中礫質粗粒砂でどちらも人為的に埋められていた。古代の瓦片(3・4など)とともに瓦器碗1が出土した。1は内面に疎らなヘラミガキを施す13世紀後半以降のもので、本遺構の埋没時期を示している。

SK8 北区の中央で検出された楕円形の土壇で、長軸方向0.8m、短軸方向0.6m、深さは0.1mである。上部は削平されたものとみられる。炭を含む褐色粗粒砂質シルトで埋められていた。土師器・瓦器の細片が出土したので、中世の遺構と判断した。

b. 近世の遺構

SD5 北区の東部で検出された南北方向に延びる溝で、東側の肩は調査区外にある。幅は0.7m以上、深さは0.6mまで掘り下げたが底は検出されなかった。埋土は3層に分けることができ、上層は地山層偽礫が混じる黄褐色砂、中層は暗オリーブ褐色粘土質シルト、下層は黄褐色粘土質シルトからな

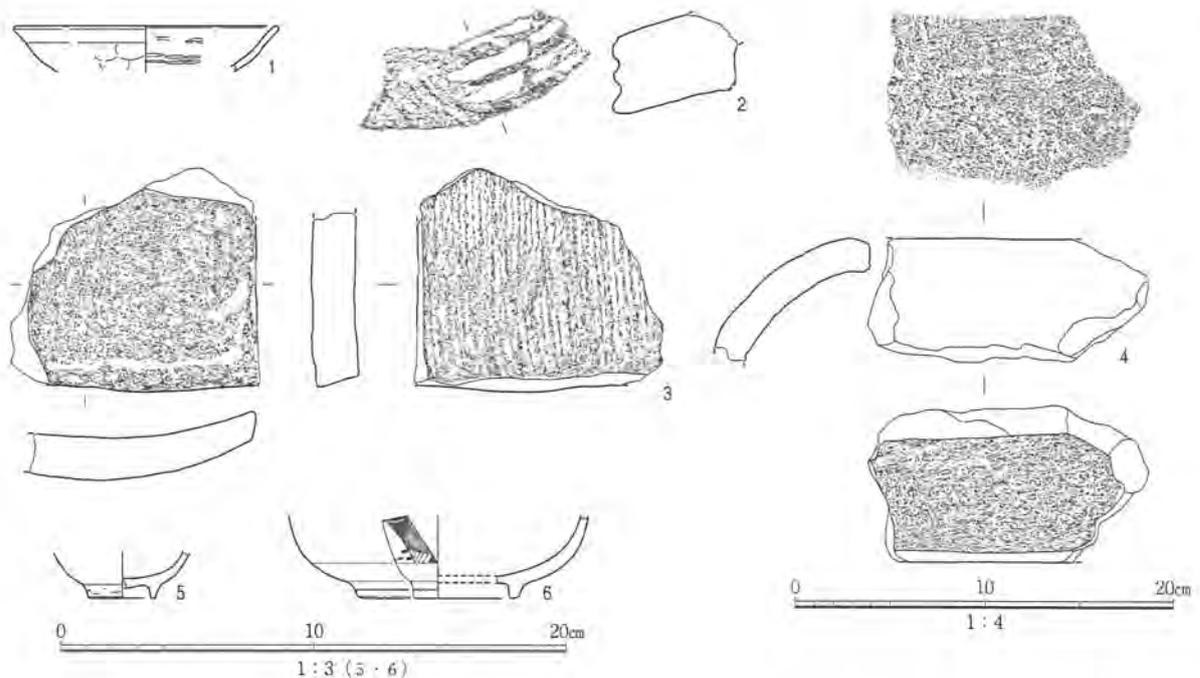


図5 出土遺物実測図

SX9(1・3・4)、SD5(2)、SD7(5・6)

り、上層は人為的な客土層、中層は自然堆積層で、下層も人為的な客土層とみだが、加工時形成層の可能性もある。上層から重弧文軒平瓦2が出土したが、中層からは関西系陶器の細片が出土したので遺構には18世紀以降の年代が与えられる。軒平瓦2は紋様が側縁にまではみ出し、範を押し直したようである。

SD7 北区で検出された東西に延びる溝で、埋没後のSD5を切っていた。幅0.1~0.3m、深さは0.2mで、暗灰褐色砂質シルトで埋められていた。西から東へ排水を行った溝ともみられたが埋土中に流水の痕跡はなく、機能は不明である。肥前磁器白磁小杯5、同染付鉢6などが出土し、19世紀以降の可能性がある遺構である。

SP1・2・6、SX3・4 北区で小穴SP6、南区で同SP1・2を検出した。いずれも直径0.1~0.2m、深さ0.1~0.2mのもので、柱痕跡は見られなかった。南区で検出されたSX3・4は不整形な落込みで、深さは0.1m未満あった。いずれの遺構からも遺物は出土せず、埋土からも所属時期を判断することはできなかった。

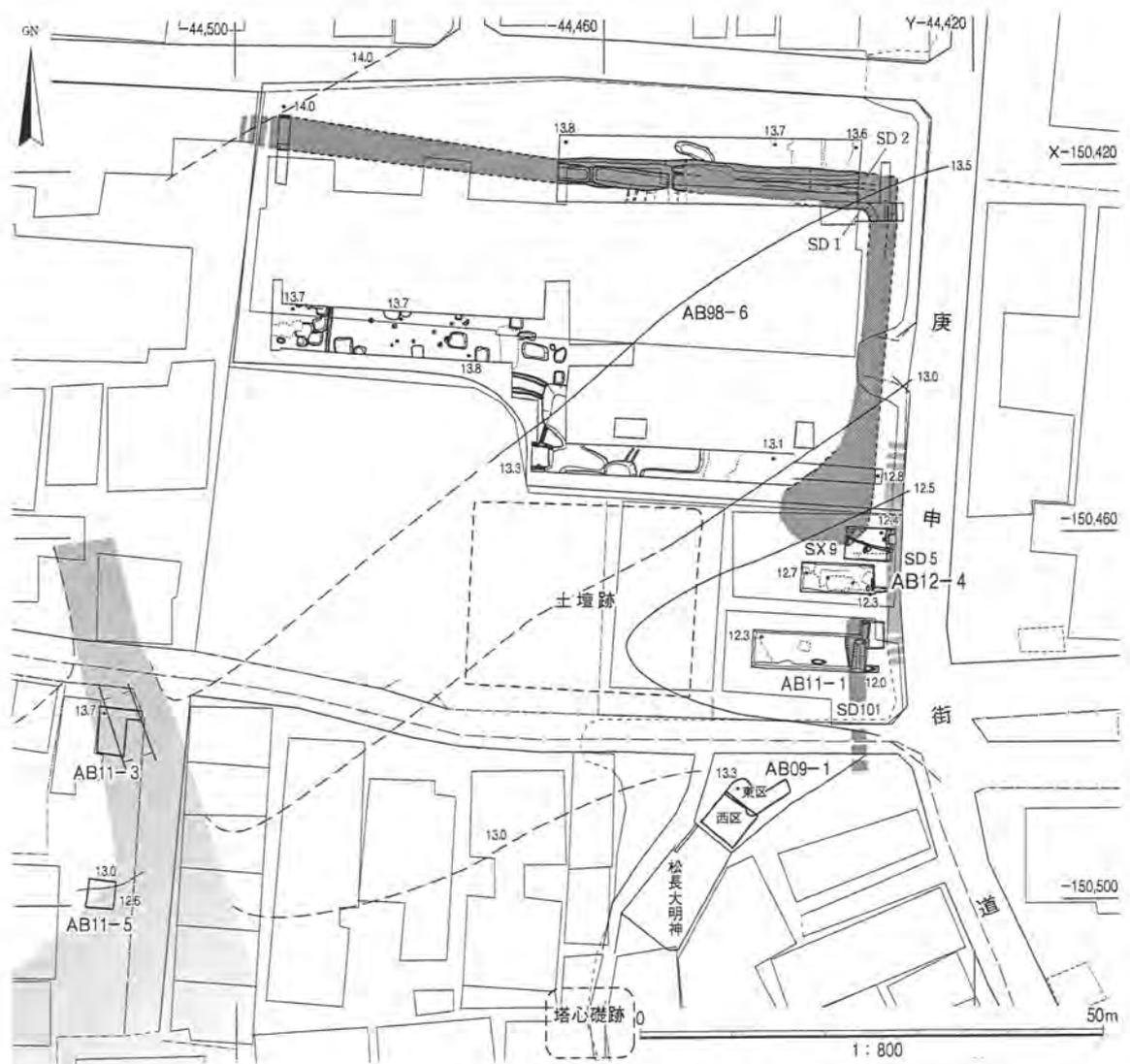


図6 阿倍寺周辺の地形と遺構配置状況

3) 調査成果の検討

i) 阿倍寺の占地と区画溝(図6・7)

調査地周辺の地山層上面の地形は図6のようになる。地山層の上面は削平を被っているのが、本来の地形を留めてはいないが、地勢としては概ねこのようなものであろう。一帯は北西から南東方向に緩やかに降る傾斜地で、本調査地とAB11-1次調査地の辺りは東から西へ入り込む浅い谷となっている。この谷は土採りなどによる後世の改作による可能性もある。南西はAB11-3・5次調査地で1mほど下がって低い地形となっている。AB11-3次調査では南南東方向へ延びる溝(SD201)が報告されているが、平面形は乱れており、谷である可能性もあろう。阿倍寺はこのような地形に立地しているのである。

今回調査地の南と北では阿倍寺伽藍地の東を画するとされる溝(AB98-6次調査のSD1・2、AB11-1次調査のSD101)が発見されている(図7)。寺院を構成する建物は中心伽藍だけではなく、その周囲に様々な建物を配した寺域があったとすれば、規模からみてこれらの溝で区画される空間を伽藍地とする考え方は妥当なものといえる。SD2は14世紀前半頃に埋まり、その後に掘られたSD1が16世紀に埋没し、この頃に寺も廃絶したと考えられている。SD1・2は南北に約40m以上延び、西へほぼ直角に曲がって東西に65m以上延びている。これが東面北部、北面のようすである。本調査地の南のSD101は14世紀に埋没しているのので時期的にみてSD2に連なり、東面南部をなすものとされる。

今回調査地はSD2・101の中間地点に当り、区画溝の連続が発見されるべき場所であったが、溝は存在しなかった(図7)。SD101の北端は溝が浅くなり、「陸橋」状を呈したと報告されているがそうではなく、本調査南区の南で階段状に浅くなって終わっていたとみるべきで、溝北端内部の段をなしている部分が陸橋のように見えたのであろう。また、SD1・2も本調査地内では直線的に連続してはいないが、年代的には本調査地のSX9がSD2に近く、一連の遺構と考えられる。AB98-6次調査地内でSD2(南側ではSD1・2の区別は明確でない)の西側は西へ屈曲して拡がっており、SX9はそれに平行するので、SD2の東側の肩で、南西に入り込みながら終わっているのであろう。南端は小規模な池状になっていたのかもしれない。つまり、本調査地の南と北で区画溝はそれぞれ途切れ、南区の辺りで幅8mほどの開口部となっているのである。これは伽藍地の出入り口とみられ、もしここに構造物があったとすればそれは伽藍地の東門というべきもので、ここからは約20m前方に土壇上の建物が見えたこと

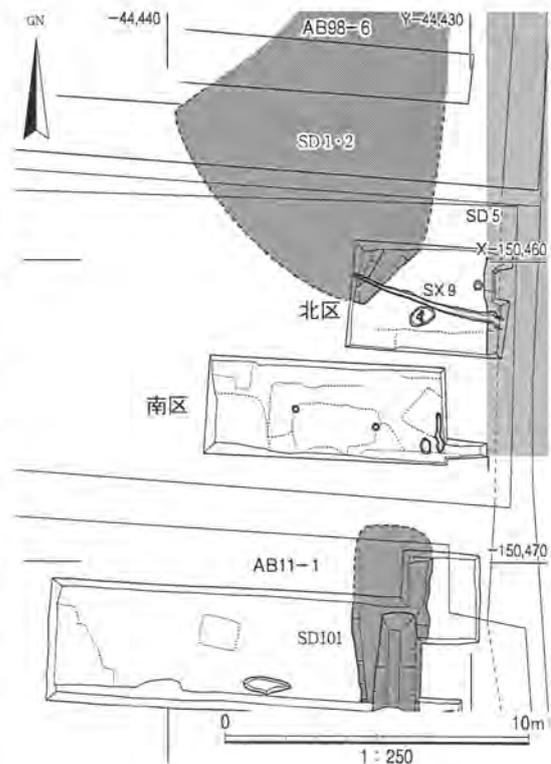


図7 遺構の連続状況

になる。あるいは伽藍地を東向きと考えると、ここが正門であった可能性もあろう。これが中世阿倍寺廃絶時のようすということになる。

仮にこの開口部が東面区画溝の中央にあったとすると、その南北長は約90mということになる。そうすると、南面区画溝は塔心礎の北を圍繞していたことになり、中世には塔は既に存在していなかった可能性がある。土壇も北面区画溝の中央から外れていることは明らかである。さらに、南面区画溝が北面のそれと同様な東西長をもっていたとすると、南西コーナー部は西の低地にかかることになり、伽藍外郭が整った長方形の平面形をもっていなかった可能性が高い。古代の阿倍寺が「阿倍寺千軒坊」といわれるに相応しい規模をもっていたとすると、これが衰退した中世阿倍寺伽藍地の外郭のようすだったといえよう。ただし、土壇と塔が古代の位置を保っており、それを圍繞する区画施設があったと仮定しても、やはりその一部が西の低地にかかっていた可能性が高く、典型的かつ整齊な四天王寺式伽藍配置[明山大華1933]が展開されていたのかは疑問が残る。自然地形に規制された中での伽藍配置をとっていた可能性にも注意を向けておくべきであろう。

ii) 庚申街道とSD5(図7)

調査地の東を通過する南北道路は「庚申街道」である(図6)。庚申街道は四天王寺南門に発し、同寺庚申堂の東を経て平野の川辺で古市街道に合流し葛井寺方面へ至った。庚申街道の名が定まったのは明治期も後半になってからであるが、それ以前でも「葛井寺道」などと呼ばれていたらしいので、19世紀代には幹線街道として認識されていたとみてよいであろう。

今回発見のSD5は庚申街道の西端に沿い、街道の道路側溝ないし街道と屋敷地を画する区画溝に相応しい位置にある。SD5は19世紀以降のSD7に切られるので、おもに機能していた時期は18世紀代とみられる。この頃にはすでに阿倍寺は完全に廃寺となっていたことであろう。SD5が側溝などの街道と関係する遺構であるとすれば、街道もこの頃に遡って存在したことになる。また、先に述べたように、今回調査地に阿倍寺伽藍地の西開口部が存在したとする想定が正しければ、それが面する道路があったはずで、庚申街道の前身道路が13~14世紀にはここを通過していた可能性が高い。その場合、SD5の方位が正南北よりわずかに北で西へ振れるのに対し、伽藍の東を画する溝の方位は東へ振れている。このことは、前身道路が中世までは難波京の町割の影響を残し、近世に至ってそれが払拭されたこととみられることも可能で、所謂「街道」が成り立つ一過程を示しているようにみえて興味深い。

4) まとめ

- ・ 今回の調査では中世の土壇状遺構SX9・SK8、近世のSD5・7を検出した。
- ・ SX9は阿倍寺廃絶期の東面北部区画溝の南端とみられ、調査地は伽藍地東側の出入り口に当たるとみられる。
- ・ SD5は庚申街道に係る側溝などの遺構に当る可能性があり、遺構の年代から、街道が18世紀に遡る可能性がある。また、伽藍地西側開口部の存在から、中世に遡る前身道路があった可能性も考えられる。
- ・ 地形復元図に照らして阿倍寺伽藍配置の検討を行った。その結果、自然地形に規制された配置をとる可能性がみとめられた。

引用・参考文献

明山大華1933、「阿倍寺塔心礎に就て」：『考古学雑誌』第23巻第12号、pp.51-52

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2000、「日新建物株式会社による建設工事に伴う発掘調査(AB98-6)」：『平成10年度 大阪市埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.69-80

大阪文化財研究所2012a、「阿倍野区松崎町二丁目における建設工事に伴う阿倍寺跡発掘調査(AB11-1)報告書」

2012b、「阿倍野区松崎町三丁目245-19における建設工事に伴う阿倍寺跡発掘調査(AB11-3)報告書」

2012c、「阿倍野区松崎町三丁目245-21における建設工事に伴う阿倍寺跡発掘調査(AB11-5)報告書」

北調査区全景
(南西から)



SD 5 (南から)



SD 5 と SD 7
(南東から)



阿倍野筋南遺跡発掘調査(AS12-2)報告書

調査個所 大阪市阿倍野区阿倍野筋5丁目3-44・3-90
調査面積 40㎡
調査期間 平成24年6月18日～21日
調査主体 公益財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所
調査担当者 次長 南 秀雄、岡村勝行

1) 調査に至る経緯と経過

大阪市阿倍野区に所在する阿倍野筋南遺跡は、南北に延びる上町台地の尾根筋に立地する弥生～江戸時代の複合遺跡である。現地表面の標高は約16～17mで、遺跡の東側は河内平野に向かって緩やかに下降する斜面地であるのに対し、西側は縄文海進の浸食により南北方向に急な波食崖が形成されている。

本調査地は阿倍野南遺跡の東南部にあり、阿倍野筋に接して位置する(図1・2)。北方ではAS89-1・98-2・7・99-3・4・06-2・10-1・3次調査などが行われ、庄内から布留式期にかけての竪穴建物・掘立柱建物が検出されている[大阪市文化財協会1999、大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2001・2008、大阪文化財研究所2010、大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2012]。このうち、AS98-2次調査では土錘、飯蛸壺、鉄製のヤスなど漁労関係の遺物が出土し、居住団体の活動の一端が窺える。また、古墳時代中・後期、中世の遺構も広く確認され、今回の調査区の北60mにあるAS99-3・4次調査では、6世紀中頃の溝、12世紀末～13世紀前半の鋤溝が検出されている。

大阪市教育委員会が2012年5月31日に行った試掘調査の結果、現地表面下約0.4mで、中世以前の可能性がある遺構が検出され、本調査を実施することになった。6月18日、敷地中央に長さ10m、幅4mの調査区を設定し、調査を開始した。現代盛土・第2層を重機によって掘削し、その後の掘下げはすべて人力によった。第4層上面で遺構の平面図や断面図の作成、写真撮影などの記録作業を行ったのち、同月20日に調査を終え、翌日埋戻しを行い、現地における作業を完了した。

以下、本文および挿図に示す標高は TP値(東京湾平均海面値)である。また、本報告書で用いた方位は、図2は現場で記録した街区図を1/2500大阪市デジタル地図に合成することにより得た世界測地系座標に基づいた座標北を基準にした。



図1 調査地位置図



図2 調査区配置図

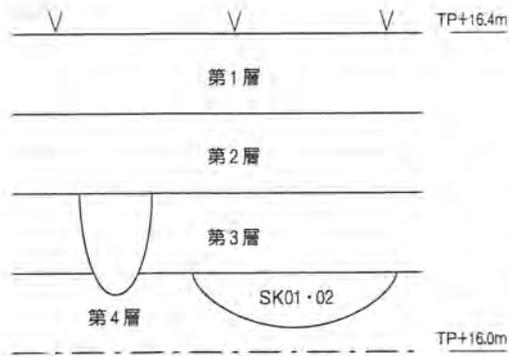


図3 層序模式図

2) 調査の結果

i) 層序

調査地の現地表面はTP+16.4~16.6mでやや東が高い。調査では現地表下約0.3~0.5m (TP+16.1m)までの地層を確認した。各層の岩相ならびにその特徴は次の通りである。

第1層：現代盛土・攪乱層である。

第2層：灰黄褐色(10YR4/2)シルトからなる盛土層で、層厚は約10cmである。遺物を含まず、時期は不明だが、周辺の調査成果から近世以降の可能性が高い。

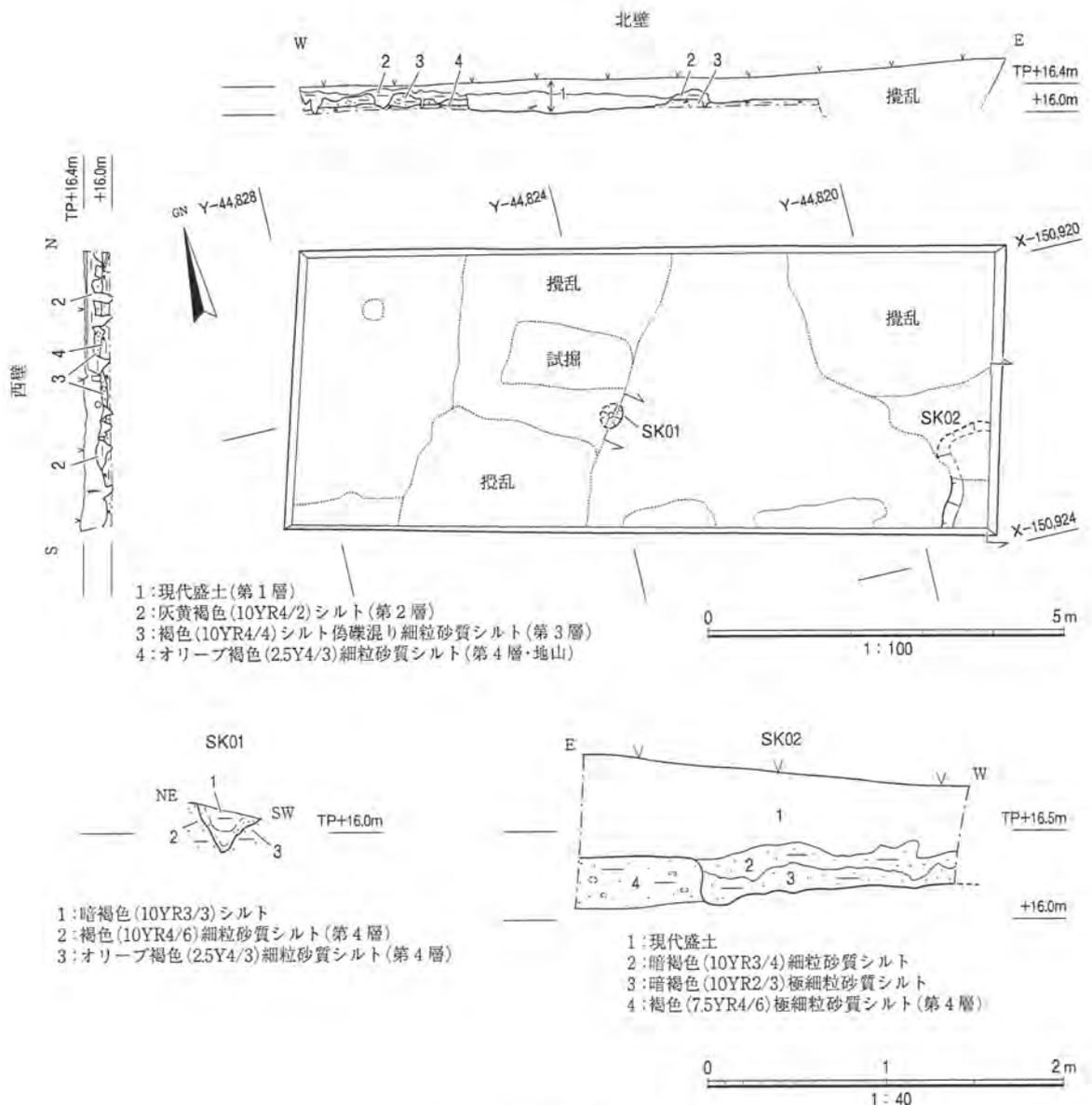


図4 検出遺構平面・断面図

第3層：第4層の偽礫を多く含む褐色(10YR4/4)細粒砂質シルトからなる。擾乱が著しい地層で、層厚は約10cmである。遺物は確認できなかった。上面で近世以降と考えられる耕作痕跡を検出した。

第4層：オリーブ褐色(2.5Y4/3)細粒砂質シルトからなる地山層である。上面でSK01、SK02を検出した。

ii) 遺構と遺物

SK01 調査区中央で検出した径0.3m、深さ0.3mの土壙で、埋土は暗褐色(10YR3/3)シルトである。偽礫を含まず、自然堆積している。遺物は確認できなかった。

SK02 調査区南東隅で検出した南北1.5m以上、東西0.7m以上、深さ0.3mの土壙で、埋土は暗褐色(10YR2/3)シルトである。偽礫を含まず、自然堆積している。土師器の細片を一点確認した。

周辺の調査から、SK01・02は弥生時代末～古墳時代に属する土壙の可能性はある。

3) まとめ

今回の調査面では、擾乱が多く、遺構面の半分近くが削平されている。その中で時期を特定できなかったが、弥生時代末～古墳時代に遡る可能性のある2基の遺構を確認することができた。北方でこれまで実施された調査区より、遺構・遺物はやや希薄な傾向が窺え、調査地は弥生・古墳時代集落の縁辺部にあることを意味しているのかも知れない。

引用・参考文献

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会

2001、「駒井勝治氏による建設工事に伴う阿倍野筋遺跡発掘調査(AS99-4)報告書」：『平成11年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.75-79

2008、「阿倍野筋南遺跡発掘調査(AS06-2)報告書」：『平成18年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』 pp.87-95

大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2012、「阿倍野筋北遺跡B地点発掘調査(AS10-3)報告書」：『平成22年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』 pp.375-380

大阪市文化財協会1999、「阿倍野筋遺跡発掘調査報告書」

大阪文化財研究所2010、「阿倍野区阿倍野筋四丁目における建設工事に伴う阿倍野筋南遺跡発掘調査(AS10-1)報告書」

杉本厚典1999、「阿倍野筋遺跡で見つかった大型掘立柱建物跡」：大阪市文化財協会編『葦火』78号、pp.4・5

辻美紀1998、「大型堅穴住居と朱入り土器」：大阪市文化財協会編『葦火』73号、pp.4・5

寺井誠1998、「海を見おろすムラ阿倍野筋遺跡」：大阪市文化財協会編『葦火』77号、pp.4・5

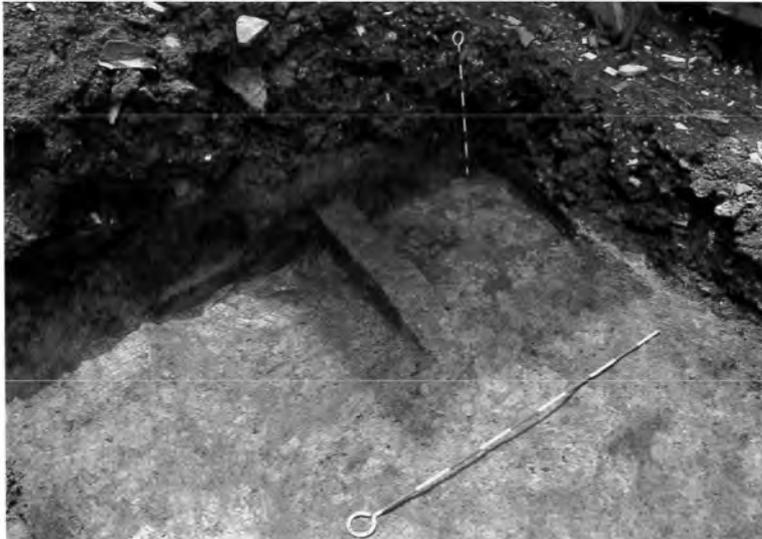
調査区全景(東から)



調査区全景(西から)



SK02(北西から)



桑津遺跡発掘調査(KW12-2)報告書

調査個所 大阪市東住吉区桑津5丁目1-10・1-11
調査面積 24m²
調査期間 平成24年5月31日～平成24年6月1日
調査主体 公益財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所
調査担当者 次長 南 秀雄、高橋工、櫻田小百合

1) 調査に至る経緯と経過

桑津遺跡は大阪市東住吉区桑津・駒川・西今川・北田辺に所在し、東西約750m、南北約870mに広がる旧石器時代から中世にかけての複合遺跡である。今回の調査地は桑津遺跡西部の標高約6.8mの地点に位置する(図1)。周辺のおもな調査としては、KW87-23・KW90-22次調査があげられる[大阪市文化財協会1998]。KW87-23次調査では、古代・中世の溝のほか、弥生時代中期後半に掘削され古墳時代に掘りなおされた可能性のある大溝が検出されている。KW90-22次調査では、弥生時代中期の方形周溝墓、奈良時代の掘立柱建物が検出されている。

今回の調査は、建設工事に先立ち大阪市教育委員会が平成24年5月23日に試掘調査を行った結果、遺構・遺物が確認されたため本発掘調査を実施したものである。調査地の南部に東西8m、南北3mの調査区を設定し(図2)、平成24年5月31日から6月1日の2日間で行った。

調査は、まず現代の整地層である第0層および部分的に堆積する第1層を重機により慎重に掘削し、その後、遺構検出および遺構の掘下げを人力により行った。記録作業は、平面図(縮尺1/20)、地層断面図(縮尺1/20)、遺構断面図(縮尺1/10)の実測、および写真撮影により行った。また、基準点はMagellan社製ProMark3により測位し、本報告で用いた方位は世界測地系に基づく座標北を基準とした。標高はT.P.値(東京湾平均海面値)でTP+〇mと記した。

2) 調査の結果

i) 層序(図3)

調査地の現況地形はほぼ平坦である。現代の整地層の下位に第1層が堆積しており、その下位には



図1 調査地位置図



図2 調査区位置図

段丘の構成層である第2層が存在した。

第0層：現代の整地層で層厚は8～20cmを測る。

第1層：わずかに細礫の混じる褐色(10YR4/6)極細粒～細粒砂質シルトからなる作土層である。最大層厚は調査区南部で28cmであったが、調査区北部では分布しないところもあった。出土遺物はいずれも小片で弥生土器・土師器・須恵器・埴輪が出土している。第1層から出土した遺物の中には

中世以降のものと明確に確認できる遺物は含まれていなかったものの、第2層上面遺構のSX01が14～15世紀の遺構と考えられることから、第1層はそれ以降の堆積である。

第2層：わずかに粗粒砂・極粗粒砂が混じる黄褐色(10YR5/6)極細粒～細粒砂質シルトからなる段丘構成層で、この層以下は無遺物層である。

ii) 遺構と遺物(図4～6)

遺構は地山である第2層上面で検出した。検出した遺構は落込み1基(SX01)・溝1条(SD02)・土塀1基(SK03)・小穴1基(SP04)である。SP04は第2層上面で検出したが、調査区南壁の地層の観察から第1層上面の遺構であることが確認できた。

SX01 調査区中央南半で検出した落込みである。規模は東西4.89m以上、南北1.28m以上である。遺構は調査区南端部で急激に深くなっており、中心部は調査区南端部から調査区外にあると考えられる。遺構の掘下げは検出面から約80cm、TP+5.7m付近まで行ったが、遺構の底を確認することはできなかった。遺構内の埋土は1～3層に区分した。最終堆積層である1層は細～中礫が混じる褐色(10YR4/6)・浅黄色(2.5Y7/4)中粒砂からなり、偽礫を含んでいることから人為的に埋められたものと推定される。2層は黄褐色(10YR5/6)シルト質粘土からなる。3層はわずかに極粗粒砂が混じる褐色(10YR4/6)細粒～中粒砂質シルトからなり、粘土のラミナが確認できる。2・3層はいずれも遺構の形状に合うかたちで平行なラミナが確認できることから自然に堆積したものである。遺構の形状や深さなどから井戸と考えられるが、井戸側などは確認できなかった。

出土遺物には、埴輪片1・須恵器杯蓋2・瓦器片・瓦質土器鉢3・瓦・土師器等細片がある。これらの遺物は幅広い時期のものを含んでいるが、遺構の時期はこの中で最も新しい瓦質土器の示す14～15世紀と考えられる。

SD02 調査区西半で検出した幅0.24～0.40m、深さ0.06mの東西方向の溝である。溝の埋土は地山偽礫からなり、人為的に埋められたものである。出土遺物は、土師器細片・須恵器細片・埴輪4・5が出土している。埴輪はいずれも小片であるが、円筒埴輪と推定されるものと形象埴輪がある。これらの埴輪は、野焼き焼成のものと窯焼き焼成のものを含んでいることから時期差がある可能性が考えられるものの、小片のため時期の断定は困難であった。また、形象埴輪5については、家形埴輪もしくはほかの器財埴輪の可能性が考えられるものの特定はできなかった。これらの埴輪は客土に含まれるものであり、遺構の時期を示すものではない。また、このほかに出土した土師器・須恵器がとも

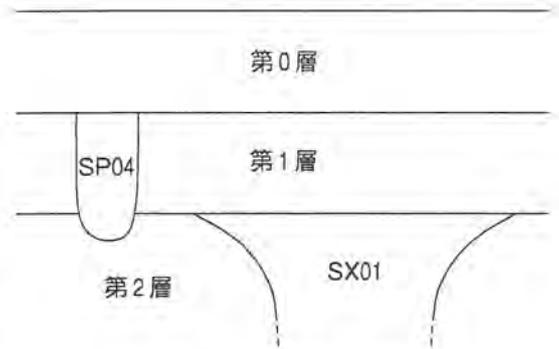


図3 地層と遺構の関係図

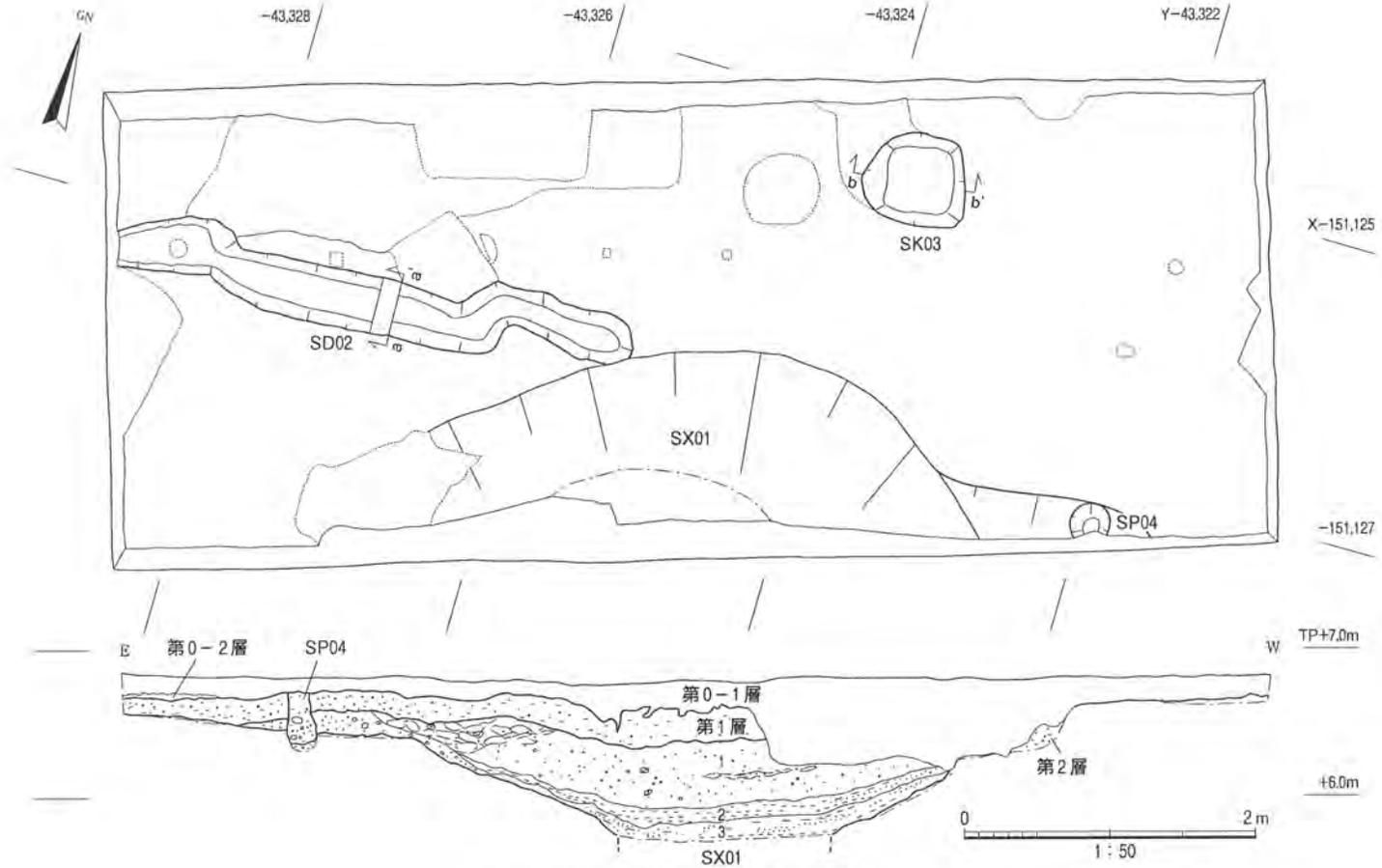


図4 遺構平面図、調査区南壁地層断面図

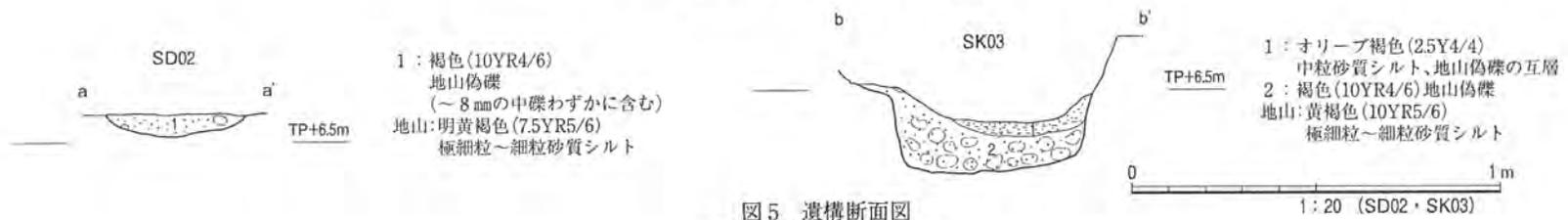


図5 遺構断面図

に細片であることから、遺構の時期について限定するのは困難である。

SK03 東西0.64m、南北0.64m、深さ0.25m以上の方形の土壙である。この土壙の上面は攪乱により壊されていたため、遺構の正確な掘込み面は不明である。遺構の埋土は1・2層に区分した。下部の2層は地山偽礫からなり人為的に埋められている。上部の1層は中粒砂質シルトと地山偽礫層が互層になっており、周辺の地山が流れ込み、その後中粒砂質シルトが溜まるということが繰り返されて堆積したものであると推定できる。出土遺物は弥生土器細片1点・土師器細片1点のみであり、これらの遺物が直接遺構の時期を示すかは不明である。このうち弥生土器細片については、茶褐色を呈し角閃石と雲母を含む生駒西麓産の胎土である。

SP04 直径0.28m、深さ0.36mの小穴である。遺構埋土は、オリーブ褐色(2.5Y4/4)極細粒～細粒砂質シルトからなり、シルト質粘土の偽礫を含む。遺物は出土しなかったが、第1層上面の遺構であることから14～15世紀以降の遺構である。

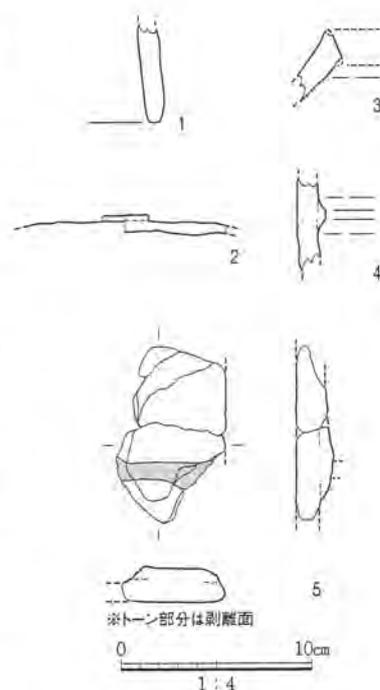


図6 出土遺物実測図
SX01(1～3)、SD02(4・5)

3) 調査地周辺の古墳について(図7)

これまで、桑津遺跡周辺における古墳については、古地図などから大塚・赤塚・罐子塚の三塚が古墳の可能性があることが指摘されていた[新修大阪市史編纂委員会編1988]。これらの塚は1762(宝暦12)年の「摂津住吉郡桑津村古地図」[桑津郷土史研究会1982]から、桑津遺跡の西端部周辺とさらに西側に位置したものと推定される。これに対し、これまでの桑津遺跡における埴輪出土地点は遺跡東半部の段丘東斜面の標高4～5m付近に集中していたことから、発掘調査成果とこれら三塚を直接的に結びつけることはできなかった。

2009年に桑津遺跡の西側の美章園2丁目で行われたBI08-1次調査では、罐子塚推定地のすぐ西側で埴輪片を出土したことから、これらの塚が古墳であった可能性を初めて考古学的に示すことができた[大阪市文化財協会2010]。

今回の調査地は三塚のうち赤塚推定地のすぐ東にあたり、出土した埴輪と赤塚の関連が推定される。今回出土した埴輪は古墳が削平あるいは崩れた際に散乱したものである可能性が推測できる。今回のこのような調査成果により、桑津の三塚が古墳であった、あるいはその周辺に古墳があった可能性がより高まったと考える。このことは、これまでの埴輪出土地点が段丘東斜面に集中している成果と合わせて考えると、桑津遺跡周辺に三塚周辺と段丘東斜面の2箇所の古墳群があった可能性を推定させるものであり、桑津遺跡周辺の古墳時代の様相を考える上でも重要な資料が得られたものとする。

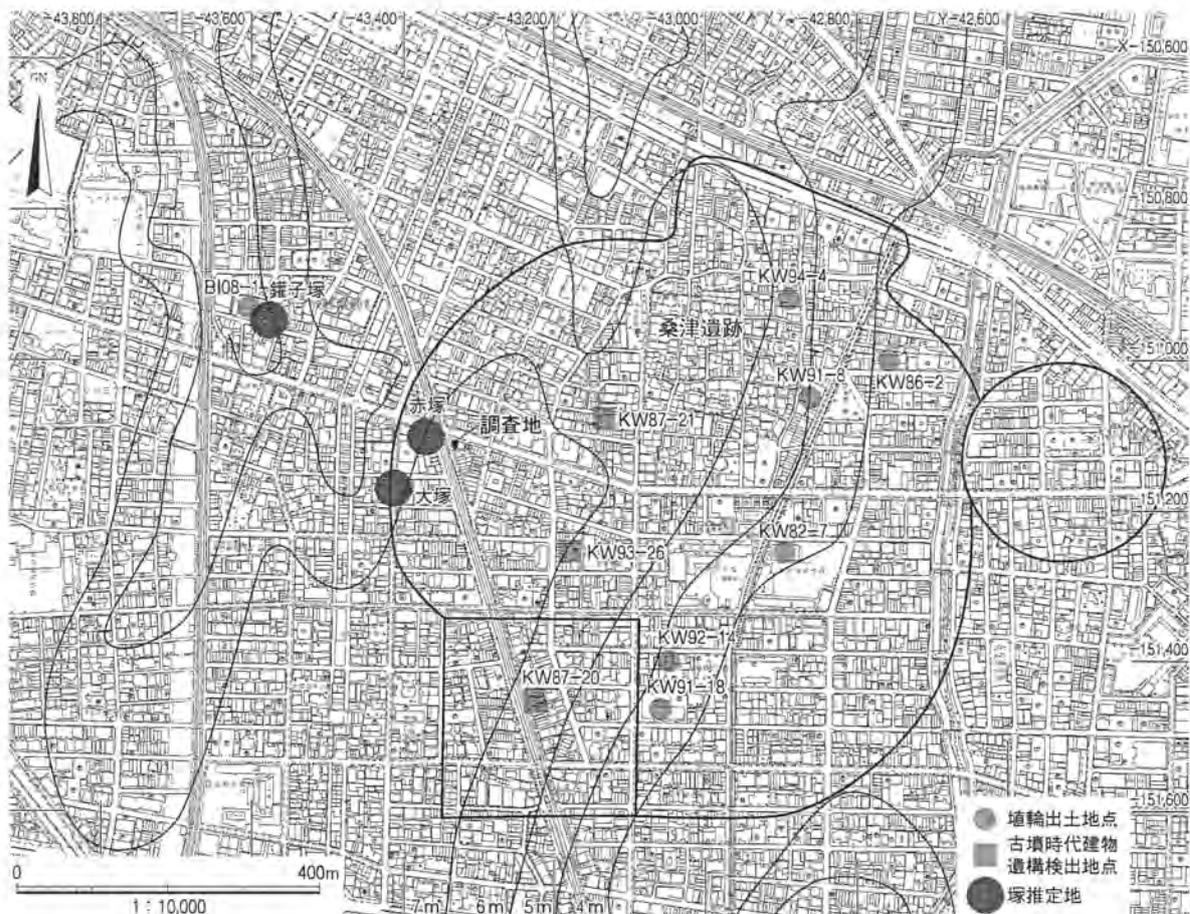


図7 三塚推定地と埴輪出土地点

4) まとめ

今回の調査では、中世の井戸と推定される落込みのほか、溝・土壇・小穴を検出した。これらの遺構のうち落込みと溝からは埴輪片が出土している。なかでも溝からは複数の埴輪のものと考えられる埴輪片が出土したことから近隣に古墳があった可能性が高いことを指摘した。

引用・参考文献

桑津郷土史研究会1982、『桑津郷土史』

新修大阪市史編纂委員会編1988、『新修大阪市史』第1巻

大阪市文化財協会1998、『桑津遺跡発掘調査報告』

大阪市文化財協会2010、『阿倍野区美章園二丁目における埋蔵文化財発掘調査(BI08-1)報告書』：『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2008)』

調査区全景
(東から)



南壁地層断面
(北東から)



SX01断面
(北から)



亀井北遺跡発掘調査(KK12-2)報告書

調査箇所 大阪市平野区加美南2丁目23-1の一部
調査面積 15㎡
調査期間 平成25年2月27日～2月28日
調査主体 公益財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所
調査担当者 次長 南秀雄・田中清美

1) 調査に至る経緯と経過

調査地は弥生時代から江戸時代にかけての集落遺跡として知られる亀井北遺跡の西北部に位置しており、北側には加美遺跡が拡がっている(図1)。

本調査に先立って大阪市教育委員会が平成24年3月28日に実施した試掘調査では現地表下約1.7m以下から江戸時代以前の遺物包含層や遺構面が確認されたため、調査を行うことになった。

調査範囲は当初建物の建設予定地内に南北約6m、東西約5mの予定であったが、掘削残土の置き場を確保するため南北3m、東西5mとした(図2)。調査は2月27日にまず、重機を用いて現代の盛土および作土層を約0.8m掘削したあと、重機を併用しながら第2・3層を人力で掘り下げて第4層上面で水田の調査を行った。第4層の上面では鋤溝や鋤の痕跡をはじめ、サンドパイプを確認、これを記録した。引き続き2月28日から暗色化した第5層で遺構や遺物の検出を試みたがともに確認できなかった。それ以下の各層は水成層であったので、重機を用いて掘削しながら遺物の採集を行った。なお、現地表下約3.2mまで深掘りを行ったが湧水が著しいため、これ以下についての調査は断念した。同日、地層断面の写真撮影および実測図を作成したあと、ただちに埋戻しおよび整地を行い、調査機材を撤収して現地におけるすべての調査を完了した。

以下、本文および挿図に示す標高はTP値(東京湾平均海面値)で、TP+〇mとした。また、方位は、図1が座標北、図2・4は調査で記録した現地の現況図を1/2500大阪市デジタル地図に合成して得た世界測地系座標に基づく座標北を基準にした。

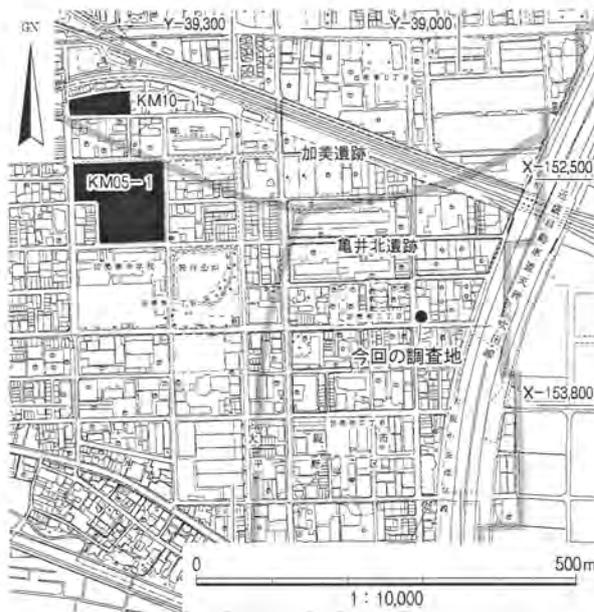


図1 調査地位置図

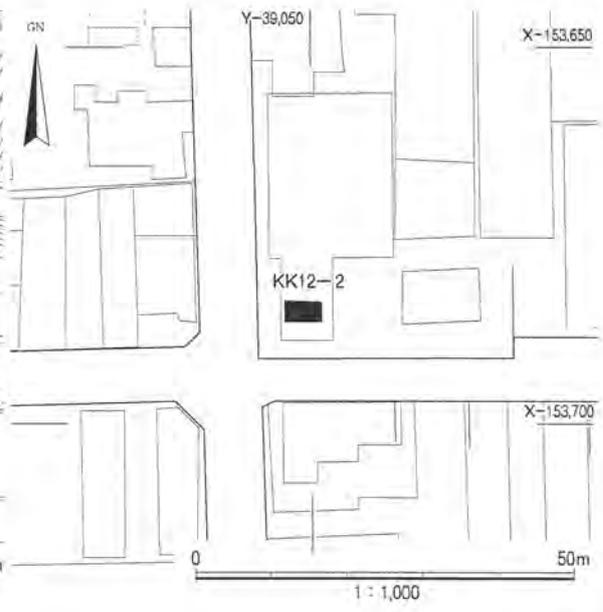


図2 調査区配置図

2) 調査の結果

i) 層序

本調査では北壁および西壁で地層の堆積状況を観察し、写真撮影ならび実測図を作成した。調査地の地表面の標高はTP+7.4m前後あり、現代の盛土の層厚は40～70cmで、溶鉱炉の炉壁片や焼土などを多く含むにぶい黄褐色(10YR5/4)細礫混り粗粒砂質シルトである。以下、第1層から第8層について報告する(図3)。

第1層：本層は上下2層からなる現代の作土層で、上部層の褐灰色(10YR4/1)極細粒砂質シルトの層厚は5～10cmある。下部層は褐灰色(10YR4/1)シルト質細粒砂で、層厚は10～30cmある。本層の上面の標高はTP+6.8～7.0mあり、ほぼ平坦な面をなす。

第2層：本層は上下2層からなる層厚が30cm前後の作土層で、上部層はオリーブ灰色(5GY5/1)細礫混りシルト質細粒砂、下部層はシルトの偽礫を多く含むオリーブ灰色(2.5GY5/1)中粒～細粒砂である。本層の年代は遺物が出土しなかったことから断定しがたいが、上下の層準を考慮すると江戸時代の可能性が高い。

第3層：オリーブ灰色(10Y5/2)シルト質極細粒砂からなる水成層で、層厚は5cm前後ある。本層は第2層の耕作で攪拌されており、残りは悪い。

第4層：本層は上下2層からなる層厚が20～40cmの作土層である。上層は暗緑灰色(7.5GY4/1)シルト、下層は灰オリーブ色(7.5Y5/2)細粒砂質シルトである。上層の上面では耕作時の鋤痕や鋤溝をはじめ、巣穴とみられる直径1cm前後のサンドパイプが確認された。本層の時期も遺物が出土しなかったことから確定しがたいが、近くにある加美遺跡のKM10-1次調査区[大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2012]の基本層序を参考にすると江戸時代とみて大過ないであろう。

第5層：灰オリーブ色(7.5Y5/2)シルト質細粒砂、灰色(7.5Y5/1)極細粒砂質シルトからなる暗色化した地層で、層厚は10cm前後ある。本層の標高はTP+6.1m前後あり、ほぼ平坦な面をなす。

第6層：灰色(10Y5/1)細粒砂～シルト質細粒砂、灰色(7.5Y4/1)シルト、灰色(7.5Y5/1)シルトからなる水成層で、層厚は20cm前後ある。本層の中程(TP+5.8m付近)では地震による水平方向のずれや砂脈が確認された。

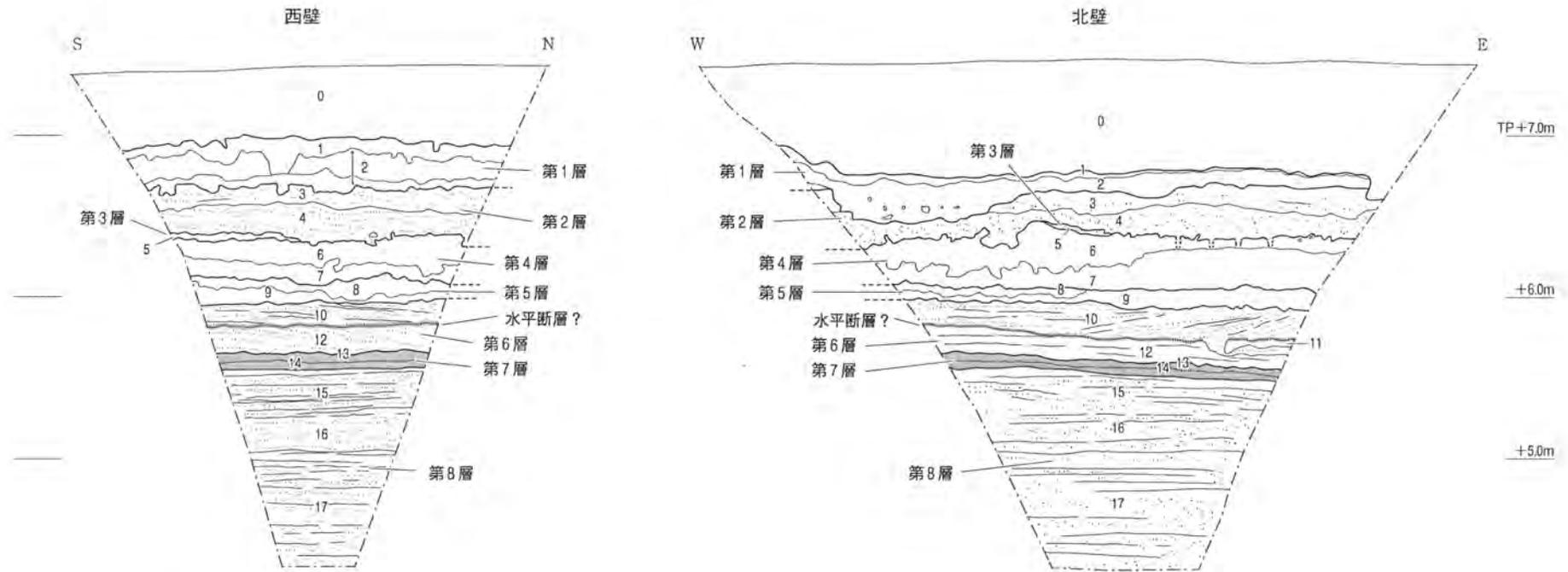
第7層：黄灰色(2.5Y4/1)シルトと落葉広葉樹の葉・小枝をはじめ、植物遺体からなる水成層でピート質である。層厚は10cm前後ある。本層は調査地の北西に位置するKM10-1次調査区の第10層に相当する地層であろう。

第8層：灰色(5Y4/1)シルト質細粒砂、灰色(7.5Y4/1)細粒砂～シルト質細粒砂、オリーブ黒色(10Y3/1)極細粒砂質シルトからなる水成層で、層厚は120cm以上ある。

ii) 遺構と遺物

本調査では第4層を作土とする水田の調査を実施した。作土層の上面では南北方向の2条の鋤溝を確認したほか、これの東に沿うように形成された上幅0.2～0.4m、高さ約0.1mの南北方向の畦畔SR401の上面で幅0.1m前後の鋤による耕作痕を検出した(図4・写真図版中・下段)。

一方、畦畔の東側の作土の上面では直径1cm前後のサンドパイプ群(写真図版下段)を確認したが、



- 0 : におい黄褐色 (10YR5/4) 細礫混り粗粒砂質シルト (現代盛土)
- 1 : 褐灰色 (10Y4/1) 極細粒砂質シルト (現代作土層: 第1層)
- 2 : 褐灰色 (10Y4/1) シルト質細粒砂 (現代作土層: 第1層)
- 3 : オリーブ灰色 (5GY5/1) 細礫混りシルト質細粒砂
(江戸時代の作土層: 第2層)
- 4 : オリーブ灰色 (2.5GY5/1) 中粒~細粒砂
(江戸時代の作土層: 第2層)
- 5 : オリーブ灰色 (10Y5/2) シルト質極細粒砂 (水成層: 第3層)
- 6 : 暗緑灰色 (7.5GY4/1) シルト (江戸時代の作土層: 第4層)
- 7 : 灰オリーブ色 (7.5Y5/2) 細粒砂質シルト
(マンガン・鉄分多く含む・江戸時代の作土層: 第4層)

- 8 : 灰オリーブ色 (7.5Y5/2) シルト質細粒砂 (鉄分含む: 第5層)
- 9 : 灰色 (7.5Y5/1) 極細粒砂質シルト (暗色化している: 第5層)
- 10 : 灰色 (10Y5/1) 細粒砂~シルト質細粒砂 (水成層: 第6層)
- 11 : 灰色 (7.5Y4/1) シルト (水成層: 第6層)
- 12 : 灰色 (7.5Y5/1) シルト (水成層: 第6層)
- 13 : 黄灰色 (2.5Y4/1) シルト (ビート質: 第7層)
- 14 : 黄灰色 (2.5Y4/1) シルト (ビート質: 第7層)
- 15 : 灰色 (5Y4/1) シルト質細粒砂 (水成層: 第8層)
- 16 : 灰色 (7.5Y4/1) 細粒砂~シルト質細粒砂 (水成層: 第8層)
- 17 : オリーブ黒色 (10Y3/1) 極細粒砂質シルト (水成層: 第8層)

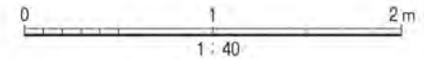


図3 西壁・北壁地層断面図

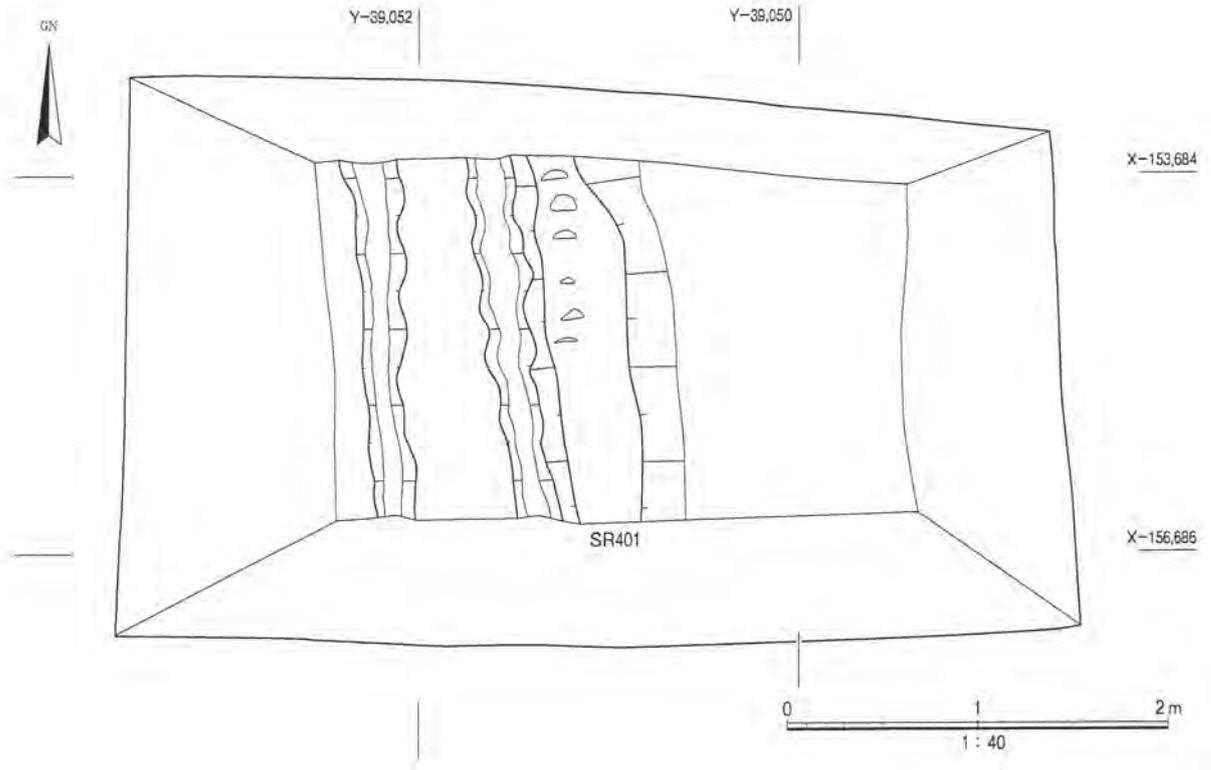


図4 第4層上面検出遺構平面図

これを残した生物については確定しえなかった。

第4層水田の年代については、遺物が出土しなかったことから断定しがたいが、既述したように江戸時代の可能性が高い。

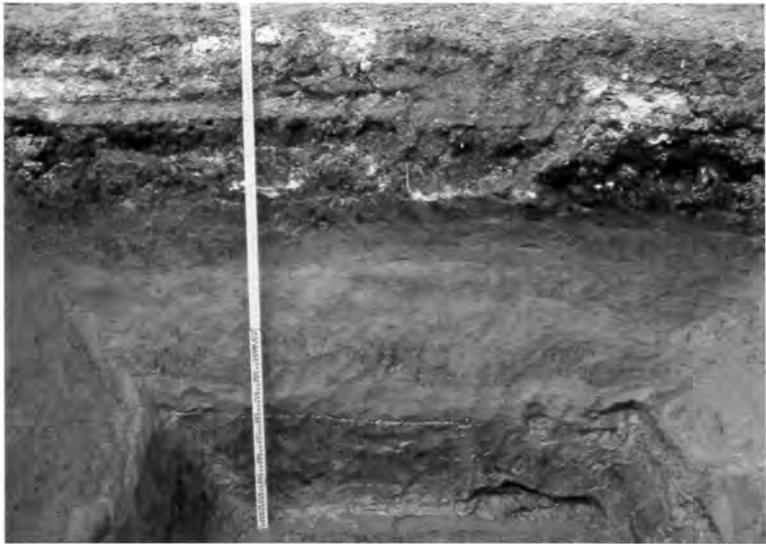
3)まとめ

今回の調査では江戸時代の水田を検出したほか、鋤溝および鋤による耕作痕を確認することができた。また、現地表下約3.2mまでの地層の堆積状況についても明らかとなったが、これらの資料は加美遺跡の東南部から亀井北遺跡にかけての基本層序を確立する際の資料として欠かせないものである。今後周辺部での調査が進めば、当地域における江戸時代以前の具体的な状況が明らかになるものと思われる。

参考文献

- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2006、「加美遺跡発掘調査(KM05-1)報告書」『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』(2005)、pp.293-300
- 大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2012、「平野区加美南一丁目における建設工事に伴う加美遺跡発掘調査(KM10-1)報告書」『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』(2010)、pp.411-418

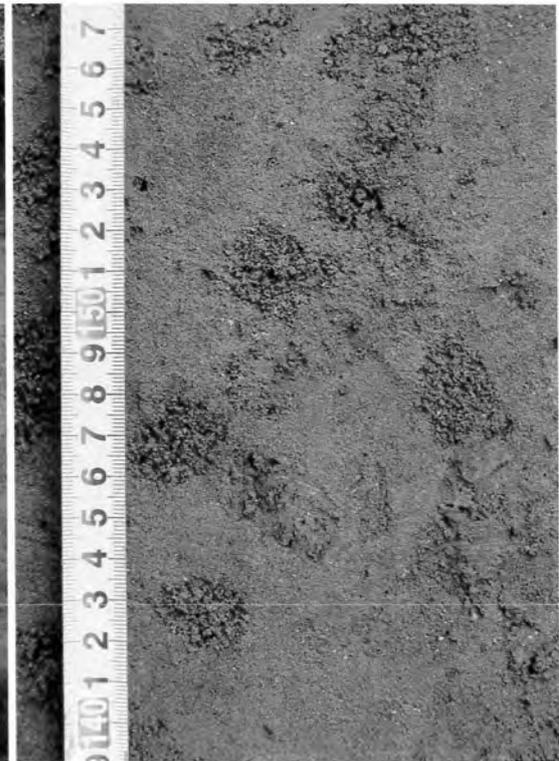
北壁地層断面
(南から)



第4層上面水田の検出状況
(東から)



第4層上面水田鋤溝および畦畔全景(南から)



第4層上面検出サンドパイプ

平成 24 年度 大阪市内埋蔵文化財
包蔵地発掘調査報告書

発行日 平成 26 年 3 月 31 日

発行 大阪市教育委員会
(公財)大阪市博物館協会大阪文化財研究所

編集 大阪市教育委員会文化財保護担当
(大阪市北区中之島1-3-20)

印刷 株式会社フォーラムK
